



# 案山子



2019年冬号

新潟大学文芸部

## 目次

---

### ◆お題作品『草』

- ・ 大草原、朱に染めて 香月日向
- ・ 物言わぬ草 佐藤央弥
- ・ 巡環する ユルング

### ◆アンソロジー作品

- ・ ルーカス・ウォーカーの旅立ち 笠原ざわ
- ・ カモミールの約束 佐久間佳雪
- ・ コップの中の嵐 木目
- ・ Alex 大島治輔
- ・ 出会い（パン・ガンティの言い伝えより） 山羊沢 優弥
- ・ 大馬鹿者 中村

### ◆通常作品

- ・ お前はその目に何を映す 笠原ざわ
- ・ 結った髪を切る 香月日向
- ・ ラブレターボックス 如月深琴

・ある月曜日の話

炬燵猫

・025 Not Found

守目冥人

・美しい写真

全国名字ランキング7位

・枯れない愛

大島治輔

・色彩

小川 史夏

・ピー

かりん

・『主従の秘密メイドの花園』

瀬戸若菜

# 第二十九回お題作品集

## お題「草」

## 大草原、朱に染めて

---

大草原、朱に染めて

香月日向

風に吹かれて乾き、色あせてしまった草。

そのまま、息さえしなくなる。

もぞもぞと動く黒い影。

草がずっと影を見つめる。

パン。影が弾けて、赤黒い水溜まりになる。

水溜まりを一つ作り終えると、草はまたカサカサと風に揺られ始めた。

「ここにいたんですね」

サクサクと枯草を踏む音が草に迫ってきた。草に話しかける声。

「帰りましょう」

草に帰る場所などない。草は目もくれない。

「もう戦争は終わりましたよ」

声は尚も草に語り掛ける。草には答える口はない。

「みんな、うちに帰りましたよ」

声はみんな帰ったと言った。でも、みんなとは誰だろう。草には考える必要はない。

「もう戦争は終わりましたよ」

同じことを繰り返し言う声。

「みんな平和になったんですよ」

みんな、へいわ、せんそう。草にはどれも意味をなさない。

「平和になったんなら、あれはなんだ？」

草の根本の口が、声に向かって問う。

「今お前を殺そうとする、あいつらはなんだ？」

「ころそうと、する？」

なんのことだかさっぱり。声はそう言っているようだ。

ちょうど水風船が弾けるような破裂音がする。直後に生温かい液体が草を濡らす。

草になりきるのを止め、俺は声の主の方を見る。そこには、綺麗な紺色の軍服を血に染めた男が倒れていた。

「か……かっか……っこへえ……」

胸部を衝撃波でめちゃくちゃに引き裂かれた男は、苦しそうに肺に残った最後の空気を吐き出している。

撤退命令を伝えに来た男が死んだ。これでやっと静かになった。内乱にちょっかい出して、収集付かなくなったら撤退。ほんとに机の上で「戦争」してる政治屋さんはお気楽だぜ。

俺は、「戦場」で「戦争」してんだよ。

俺は急いで草むらの中を匍匐前進する。射撃位置は相手にばれている。

僅かにくぼんだ場所に、背の高い草が茂っている。俺は茂みに入る。

愛銃M110スーパーSASS（セミオートスナイパーシステムの略称）のサイトスコープを覗く。さっき撃ってきたヤツ、どこに居やがる。いた。低木の影に、反体制派のシンボルである赤いバンダナを巻いた男がSVDドラグノフ狙撃銃を構えて潜んでいる。距離はざっと一七〇〇メートル。殺れるか。俺はM110に聞く。もちろんさ、と答える愛銃。二キロ離れた目標を数センチの誤差で射貫けるコイツと、「枯草色の死兆星」と呼ばれた俺が組めば、殺れるはずさ。

全身の筋肉を弛緩させ、地面にしっかりと体を付ける。肩に密着させたストック。そこから前に真っ直ぐ延びるバレル、照星、サイトスコープと俺の視線を一直線につなぐ。

照準。レンズの中には、赤いバンダナ。

風向き、重力、地球の自転。誤差修正完了。

息を止め、引き金を引く。

枯草の中から、眩いマズルフラッシュが瞬いた。

あとがきという名の何か

死兆星は、北斗七星にある小さい星です。年取ると老眼で見えなくなるので、「見えなくなると死ぬ星」と言われていました。

世紀末な人々にとっては「見えたら死ぬ星」として恐れられていました。「死兆星が見えるか？お前はもう死んでいる」みたいな感じで使っていたらしいです。

物言わぬ草

佐藤央弥

五月晴れの青空が心地よい、そんな昼下がりだった。

関東平野の辺縁に、鄙にしては発展した町がある。駅と庁舎がある中心部には、十階程度の建物が林立し、大通りでは多くの労働者と住民で殷賑な活気を生み出していた。

その周辺は、平日の昼過ぎ特有の閑静な宅地が、新緑に染まった山陵の裾まで広がっている。

山陵に踏み入ると、裾野の街並みの喧騒が実際よりも遥かに遠いものとなる。人間界を隔絶する木々の城塞、その中に小さな古民家がひっそりと佇んでいる。

腐食したトタン屋根、塗装の剥落した外壁。周囲の旺盛な新緑の木々に飲み込まれて、今にも押し潰されそうな、そんな陋屋だった。

家の中では六畳の和室に、老翁と若い男が座卓を挟んで向かい合っていた。

「ご存じの通り、私は咎人です」

老翁は口を開いた。

その顔面に刻まれた皺は深く、いくつもの染みと白く褪せた髪色は、彼が並々ならぬ苦境と貧窮の中にあることを伺わせた。だが、生来の柔和な顔立ちと穏やかな語り口のためか、何処にでもいるような好好爺といった雰囲気だった。

老翁は続ける。

「私は罪を犯しました。決して許されないような重い罪を。ですから、服役が終わった今も、このあばら屋で贖いの日々を過ごしているのです」

老翁は背筋を伸ばし、真っ直ぐに話し相手を見つめた。そして、三度口を開く。



「これからお話する私の過去はお恥ずかしいものですが、これを元に、貴方が手づからお書きになったものが、年若い誰かの、何かしらのお役に立てば、この上ない喜びであると存じます」

一通り言い終えると、老翁は湯飲みを啜った。

話し相手の男は、黙然として聞いていた。

歳は二十五六ほどに見え、黒のスーツを着こなし、縁なしの眼鏡と鋭い双眸は、伶俐な若者といった風貌だ。彼は作家だった。

老翁が湯飲みを置くと作家は、

「宜しく願います」

と言って、軽く頭を下げた。

老翁は「では」と前置きした後、

「私の人間形成は、他愛もないような草と共にありました」

そう言うと、追懐するように瞑目した。

十歳の真夏のことだった。

私の生家は狭隘な山間部の集落にあり、農民にしては比較的余裕のある生活を送っていた。

長兄のように勉学に励むでもなく、姉のように幼子の面倒を見るでもなく、他の兄弟のように家の仕事を手伝うこともなく、私は用水路に釣りに出掛けた。両親は滅多に叱ることはなかった。兄弟の中では、私が最も釣りが上手く、私の釣果が夕餉に並ぶからだった。

小高い崖の上の集落から、低地の田圃に向かう。茹だるような炎暑の中、日差しの当たる場所

には魚影がない。よって、狙い目は日陰だった。

目的の水路に到着すると、まずは蛙か沢蟹を捕獲する。針金を曲げて釣糸を縛り、餌と重りを付ける。それを適当な場所に静かに沈め、釣糸の端を枝にくくりつけた。

魚が掛かるまでは、他の場所で鮒を釣るか、鱒を掬うかして、時間を潰した。

しばらくして、仕掛けを沈めた場所に戻った。茶色に濁った水路から慎重に仕掛けを引き揚げる。釣糸の先のずっしりとした手応えを感じ、未だ見えない獲物を期待して心踊った。

針には、一尺ほどの鯰が掛かっていた。望外の大物だった。

私は逸る心を制して、水を汲んだバケツに鯰を落とさないよう慎重に入れた。するとすぐに、鯰は真っ白な腹を上にして浮かび上がってきた。

鯰が死んでしまったと思った。私は何の気なしに、バケツにぷかぷかと浮かぶ鯰を掴み上げた。

だか、その行為は迂闊だった。

突然、鯰がその魚体を大きく振ると、私の手から離れて、夏草の密生した畦に落下し、びたんびたんとして激しく暴れた。

この獲物を逃してはならないと、私は諸手で懸命に鯰を押さえ付けた。

しばらくして、鯰はぴくりとも動かなくなった。手を退けると、ぐにやりと脱力した鯰が、枯れ草と泥に塗れて横たわっていた。

私は鯰を再度バケツに入れようと、鯰の尾鰭を掴んだ。その時、手に針を指すような僅かな痛みがあった。

棘のような小さな枯草が数本手に刺さっていた。鯰を見ると、その真っ白な腹にも刺さっていた。

不意に、私は恐ろしくなった。何か取り返しのつかないものを穢してしまったような気になったのだ。

私は声を上げて泣いた。そして、用水路で手に刺さった枯草を洗い流し、次に鯰の口と尾鰭を掴み、バケツで濯いだ。その間、ずっと「ごめんよお、ごめんよお」と言って、すすり泣いていた。

「その体験以降、私は生命の『尊厳』を冒すことを相当上位の禁戒としました。同時に、これは非常に良くないことですが、罪科を洗い流そうとする、つまり『贖罪』の味をしめてしまったのです」

老爺は人通り語り終わると開眼して、湯飲みを啜った。

作家が確認するように訊く。

「贖罪、というのは鯰と手に刺さった枯れ草を洗い流したことで、間違いないですか？」

老爺が首肯して答える。

「その通りです。小さな針のような枯れ草が……」

そこまで言うと、彼は足元の畳表から藺草を一本だけ引きちぎった。

「ちょうどこれくらいの細く短い枯れ草でしたが、それが私の手に刺さって、ちくちくと痛みが罪の在処をつまびらかにしたのです」

「貴方はこの体験以降、『尊厳』と『贖罪』について、先に述べられたような考えをお持ちになったということですか？」

「さあ、それはどうでしょうか。私が忘れていだけで、他にも様々な出来事があったのかもしれませんが、この体験だけは良く覚えているのです。恐らくは、この体験は私の人格形成における分水嶺のようなものではなく、当時の人格変化の象徴、いわば雛型として記憶しているものであると思うのです」

「つまり、一連の人格形成のモデルケースとして記憶していると？」

老爺は「そういうことです」と首肯した。

作家は手元のノートに目を落として、長々と書き始めた。しばらくして顔を上げると、

「次のお話をお聞かせ願えますか？」

老爺に話すよう促した。

「わかりました」

老爺は再び語り始めた。

十六歳の春のことだった。

私は当時所属していたクラブが開催する花見に参加した。会場は家から程近くの土手だった。

その日は快晴で、時たま南風が吹いた。透徹した蒼天、堤の芝生の新緑、舞い散る満開の桜。この上ないほど花見に誘え向きの舞台に、気分が高揚した。

私には、この花見で是非とも近付きたい人がいた。その人は学校の同級生の少女なのだが、端的に言えば、私はその娘に惚れていた。

ところが、彼女には男がいるという噂があった。はたまた、彼女はその男の許嫁であると言う者もあった。

私は水筒を手に持ち、満開の桜を眺める振りをして、周囲を見渡して彼女を探した。

やがて、土手に腰を下ろしている彼女を見つけた。私は勇気を振り絞って彼女に話し掛け、彼女の隣に腰を下ろした。

その後は後々省みるに、慚愧に堪えないような醜態を晒しつつも、話の継ぎ穂を失わないよう

にやたら饒舌になった。それだけ必死だったのだ。

しばらくして、何か手応えを掴んだ気がした私は——後々顧みるに、気のせいだと思われるが——調子に乗り始めた。腰の側に手を着き、身じろぐようにして、親指分ほど彼女の方へにじり寄った。

彼女が接近に気が付いた様子はなかった。私は再び彼女に近づこうとした。

その時、手の指にちくりと痛みを感じた。見ると小さな切り傷から血が滲んでいた。芝草の鋭利な先端が、皮膚の薄い所に刺さったのだと思った。

何ともないはずだった。しかし、そこで私は冷水を浴びせられたように、ふと冷静になってしまった。

——他の男がいる（かもしれない）娘に、手を出して（はいない、未遂だが）悦に入るとは。

冷たい臆病風が吹き抜けた。

私は適当に腰を上げると、適当に言い繕ってそそくさと逃げ出した。

後日、この件を思い返して、私は驚嘆したことがある。

縫い針ほどの大きさしかない芝草が、私が彼女に対する後ろめたい心持に興奮していたという事実を、見事に素っ破抜いて見せたのだった。

「あの時私は、ある種の『背徳感』に由来した興奮を覚えていたのです。それは非常に甘美に感ぜられました。これは私の性癖を披露するようで大変お恥ずかしいのですが、あの体験以降、ど

うしても『背徳』というものを欲するようになってしまったのです」

老爺は語り終わると「失礼します」と言って、厠に立った。

作家はすっかり冷めた茶を一口飲んだ。すると、洗い顔をして、湯飲みの残りを一息に流し込んだ。

すぐに老爺が戻って来た。

「失礼しました。年寄りには厠が近いもので」

と言って詫びると「お茶のおかわりはいかがですか？」と尋ねたが、作家は真顔で断った。

老爺が腰を下ろす。

「先程の続きですが、あの体験を経て背徳感の虜になってしまったのは、本当に良くなかった。あれが人生の転機であったと思います。先に申し上げた生命の尊厳と贖罪の話覚えておられますね。尊厳、贖罪、背徳。この三つが揃うことで、私の人生が罪に塗れることとなったのです」

黙して話を聞いていた作家は、要諦を掴めないような表情をして首を捻った。

「まあ、そんな顔をなさらずに。今からご説明して差し上げます。まず、尊厳を冒すことを禁忌としていると先に申し上げましたが、ここで示す尊厳は基本的に生き物のそれです。そこには当然人も含まれます。次に贖罪ですが、これはそのまま罪を贖うということです」

老爺は次第に息が荒くなっていく。

「では最後に、背徳について。この言葉は道徳に背くことを表していますが、私はこの道徳と尊厳を同一視してしまったのです。私は背徳の甘美さを知っていました。したがって、人の尊厳を冒して、背徳の快楽を得るようになるのは当然でした」

何処か陶然とした様子で老爺は続ける。

「背徳の快事の後には罪悪感に苛まれました。そこで、贖罪をしました。素直に自首したこともあれば、自殺を図ったこともありました。いずれにしても、私は懺悔した時の清々しい心地良さを求めて、貪欲に贖いました」

老爺は話の最中、終始興奮した様子だったが、語り終えて落ち着きを取り戻した。一方の作家は、冷静に老爺の話を咀嚼していた。

ややあって、作家が疑問を呈した。

「一つ質問があります。貴方は背徳の快楽を求めて罪を犯すことは当然だと言いましたが、そこで罪を犯さないように耐えることは出来なかったのですか？」

「私は懸命に堪えようとしたのですが、結局は罪を犯しました」

「何故ですか？」

「恐らく、それが私の業であるからだと思うのです」

老爺の返答に、作家が困惑する。

「今、何と？」

「業です。逃れられない因業。運命と言い換えられるかもしれませんが、どう足掻いても、私は罪を犯してしまうのです」

「それはただの自己正当化では？ 貴方が自己制御できなかった責任を放棄しているだけでは？」

何の気なしに作家が言い放つと、老爺は虚を突かれたような表情をして、すぐにわなわなと震えだし、頬を紅潮させて、

「黙れ！」

唾を飛ばしながら怒声を上げた。

「業であれば仕方ないだろう！ 私に責任はない！ 見当外れも甚だしい！ 口を慎め！」

一息に捲し立てると最後に、

「早々に立ち去れ、若造！」

と、吐き捨てた。

作家は荷物を持って、老爺を全く意に介さない様子で陋屋から立ち去った。

外は五月の丘陵の清涼な空気であった。

物言わぬ草が、作家の靴に無残に踏み荒らされていた。

あとがきにかえて

物言わぬ草に敬意を込めて花束を添えたく。

二〇一九年 一月某日 筆者



巡環する

ユルング

ひどく真っ暗な、小さな部屋のような、でも四角くはなくて、それでいて立体的で、そんなところにおります。もう随分と、此処に居る気がしております。そして随分堂々巡りなのです。試しに以前を思い出そうとしても、一向だめです。唯それは薄ぼんやりと、身体の底に沈澱しているのです。それが何とも、籌に酷く寄り添うように、じりじりと精神を焦がすのであります。

私はこのまま朽ちてゆくのでしょうか。それとも、もう朽ちているのでしょうか。嗚呼、嗚呼、また巡りました。此処に居ると、毎度こうなのです。良くないのです。でも、私は閉口するしか無いのです。自分が何故こうも考えるかも、わかりません。兎に角、狂いそうです。考えては、いけません。焦れても、いけません。全く、心を無にして、眠らねばなりません。でも、それは恐ろしゅう御座います。どうしても、恐ろしゅう御座います。一度でも意識を我が身から離してえれば、もう戻らぬのです。どうしても、その様な気がしてなりません。嗚呼、それでも、眠い、眠い……

\*\*\*

私は頭に酷い灼熱を感じて、目を覚ましました。同時に、私は酷く困惑しました。私の身体は土に埋まっていたのです。水気があって、柔らかくて、暖かくて、酷く心地よくて驚きました。私の周りには、背丈の低い青草が群れ生えております。どれも自由に葉を広げて、楽しそうです。私は随分深く埋まってしまった様子で、その他は何にも見えません。それでも、私は酷く幸福を覚えました。あの暗澹たる部屋から、私は解放されたのです。もう、孤独に思案せずともよいのです。今の私には、陽光と、土壌と、共に暮らす青草どもがおります。随分と、幸福です。

それからと云うもの、私は陽に抱かれ、夜に静座し、また時折雨と唱和して暮らしました。平穩の感が、私の心に立ち込めました。随分夢みたいに暮らしました。

そんなある日のことです。その頃には私もこの幸福に慣れきっておりましたから、全く贅沢な事

なのですが、退屈でした。青草どもの葉の筋さえ、全く数え果してしまいました。それに、身体も少しばかり窮屈になっている様に思われます。一寸不快です。それでも、私には楽しみがあったのです。私の身体は、日を追うごとに土から離れてゆきました。近頃は青草どものてっぺんが、丁度私の目線と同じでした。このまま離れてゆけば、私は青草どもを越えて、その先を見られるのです。それが私を喜ばせるかは、わかりません。それでも、私は望みを抱いて、日々を過ごせました。それが何よりでした。そして遂に、その日念願叶ったのです。

上を向けば空、紺碧のそれは真白の雲を泳がせ、その中心にぽつり、小さく開いた穴ぼこの様な太陽が、きらきら輝いております。前を向けば山河、苔色の丘々が白雪を乗せて、まるで白波を上げながら大挙して敵る

怒涛の様に、強烈に、そして広大に私の目に映りました。私は突如として流れ込むそれを、ゆっくりと反芻して飲み込みました。本当に、本当に美しい景色でした。同時に、自分が酷く矮小に見えて、安心しました。また、何故だか不思議なのですけれど、私の中に懐郷の念が渦巻いて、そして程なく消えました。初めてのことでした。

\*\*\*

嗚呼、酷く、身体が窮屈です。内側から押し出されて了いそうな、そんな感を覚えております。それでも、怖くは無いのです。よくわからないですけど、これは自然なことの様に思われます。いつかはこうなるのだと、覚悟していた様にも思います。兎に角、私はこの身体から離れるのだと思います。それがどのくらい先かは、わかりかねます。それでも、遠くないうちに、きっと。

\*\*\*

今迄に無い程、身体が窮屈です。私は遂に、その時が来たのだと思いました。実際私の身体は、私を押し出そうと躍起になっている様に思えました。そんな時です。

ぷっ

私の身体から、酷く小さな、白い粒が飛び出しました。

ぷっ

また出ました。緩やかな微風に流されて、何処へも無く飛んでゆきます。

ぷっ、ぷっ

嗚呼、次々です。

ぷっ、ぷっ、ぷっ

私にはそれらが、如何しても近しいものに思われて

ぷっ

あつ、私だ。

自分の身体だと思っていたそれは、私の家でもありました。今尚家から飛び立つそれは、私の兄弟たちでした。私は、土に埋まっていたわけではありませんでした。結局、私も青草どもと同じでした。それから随分、風に運ばれました。家を離れた私は、自分が何をせねばならないか、漸く理解しました。大地は段々と、段々と近づいてきました。

そして、あと数秒で落ちるといった時です。私の目の前に、何やら蠢くものが見えました。身体は茶褐色で、頭は黒、少し厚そうに見える皮膚はてらてらと光っています。それがあと数匹、周りに集っているのです。嗚呼、蝙蝠蛾の幼虫です。私はゆっくりと、その背中に落ちました。私は自分がこれから如何なるか、よく理解しています。嗚呼、嫌だわ、もうあんな思いはしたくありません。あの部屋に戻るのだけは、嫌です。それでも、また私は巡るのでしょうか。何度も何度も巡って、そして今此処にいるのでしょうか。私の記憶はまた、消えて了うのでしょうか。もしそうだとしたなら、次に目覚める私は、私なのでしょうか。仮に私だとしても……嗚呼、いけません。また巡りましたね。あんなに嫌だと思っていたのに、気がつけば何時も、何時も巡るのですから、笑えます。嗚呼、そうね、今だけは、あの山河を眺められる今だけは、自由でいなくてはいけません。嗚呼、この幸福が少しでも、少しでも長く続けばいいのに……。

\*\*\*

私を乗せた芋虫が、土に潜ってゆきます。あれから段々と、私の身体は芋虫に浸透してゆきました。それと一緒に、芋虫の思考が私と混ざって、ぐちゃぐちゃになって、恐怖や失意、怨恨、卑屈、後悔などが身体を、精神を巡って、一つになりました。彼の山河の輝きも、私の中で薄れてゆきました。嗚呼、怖い、怖い。嫌です、嫌です。やっぱり戻りたくないのです。あの部屋にだけは、嫌です。彼処には自意識の寄る辺など、ありません。唯々巡るのみです。嗚呼、酷い、酷い。眠くなってきました。私が今眠れば如何なるかなど、わかりきっているのに。あの青草どもと交わった日々を、忘れたくありません。あの群青の空を、漆塗りの夜を、忘れたくありません。あの……。あれ、おかしいです。何だか酷く大切なものが、身体から抜けて了ったようです。青草、太陽、夜空。青草、太陽、夜。青草、太陽……。嗚呼、ああ、あつ。

\*\*\*

ひどく真っ暗な、小さな部屋のような、でも四角くはなくて、それでいて立体的で、そんなところにおります。もう随分と、此処に居る気がしております。そして随分、随分長い間、堂々巡りなのです。

了

# 第一回

# アンソロジー作品集

ルーカス・ウォーカーの旅立ち

笠原ざわ

昼間だというのに真っ暗な部屋の中、ランタンの明かりが少女の顔を白く浮かび上がらせる。見た目からして年は十歳くらいだろうか。白に近い金髪を持つ彼女は周囲の壁沿いに立ち並ぶ本棚に囲まれながら木製のイスに腰掛け一人静かにそこにいた。

彼女の背後にはこの部屋唯一の窓が存在している。だがその窓には外部の干渉を拒むかのように厚いカーテンがかけられている。

テーブルの上、ランタンのすぐそばに置かれた彼女の手には分厚い本が携えられている。一定のペースでページをめくる手が後半に差し掛かった所で、きしんだ音を立てて部屋のドアが開いた。

廊下から昼の柔らかな光が射し込む。その光を背に四十歳近くの男性が書斎の中に入ってきた。ドアを後ろ手に閉め彼はランタンの元へ歩み寄る。

ルミエール、と彼が声をかけると少女は顔を上げる。

「ウォーカー先生、今日の問答？」

「その通りだよルミエール」

ウォーカー先生と呼ばれた男性はにこやかに返す。そしてポケットから懐中時計を取り出すと静かにテーブルの上、ランタンの隣へ置いた。

「ここに一つの時計がある。仮にこの全ての部品をバラバラにして、箱の中に全部入れたとしよう。この状態で箱を振った場合に時計は元通りになると思うかい？」

「思わない」

ルミエールが即答するとウォーカーは嬉しそうに頷く。

「そう。それが常識的な答えだ。じゃあ次の質問。さっき言った、バラした時計が元通りになる確率はどれくらいだと思う？」

「分からない。すごく低いと思う」

少しの間を空けてルミエールが答えるとウォーカーはうんうんと肯定するように頷く。

「そう、すごく低い。さあ最後の質問だ。そのすごく低い確率は、とある別の確率と限りなく近い値だ。さて何だと思う？」

ルミエールは黙り込んでしばらく考えていたが、ついにはお手上げと言わんばかりに首を横に振った。

「分からない」

「正解はこの世界に生命が生まれる確率だよ。神話を全部無視して学問面から迫った場合、初めは水と物しか無かったこの世界に最初の生命が誕生する可能性は限りなくゼロに近かった。それくらい低い確率を引き当てて生命は誕生した」

ホント奇跡的だよなあ。

ふらりとテーブルから離れ、ホムンクルスに関する古びた資料を本棚から取り出しながら彼は呟く。彼の言葉にルミエールは黙って耳を傾ける。

ペラペラと資料のページをめくりつつ彼は言葉を続けた。

「俺、命は泡みたいなものだと思うんだよね。水を瓶に入れて振れば勝手に泡が生まれて、時間が経てば勝手に弾けて消えていく。命ってそんなもん。偶然生まれて、勝手に死ぬ」

区切りのいい所でウォーカーは言葉を切る。確認したかった項目をちょうど見つけると彼は黙って該当部分を読み始めた。

ルミエールは先ほどまで読んでいた、生物の体内構造について書かれた本を閉じて脇に置く。そ



して首を傾げながらウォーカーの言葉を噛み砕き自らが持つ知識とすり合わせる。

さほど時間も経たずに、あ、と彼女は納得したように小さな声をあげた。

「先生は今必死に瓶を振っている、って事？」

「その通り」

答えると同時にウォーカーは資料を閉じる。そして元あった所に戻すと改めてルミエールの方を向いた。

「ゼロから一は生み出せない。一を二にするのは大変だ。四角を丸にするにも莫大な時間と素材、そして技術がいる。それでも俺達は考えて、挑戦して、あがくんだ」

ちょっと難しかったかな。

苦笑しながらそう言い、ウォーカーはルミエールのそばに戻ってくる。当の彼女は彼の言葉が何を意味するのか理解しようと視線を落としている。不意に彼女は顔を上げた。その目には好奇心が宿っている。

「難しいからよく分からない。けど、だからこそ気になる。知りたい」

「君がそういう子に育ててくれて俺も嬉しいよ」

ウォーカーは穏やかな眼差しを向けながら彼女の頭を優しく撫でる。その弾みで襟から彼女の首がちらりと覗く。その細くて白い首には赤字で二一八と印字されていた。

日も沈み街灯がぼつりぼつりと道を照らし始めた頃、ウォーカーは研究室で一人机に向かう。彼の手元には魔法理論と化学式が並列して書かれた紙が何枚か広げられていた。

紙に注釈を多少付け加えると、彼は壁に沿って並べられている丸底フラスコのうち一つに手を伸ばす。手に取った弾みでちゃぷんと音を立てた薄黄色の液体の中には小さな乳白色の何かが漂っている。その一つひとつの形状や状態を観察し、彼は手元の紙にさらさらと記録していく。

「サンプル七二八、仮説通りたんぱく質合成が上手くいかず失敗」

聞く人などいないと分かった上で、彼は観察結果を口に出しながら書き綴る。一通り書き終わるとそのフラスコを元の所に戻し、また一つ隣のフラスコを取る。そしてまた同様に観察していく。

「サンプル七二九、仮説通り組織が水圧に耐えられず失敗」

同じ動作を何度か繰り返して今回の結果を全て記録すると、今度は横の棚から分厚いファイルを取り出した。その表紙にはサンプル二一八とだけ書かれたラベルが貼られている。慣れた様子でページをめくり彼は新しい紙を付け足す。そして今日の分の記録を書き足した。

「サンプル二一八、ルミエール。体調の変化なし、と」

最後に紙の下端へルーカス・ウォーカーと署名して彼は静かに万年筆を置く。凝り固まった体をほぐすように一つ大きく伸びをすると、ルミエールに関する今までの記録を改めて見返し始めた。

命は神による奇跡の産物であり、人の手で生み出せるものではない。それがこの国、この大陸、ひいてはこの世界の共通認識だ。故にホムンクルスの研究など神の領域に触れる行いとされ忌避されている。

しかし有り余る好奇心と探求欲を携え神の領域にも手を伸ばすのが人という生き物だ。ルーカス・ウォーカーもその一人だった。

表向きの仕事や他の研究と並行して、彼は一人ホムンクルスの研究を行った。長い時間をかけて幾度となく繰り返した実験の末にルミエールという成功例を生み出し、命の生成方法をほぼ確立してしまった。だがそれと同時に、この結果が悪用される事によって悲劇や惨劇が生じる可能性に彼はいち早く気付いた。彼は想定される悲劇を黙認出来るほど強い人間では無かった。

だからこそ彼は今現在も研究結果とルミエールの存在を伏せ続けている。彼と同様に裏で人工生命の研究を行っている輩が実験の成功を嗅ぎつけて来た時にも、ホムンクルスの誕生はただの奇跡であり既に死亡した、とだけ説明している。それ以上の情報は一切外部に漏らさない。たとえ相手が旧知の仲だとしても対応は変わらなかった。

そして彼は研究を続ける。奇跡は二度起きないと示すために。万が一にも新たな生成方法を発見しないために。

ルミエールのファイルを閉じ脇に退ける。空いた机上に両肘をつくなりウォーカーは手で顔を覆う。長年の研究で手に染み付いたインクや薬品の色を見つめ、彼は固くまぶたを閉じた。

過去の自分とは真逆の事をしている自覚はある。あの頃はただひたすらに好奇心の突き進むままに研究を行っていた。だが今の自分はどうか。まるで贖罪のために研究を続けているような。

細く長い指の隙間から長いため息が漏れ出る。

分からない。真理とは、正しさとは一体何なんだろう。

のろのろと顔から手を離し、重い腰を上げてルミエールのファイルを棚にしまう。そのまま彼は棚に並ぶファイルをじっと見つめた。人工生命を求めて繰り返した実験と、失敗を求めて繰り返した実験。命として産まれる可能性があったそれらの存在はそれぞれ数枚の紙にまとめられ、今もファイルの中に収められている。

棚に向かって祈るように手を合わせ目を閉じる。

正しさが何なのか分からなくても、今ここで立ち止まる訳にはいかない。迷いながらも綺麗事を吐いてでも足を動かし続けなければ。それが産まれる事すら出来なかった彼らに対するせめてもの償いだ。

ウォーカーは表情を曇らせたまま目を薄く開ける。

「ルミエール。光の子。君を産み出した者として、俺は責任を持って君を育てよう」

とある晴れた日の朝、ルミエールの向かいに座るウォーカーは落ち着かない様子で朝食を食べていた。

今日は月に一度の骨董市だ。学術書や実験用具などの店が広場いっぱい肩を並べているらしい。掘り出し物を探すついでに知り合いにも顔を見せるのだ、と昨夜ウォーカーがうきうきしながら買い物リストを書いていたのを思い出しつつルミエールは朝食を胃に収めていく。

食後の祈りを済ませるなり彼はリュックサックを背負い買い物リストを握りしめて玄関へと急ぐ。

「ルミエール、いつも通り留守番頼むよ。誰か来ても開けなくていいからね」

「分かった。行ってらっしゃい」

玄関でウォーカーを見送ると、ルミエールはまず食器を洗いにキッチンへと向かった。それが終わると家の掃除や備品の確認など、普段ウォーカーの手が回らない辺りを中心に家事をこなしていく。とはいえ二人暮らしの狭い家というのもあってやる事は少ない。一通り作業を終え、他に急ぎの用が無いのを確かめると彼女は書斎から本を何冊か持ってきてリビングで読み始めた。

太陽が天高く昇った頃、ただいまという声が玄関から聞こえてきた。リビングに入ってきたウォーカーは満足げな顔をしている。リュックサックは買った物で膨れ上がり、その手には黄ばんだ紙が折りたたまれた状態で握られていた。

「先生嬉しそう。何かあった？」

「当たりだよ。古い地図を手に入れたんだ」

そう言うなり、宝物を見せびらかす子どもと何ら変わらない顔をしながらウォーカーはその手に握っている紙をテーブルに広げた。机上のスペースをほぼ埋めたその地図は日に焼けてだいぶ黄ばんでいる。かなり古い物のようで端の方はよれて線がかすれている。

「これ、いつの地図？」

「おそらくマクシミリアン王国が出来てすぐの頃に書かれた物だろうね。領土も今と少し違うし他の大陸についても書いてあるし」

ほら、とウォーカーは現在の城下町がある辺りとその近くの港を指差した。そのまま延長線上にある別の大陸の港を目指して彼は海路を指でなぞる。

「この国の歴史は前に教えただろう？ マクシミリアンの民は遙か昔に別の大陸から渡ってきた人々の末裔だ。つまり海の向こうにも国がある」

「海の向こう」

「向こうでは魔法こそ異質な存在なんだってさ。ここでは考えられないけどね」

ウォーカーの話を真剣に聞きながらルミエールは地図を眺めている。海の向こう。別の大陸。この家から出た事のない彼女にとっては未知の領域の話だ。

「世界は広いんだよ、ルミエール。フラスコから出た時もだいぶ広がっただろう？ もっと広いんだ」

「広い、世界」

想像の範疇を超えたのだろう、ぽかんとした顔でルミエールはそれだけ呟いた。彼女の素直な反応にウォーカーはうんうんと楽しそうに頷く。だが現実をふと思い出し、彼はその表情に僅かに悲しみをにじませる。

「いつか君を外に出してやれる日が来るといいんだけどね」

ウォーカーの顔をじっと見つめてから、ルミエールは首を一つ縦に振った。

その日が来るのは突然だった。

休日の朝、激しいノックの音でルミエールは目を覚ました。

こんな時間に来客の予定なんて無かったはず。眠い目をこすりながらも布団から抜け出した所で玄関に向かう足音が聞こえてくる。いつものように先生が出るのだろう。そう判断し、何があってもすぐ対応できるよう彼女は靴を履きながら耳を澄ました。

既に起きて身支度を整えていたウォーカーが玄関を開けると、そこには憲兵が一人厳しい表情をして立っていた。

「ルーカス・ウォーカー博士はいるか」

「ルーカスは俺ですが、何かありました？」

「貴殿がホムンクルスの研究をしているとの情報があった」

え。

突然の事にウォーカーは驚きを隠せない。一体誰がバラした。情報はどこまで漏れている。まさかルミエールの存在がバレたか。最悪の想像が一瞬で彼の頭を駆け巡る。

だが憲兵はこの動揺をいい方向に勘違いしてくれたようで同情の眼差しをウォーカーに向けている。

「かつて魔力徴収システムの維持や調整という素晴らしい任務を担っていた貴殿を疑いたくはない。不名誉な疑いを晴らすためにも、今までの研究記録や資料などを全て提出していただきたい」

ウォーカーは無言のまま憲兵を見据える。一つ深呼吸をすると目をそらさずに答えた。

「分かりました。ただ、今までの研究全てとなると量も多いですし、今進めている研究の記録もだいぶ散らかっているので今すぐ提出するのは難しいかと。整理する時間をください」

「極力早くするように、とのお達しだ。後日、いや明日にでもまた何うとしよう」

憲兵はそう告げて敬礼を一つすると踵を返す。お疲れ様です、とその背中に言ってウォーカーはゆっくりとドアを閉める。その場で聞き耳を立て憲兵の足音が遠ざかったのを確かめてから駆け足でルミエールの部屋へ向かった。

「逃げるよルミエール。荷物をまとめてくれ」

「分かった」

彼の指示を聞くとルミエールは即座にクローゼットからトランクを引っ張り出し、最低限の貴重品と衣服を詰め込む。そしてキッチンに向かい棚の奥にしまっていた堅焼きのビスケットやジャム、煮込み料理や塩漬けを瓶詰めした物など保存が効く食品をリュックサックに手早く移した

。 彼女がそれらの荷物を廊下に運び出すと、ちょうど同じタイミングでウォーカーも研究室から出てくる。だが彼は中くらいのトランクを一つ廊下に置くとすぐにまた研究室へと戻っていった。

ルミエールが覗き込むと、ウォーカーは棚から引っ張り出した研究記録や資料を部屋中にばらまいていた。丁寧な字で綴られた文字列が、その道の人なら一目で内容が理解できるほど簡潔かつ明確にまとめられた理論が、ただの紙切れとして床に落ちていく。

その様子をルミエールはただ眺める。紙が羽ばたいているみたい。彼女の目には何故かそのように見えた。

入口から覗き込んでいる彼女に気付くとウォーカーは、下がってて、とだけ告げて手のひらに四つの火種を生み出す。

「次の実験を始めてなくてよかった」

ほっとしたように呟くと彼は火種を研究室内に放つ。それらは紙の上を縦横無尽に這いすくすくと成長していった。炎達は部屋中に足跡を残しながら天井の四隅まで滑っていく。

炎が大きくなるにつれて、ぱちりぱちりと何かが弾けるような音がする。兄弟になるはずだった物の残骸や先日ウォーカーが手に入れていた古い地図が炎に飲み込まれていく様子をルミエールは不思議そうに眺める。

「燃やすの？」

「そうだよ。全部さよならだ」

自分にもそう言い聞かせるとウォーカーは研究室の扉を硬く閉ざす。厚い板を挟んだ向こうに熱気を閉じ込めるとすぐさま廊下の荷物を引っ掴み玄関のドアに手を当てた。歌うように二つ三つと言葉を唱えると、ドアはバチリと静電気に似た音を立ててわずかに開かれた。その反応に彼は緊急用の移動魔法が無事成功したのだと確信する。

「よし、行こう」

後ろで待機していたルミエールに声をかけると、ウォーカーは一思いにドアノブを押した。

途端、向こうから風が吹いてきた。明るくて暖かな光が射し込んでくる。生まれて初めて直に触れる外の気配に、ルミエールは恐る恐る玄関の木杵をくぐる。その先は小高い丘の上につながっていた。

ルミエールにとってそれは初めて見る景色だ。壁が無い。天井も無い。自分より下に建物がある。太陽の光が真上から体を包む。草が足首をちくちくと刺す。空気の流れに乗って湿った土の匂いが舞い上がる。

「そと？」

「外だよ」

ウォーカーの返事に彼女は一層目を輝かせる。

「外。これが外」

噛みしめるようにそう言いルミエールは二、三步前に出て辺りを見回す。本の中でしか見た事の無かった景色が今、彼女の前に存在する。木々のざわめきや煙突から立ち昇る煙など周囲の光景を一通り見て満足すると彼女はウォーカーの元に戻ってきた。

「先生、また命を作り出す研究をするの？」

「いいや。全部捨てて新しい事を始めようと思う。人の手で命を作り出すなんて、見てはいけない夢だったのさ」

ウォーカーの言葉にルミエールは目を丸くする。

「夢を捨てて、人は生きていけるの？」

彼女の純粋な問いにウォーカーからは笑みがこぼれる。

「その答えをこれから探しに行こうか」

見納めのように自宅のあった方向をもう一度だけ眺めると、ウォーカーはパン・ガンティ連邦との国境がある方角へ歩き出す。トランクを手に進む彼の顔はどこか晴れ晴れとしていた。





## カモミールの約束

---

### カモミールの約束

佐久間 佳雪

「宿泊したいのだが」

「……」

木のカウンターに鍵が無造作に放られる。受付は無表情のまま、手を差し出した。あまりにも無愛想な受付に思わず閉口する。

「おに一さん、お代」

催促するように受付の青年は手を揺らした。若干の反感を持つが宿泊費を払わないわけにもいかないし、渋々金貨を手渡す。

「まいどありー。おに一さんのお部屋は二階の角部屋っす。あ、飯は食堂へどーぞ」

棒読みで言った青年は、退屈そうにあくびをした。突っ立っていれば眠そうな目で、まだなにか、と聞かれる。どうも釈然としないまま、礼を言ったのち二階へ上がった。

木造の廊下は歩くたびぎしぎしと音が鳴った。ちょうど夕飯時というのもあり、下階の食堂からの騒がしい声と美味しそうな匂いがここまで届いている。

廊下の突き当たりにある、本日の寝床となる部屋はとても簡素なものだった。ベッドに小さなテーブル、それと背もたれのないイスが一脚。一晩体を休めるだけなら十分だろう。

重たい荷物は机の上へ、外套はフックに引っ掛ける。それから仰向けにベッドへ倒れこんだ。思いのほかふかふかで心地がいい。

ふと、果物のような香りが鼻孔をくすぐった。上半身を起こし部屋を見渡すと、窓際に花が飾ってある。どうやらこれの匂いらしい。しかしどこかで嗅いだことのある匂いだ。

思い当たったのは友人からの預かりものの匂い袋。懐から取り出し鼻に近づけると、血や埃の匂いに混ざってかすかに窓際の花と同じ匂いがした。

血で汚れた小袋を握りしめ、丸くなる。腕の傷跡がざわざわと疼いた。忘れるなよと釘を刺されている気分だ。

わかっているよ、親友。お前の願いは必ず叶えるから。だからここまできたんだろう。

いっそのまま寝てしまうかと力を抜いたちょうどそのとき、きゅるる、と腹が切なく鳴いた。

「くそ、腹減った……」

空きっ腹では寝ることもできない。なら、睡眠欲はとりあえず後へ回して、今は食欲を満たすでしょう。

貴重品だけを持ってふたたび下階に下りる。さっきの無愛想な青年がいる受付を通り過ぎて、がやがやと騒がしい食堂を覗いた。商人と思しき男たちが酒を酌み交わしており、賑やかだったのはこのせいか、とようやく納得する。

いつもだったら混ぜてくれよと入っていったかもしれないが、あいにく今日は騒ぐ元気もなく、食堂の端の席に腰を落ち着けた。

「ごめんなさい、騒がしくて」

そんな声に顔を上げれば快活そうな少女が眉を下げ笑っていた。愛嬌のある笑顔だ。好感が持てる。やっぱり愛想はないよりあるほうがいい。

「いや、大丈夫だ。賑やかなのはいいことだろう」

「ふふ、確かにそうですね！ さ、お客さん、ご注文はどうしますか？」

「ああ、そうだな……ここのおすすめは、」

「野菜のスープとサーモンの塩漬けがおすすめだよ」

綺麗な声だな、と何気なくテーブルの反対側に目をやると、やけに整った顔をした人がいつの間にか座っていた。女にも男にも見えるその人はにっこりと作りもののような笑みを貼り付けている。

「……じゃあ、それで。ああ、あとエールも頼む」

「あ、僕ももう一杯お願い」

「はい、少々お待ちを！」

最後に人懐っこい笑みを残して少女が厨房へ去ったあと、改めて目の前に座る人を見る。

銀の長髪と緑の瞳をしたその人は人形のように美しかった。シャツからのぞく肌の白いこと。

「親切な常連さん、名前は？」

「エリシャ。君は？」

「テオだ。エリシャ、失礼なことを聞くが……男、か？」

「ははは！ よく聞かれるが、一応これでも男さ」

エリシャは木のマグを揺らし、口を開けて豪快に笑った。なるほど、ご機嫌な様子で酒をあおる姿は男らしい。

「はい、お先にエールで一すよ！」

「ありがとう」

一足先に運ばれてきたエールのマグを受け取り、そしてお互いにマグを掲げた。

「乾杯」

向こうのおじさんたちのようにマグを壊しそうなほどの勢いはなく、こつ、と控えめな音がる。

少し笑って、エリシャはエールを一気にあおった。細い喉元で喉仏が上下に動くのに目を奪わ

れる。なんといい飲みっぷりだろう。知り合いに酒豪は多いが、ここまでのやつはそうそういない。

圧倒されていたら、彼はマグをテーブルに置き口元を拭う。

見た目と行動のギャップがすごい。顔は女のようなのに仕草は男らしいものだからどうしても戸惑ってしまう。

「ぷはあ、うまい……あれ、テオ、飲まないのかい」

「ああ、いや……飲むよ」

緑の目から逃げるようにエールを飲む。フルーティな香りが口に広がり、疲れた体に染み渡っていく。思わず口から深い溜息がこぼれた。

「うまい……」

「ふふ、とろけたね」

「疲れているんだから仕方がないだろう」

袖のボタンを外し、腕まくりする。楽な格好になったと肩から力を抜いて、エールをもう一口。

「……君、その火傷は、」

エリシャの顔からずっと絶えなかった笑みが消えた。彼が注視する自分の腕には、ひどい火傷の跡。一般人なら妥当な反応か。

マグの縁を指でなぞる。脳裏で緑の目をしたあいつが笑っていた。

「非魔法使いたちが起こした反乱があっただろう。そのときの傷だ」

魔法が使えないからと虐げられ、人権もない。そんな非魔法使いたちが国に逆らうなんて子供だって予想できたことだ。だが我が国は不覚を取られた。理由は単純、魔法が使えない連中にはどうせ何もできまいと侮っていたからだ。油断していなければ死ぬことはなかった人たちがどれだけいるのだろう。

そういえばエリシャの反応がない。マグから目を離し、黙ってしまった彼の様子を窺う。

エリシャは動揺しているようだった。マグを持つ手は震え、力が入っている。もしかしたら反乱に何か嫌な記憶でもあったのかもしれない。

「エリシャ？」

視線がぶつかる。揺らぐ緑の目がやけに友人と似ていた。大丈夫、と言い聞かせるように言ったエリシャはまた笑みを浮かべる。

「今の話だと、君は軍人なのかな？」

「ああ、そうだ」

「へえ、それはすごい。でも、軍人さんってそう簡単に休みはもらえないイメージだったのだけれど、違うのかい？」

「いや、普通は滅多に休みはない。だが、連邦との関係も良好、かつ反乱軍も現状動きがないから、暇をもらった」

休めるときに休みをもらわないと過労で死んでしまうからな、と冗談を言えばエリシャが笑った。

「お待たせしました！ 野菜のスープと、はい、サーモンの塩漬け！ 一緒に黒パンもどうぞ」

ちょうどいいタイミングでやってきた少女はテーブルの上に皿を並べる。

木の皿にはスライスされた黒パンと、塩漬けサーモン。ボウルの中の具沢山のスープからは湯気が立ち上る。忘れかけていた空腹が存在感を増した。

ひとまずサーモンをつまみ、口の中へ放り込む。ちょうどいい塩味で、エールによく合いそうだ。

今度は黒パンに塩漬けサーモンをのせて口へ運ぶ。香ばしさと塩味、それとほんの少しの甘みが口の中へ広がった。

次はこの周辺の村で育てられた野菜を使った具沢山のスープを口へ。薄味だがその分素材の味がよく出ていて美味しい。やはり野菜は地方の方が美味しいらしい。

「うん、うまい。君の言う通りだった」

「だろう？」

少量とはいえ腹にもものが入ったからか、空腹は多少和らいだ。エールも飲みつつ食事のペースを落とすと、エリシャが口を開く。

「ここへは何をしに？」

「友人との約束を果たすために、彼の実家を訪ねにきた」

「約束、か。差し支えなければ詳しく聞かせてくれないかな」

「士官学校時代からの親友が、件の反乱で命を落としたのだが、死の間際にあるものを預かってな。家族に届けて欲しいと、頼まれた。だからそれを果たすため、ここまできた」

エリシャの顔が驚きに染まる。その反応に逆に驚かされた。そうか、これが真っ当な反応か。自分の感覚は麻痺しているのだと改めて自覚する。

「なんでもないことのように言うんだね？」

「軍にいと、死には慣れざるを得ないからな」

「死んだのが親友なのに？」

エリシャの真っ直ぐな目が、俺を見ている。責められているような気がして、逃げるようにエールをあおった。

彼の最後を看取ったときも、遺体を戦場から持ち帰って本人確認をしたときも、自分はなんの感情も抱けなかった。

まるでなんでもない出来事のように、自分の中であいつの死が処理されている。親友だったあいつまで、今まで死んだ大勢の一人になってしまう。それが、怖いと思った。

「……俺だって、親友の死くらいは、悲しみたかったさ」

こんなことになるなら死になんか慣れないほうがよかった。たとえそれが血反吐を吐くほど苦しくても。

眉間を抑え、息を吐く。少し酔いが回ってきた気がする。

不意にエリシャが指で宙をなぞった。すると塩漬けサーモンと黒パンがふわりと浮かんで、空中で合わさる。そしてそれはエリシャの口の中へ。咀嚼のあと、パンは喉を通過して落ちていく。

「……それ、俺のなんだが」

「あ、バレたか。まあ、ケチケチするなよ」

今度は塩漬けサーモンだけが浮かんだ。それは俺の口元へ運ばれてきて、口を開けると中に落ちる。素直に咀嚼して、飲み込んだ。

「ねえ、その親友さんの故郷ってどこなの」

「フォーサイスっていう町だ」

その言葉に、一瞬エリシャの動きが止まった。口に運ぼうとしていたサーモンが皿に落ちる。こいつ、どさくさに紛れてもう一切れ食べようとしていたな。

「こんな、偶然もあるのか。僕の故郷もフォーサイスでね、一人旅の帰りだったんだ」

「なら、行き先は同じということか？」

「そうなるね。どうせなら一緒に行こうか。旅は道連れ、っていうだろう」

「ああ、いいぞ」

世間は狭いな、と言い、ぷかぷか浮いてエリシャの口へ吸い込まれそうになるサーモンをつまんで食べる。奴がケチ、と口を尖らせたのは無視して、席を立つ。

「もう行くの？」



「疲れているからな。明日に備えて早く寝る」

「じゃあ僕も寝ようかな」

二人連れだって席を立ち、カウンターにいた少女に金を払って食堂を出た。そのまま二階へ上がって、突き当たりの部屋へ、って、どこまでついてくるのだろう。

「あれ、君、隣の部屋だったのかい」

そんな声に振り返ると一つ手前の部屋の前でエリシャが立ち止まっている。ここまで偶然が重なると、わざとじゃないかと思えてきて、少しエリシャが怖くなった。

「なんか、企んでいるのか……」

「嫌だな、偶然だよ、偶然！」

酔っているのか、やたらと楽しそうにエリシャは笑った。そして部屋の扉を開けながら、こちらに手を振る。

「じゃ、おやすみ」

「ああ、おやすみ。また明日」

なんだかどっと疲れたし、眠い。寝よう、今すぐ。そう思って部屋に入ろうとドアノブに手をかける。

「……あ、そういえば、親友さんってなんて名前なの」

今更すぎるな、と呆れつつ、あくびをする。それから、答えた。

「ヨセフだよ」

朝日を浴びて、まぶたが上がっていく。緩慢な動きで体を起こし、しばらくぼーっと窓際の花を眺める。朝日を喜んでいるように見えた。

身支度をして朝食を食べたら出発して、と頭の中で今日の予定を組み立てる途中、ふと、昨日のエリシャの顔を思い出した。

別れ際に友人の名を聞かれ答えたとき、エリシャは泣きそうな顔をしたように見えた。あのあとすぐに部屋へ入ってしまったからなぜなのかはわからないし、自分の勘違いの可能性もある。

あれこれ考えていたら、ノックの音がして慌てて扉を開けた。

「おはよう、テオ。朝ごはんを食べにいかないか？」

「あ、ああ、行く。少し待ってくれ」

別れ際のあの反応はなんだったのか、エリシャはまったく普通の様子だ。やっぱり自分の勘違いだったかもしれない。

「ここの飯は本当にうまいな」

「だよね。この宿のご飯はここらじゃ評判なんだ」

「確かに、この味なら納得だ」

朝食は卵が乗ったトーストとベーコン、それと昨日と同じスープを注文したのだが、どれも美味しかった。また料理目当てで来るのも悪くない。

それはともかく、朝食の間もエリシャに変わった様子はなかった。結局自分の気のせいだったと結論づけて、考えるのはやめることにした。

「じゃあ、準備してすぐに出発しようか」

「了解した」

部屋に戻り、早速荷造りをする。と言ってもほとんどのものを出していないからすぐに終わってしまった。

少し早い部屋を出て、隣の扉をノックする。中から何かにぶつかった音がしたあと、エリシャが出てきた。

「テオ、早いな」

「すまん」

「いや、僕も終わったところだし、いいのだけれど」

彼は一度部屋に引っ込み、荷物を持ってまた戻ってきた。そして下階に下り、それぞれチェックアウトを済ませる。ちなみに今日も受付の青年は無愛想で愛想がなかった。しかも朝だからかささらに不機嫌だった。この宿屋は部屋も食事もよかったが、受付だけは最悪だ。

文句を言いながら宿屋を出たのち、エリシャに従い町を抜けた。彼曰く、フォーサイスは町二つ先にあるのだという。昼に休んだとしても夕方には着くそうさ。やはり、土地勘のある人間がいると安心感が違う。

道なりに歩きながら、他愛もない話をする。話題になったのはエリシャの旅の話で、短期間ではあるがいろんな町を見てきたのだと楽しそうに話してくれた。

「テオも何か話してくれよ」

「何を話せばいい？」

「そうだな……件の親友さんとの話、とかどう？」

そう言われて、少し、困った。でも、ぽつぽつと話し始めると、思い出が鮮明に蘇っていく。

士官学校時代に訓練という名目でいたずらをして叱られたこと、実地訓練に菓子を持ち込んでこっそり食べたこと、酔っ払ったときの失敗談——こうして思い返すと、楽しいことばかりだ

った。きっとあいつがやんちゃで、楽しいこと好きだったからだろう。

エリシャは笑いながら聞いてくれて、だが、緑の目は悲しそうだった。

話に夢中になっていると、気がつけば町に差し掛かっていた。ここで昼飯を調達するため一度解散し、各々食べたいものを買ってからもう一度広場に集まることになった。

別れたあと、俺は片手でも食べられるものがないかと思い、サンドイッチを買った。ついでに果物屋でリンゴを買い、広場へ戻る。エリシャはもう広場で待っていた。

「待ったか？」

「いいや、全然。さあ、行こうか」

一つ目の町を抜け、また道なりに歩いている途中、エリシャが遠慮がちに声をかけてきた。

「話しづらいかもしれないけど、もし、よければ、その……親友さんの、最期の話、聞いてもいいかい？」

「……楽しい話じゃないぞ」

「わかっているよ。……でも、」

聞きたい。真っ直ぐに俺の目を見て、エリシャは言った。その目は友人とそっくりだった。だから、つい口を開いてしまう。

「反乱が起こったのは深夜だった。俺とヨセフは警報で叩き起こされて、現場に向かった」

着いたときにはもう、酷い有様だったのだけはよく覚えている。極限状態の中、とにかく戦って、戦って、気づいたら炎の中にいた。なぜそうなったのか記憶が曖昧だが、ヨセフは全身にひどい火傷をしていて、自分も腕をやられていた。とっくに魔力も尽きていたから治癒の魔法も

使えない。いよいよ、ここで死ぬのだと覚悟した。

けれど、ヨセフは違った。なけなしの魔力で、傷の浅い俺に炎耐性の魔法をかけ、そして、生きる、と言った。

そのときに預かりものをした。ヨセフは、生きて、家族に届けてくれと、俺に願い求めた。

「俺はそれを持って炎を抜け、生き延びた。……まあ、こんな感じだ」

すべてを聞いたエリシャは目を伏せ、形のいい唇を噛み締めていた。

「だから言っただろう、楽しい話じゃないって」

「……でも、聞いたことを後悔してはいないよ」

すると彼はおもむろに自分の頬を叩いた。そして真っ直ぐに前を見据えると、いつもの笑顔を浮かべる。

「話してくれて、ありがとう」

「……こちらこそ、聞いてくれてありがとう」

昼に休憩を挟んで、二つ目の町を抜ける。森の中の道を通りひらけたところに出るとフォーサイスの町並みが見えた。

「思ったより大きい町だな」

「まあ、領主のお屋敷があるからね」

町へ近づくと、エリシャとの別れが近づいていく。短い二人旅だったが、なかなか心地が良かった。このまま別れるのを惜しいと思うくらいには。

しかしそんな想いなど関係なく、とうとう町に着いてしまった。

「さて、僕は家に帰るよ」

「ああ、俺も、約束を果たしに行く。ここまで、ありがとう。なんの礼もできずすまないな」

「いいよ、気にしなくて。楽しかったからさ」

「そうか……俺も、楽しかった」

。 会話が止まって、エリシャと目が合った。彼は出会ったときと同じ笑みを浮かべ、手を振った。

「じゃあね、テオ！」

「さようなら、エリシャ」

最後にエリシャはとびきりの笑顔を残し、人混みに消えた。

一人残され、ふう、と一息。荷物から住所を記録した紙を取り出してから、俺もまた人混みの中へ足を踏み入れた。

なんとかヨセフの実家にたどり着きベルを鳴らすと、使用人と思われる女性が顔を出した。用向きを伝えると応接室へ通されここで待つよう言われた。上等な紅茶と茶菓子を出されてしまって少し戸惑った。まさかあのやんちゃ坊主がこんなにもお上品なお屋敷で育ったとは思わなかったからだ。

しばらくすると、上品な女性がやってきた。この人がヨセフの母親だと、綺麗なブロンドヘアを見て確信した。

挨拶しようと立ち上がると、彼女はそれを制して微笑んだ。

「あなたがテオ、ですね？」

「どうして、名前を？」

「あの子がよく手紙で名前を出していましたから」

そういえば、彼は戦地でもよく手紙を書いていた。何を書いているのかと思えば俺の話までしていたとは。

お悔やみだとかそういった挨拶もそこそこに、本題に入る。

懐から匂い袋を取り出し、女性に見せた。すると彼女は口元を抑え、涙をこらえる。あまりにいきなりすぎて体がこわばった。どうにかこうにか、大丈夫ですか、と声を絞り出す。

女性はハンカチで目元を押さえたまま、口を開いた。

「……ヨセフがこれを渡したかったのは、私たちではないですわ」

「え？」

「あの子は墓地に、ヨセフのそばにいます。それは、あの子に渡してあげてくださいな」

あの子が一体誰なのか、聞く前に女性は退室してしまった。去った扉の向こうから嗚咽が聞こえてしまったのは、俺も言われた通りにするしかない。

使用人に道を聞いて、匂い袋を手に墓地へやってきた。

墓地は小高い丘の上、美しい花畑の中にあった。涼やかな風が吹き抜けると、どこかで嗅いだ匂いがする。花をよく見ると、あの宿屋の飾ってあった花と同じものだった。

階段を登り、石の墓がちらほらと見えてくる。その中に、よく知った人が立っていた。

「……来たね、テオ」

花畑の花で作った花束を手に、彼は儚げに微笑む。

「じゃあ、改めて。……僕の名前はエリシャ。君の親友、ヨセフの弟だ」

言葉が出てこない。こんな偶然、あっていいものなのか。

思えば、エリシャの目がヨセフと似ていたこと、ヨセフの最期話を聞いたときのあの反応——他にも二人が兄弟なら合点がいくことがたくさんある。

「鈍感だなあ。流石に昨日の反応でバレたと思ったのに」

呆れたような声色でエリシャが言った。彼は傍らの墓の前にしゃがむと花束を供え、それからまた、俺を見る。

「で？ 預かりものって一体何なのさ？」

笑みを貼り付けたエリシャに歩み寄った。そして、ヨセフが肌身離さず、それこそ最期のときまで持っていたそれを、彼の手に握らせる。

ゆっくりと、彼の手が開いていく。手の中の、血で汚れた匂い袋を見た瞬間、エリシャの笑顔が剥がれた。

両の目にみるみるうちに涙が溜まり、溢れ、こぼれ落ちる。

「兄さんの、ばかやろう……これだけ無事で帰ってきたって、意味ないだろ……！」

匂い袋を握りしめ、エリシャは絞り出すように言う。そこから堰を切ったように声を上げて泣き出した。その姿があまりに辛そうで見えられなくて、背中をさすってやる。

しばらくすると苦しそうな呼吸が穏やかになってきた。赤い目をこすって、鼻をすする。

「……この匂い袋、兄さんが士官学校へ行くときに、ここの花を使って作ったんだ。寂しくなっ



たらこれで故郷を思い出して、欲しくて」

「ああ」

「無事に、戻ってきて欲しかったから、絶対にこれを、僕に返してね、って、約束した」

「ああ」

「兄さん、約束、守ったんだ」

「ああ、そうだ」

何か吹っ切れたエリシャは涙をぬぐい、ぴん、と背筋を伸ばした。けれど俺の視線から逃げるように、背を向ける。

「実はね……昨日、君が兄さんの友人だとわかったとき、正直、すごくむかついた。だって看取ったくせに兄さんが死んだことにまるで何も感じていないから」

銀の髪が風に揺れている。

「でも、君、兄さんの最期の話をしたとき、今にも死にそうな顔をしていた。そんな顔をしておいて、よく何も感じないなんて言えたものだよ。鈍感すぎて、笑えないよ」

振り返る。エリシャは、眉を下げ笑っていた。

「テオ、君はちゃんと、兄さんの死を悲しいと感じているよ。ただ、鈍感すぎて気づいていないだけだ」

手を引かれ、墓の前に立たされる。

「だからちゃんと、向き合って」

白い石の墓に刻まれた、ヨセフの名前。この下に、あいつがいる。

墓石に触れる。硬くて、冷たかった。

「ヨセフ、」

名前を呼んでも返事が返ってくることはないし、触れたところで温もりは感じられない。なんだよ、と彼が笑うことも、もう、ない。

だってヨセフは、死んだのだから。

正しく理解したそのとき、じわじわと視界が滲んでいく。形容しがたい何かがせり上がってきた。

人が死んでも自分の心が動かなかった理由を、今、ようやく理解した。

俺は、死には慣れたと思い込んでいただけだったのだ。本当は、死がどんなものであるか理解せずに逃げていた。受け止めていないのだから、心が動かないのなんて当たり前だ。

ぼろぼろと歯止めが効かない涙を垂れ流していると、エリシャに手を取られる。

「大事な人を失うのは、辛い。でも、乗り越えて生きるんだ。僕も、テオも」

汚れた匂い袋を細い指がなぞると、血の染みが空気に溶け、消えていく。そして新品のようになった匂い袋を、俺の手に握らせた。

「これは今からテオのものになった。いい？ 必ず、必ず生きてそれを持ってくるって約束してくれ」

「……わかった、約束する。だから、またあの宿屋の飯を食べに行こう」

エリシャの顔に、笑みが浮かぶ。俺もつられて笑ったとき、ふわりと柔らかな風が俺たちを包んだ。

俺たちはこれから大切な人がいない未来を歩いていく。新たな約束を果たすために。

### コップの中の嵐

木目

ああ、ありがとう。何から何まで申し訳ないな。いつか何かで返せばいいのだが。要らないって、そう言われても。まあ、こんな俺がこれから何を返せる、なんて思えないけれど。体はもう大丈夫だ。俺の体は丈夫だから。傷？ ああ、大したものはない。そうだな、お礼になるかどうかかわからないが、俺が君たちに助けられるまでの話をしてもいいか。きっと退屈はしない。面白い話だと思うよ。なんだ、皆を呼んでくるから待ってろって？

あはは。こんな大勢の前で話すのなんてガキの頃以来だな。俺はあまり話は上手くないから、その辺わかってくれよ。

目覚めたところは、白い砂浜だった。いや、俺も訳が分からなかった。足元にはさらさらとした砂。見渡す限りの水平線。後ろには、まるで見たこともない植物が砂浜の先に見える。俺は無  
人島にでもついたのかと思ったよ。でもまあ、そのときはそんなことどうでもよかった。俺は、どうせ生きるつもりなんてさらさらなかったから。

俺は、罪人だった。島流しの刑にあった。俺の故郷は罪人に厳しくてな。結構多くのやつが流刑になる。で、流刑先には、そこで生活している先輩がいるわけだ。俺の流刑先はかなり評判が悪かった。その先輩方の素行の悪さで有名だった。予定通りだったら、俺は死体として海に流れていたかもしれない。覚悟はあった。砂浜ついて役人たちが消えたら、身ぐるみはがされて惨殺されるようなそんな気がしていた。

そういう思いを抱えて船で輸送されていたとき、嵐に遭遇した。海に身が投げ出されて。そのあとのことはまるで記憶がない。気が付いたら、俺一人で砂浜にいた。ものすごく混乱したが、見たことない植物が気になって、近づいてみた。見たこともない植物だった。紙とペンあるか？

ああ、ありがとう。そう、確かこんな感じだ。君らも見たことは、無いのか。そうか。で、その見たことない植物、たぶん木だとは思いますが、それは森を形成していた。周辺を歩いてみるとな、道らしいものを発見した。獣道のような感じだった。何かしらの生き物がいることは理解できた。

それで、その道を進もうと考えた。俺はだいぶおかしくなっていたのだろうな。腹も減って喉も

だいが乾いていたし。その獣道を辿っていくと水の音が聞こえた。川が近いのかもしれないと思って音のする方へと急いだ。道が開けた先に湧き水があった。きれいな水だった。汚染されていないきれいな。夢中になって飲んだよ。生きるつもりなんてなかったのにおかしな話だ。水を飲んで少し冷静になった。周りを見ると、やっぱり見たこともない植物の中に見覚えのあるものを見た。故郷にもあった果物の木で、俺はその味があまり好きじゃなかったのだが。その時食べたそれは本当に旨かったな。

それで、俺が腹を満たしていると、ガサガサと音がした。獣がいるのかもしれないと思って、とっさに隠れて様子をうかがった。獣と闘って素手で勝てるわけなんかないけど、もしかしたら見たことない生き物かもしれないと思うとき。死ぬ前に見てみたくなった。好奇心ってやつか。必死で息を殺して、音のする方を見ていた。出てきたものは人の形をしていた。人が住んでいるのかと思って安心しかけた矢先だった。後ろから出てきたのは紛れもなく獣のそれだった。目をそらすことができなかった。だけど俺が面食らったのはその後だった。

その獣の後ろから、二足歩行の獣が出てきた。それは獣と同じ毛皮の色で同じような爪をしていたけど、どことなく人っぽく俺には見えた。ああ、おとぎ話で、獣人っているだろう？ そんなイメージだ。よく見ると一番初めに見た人間も、人間にあるはずのない尻尾と耳が生えていた。

なんか直感で分かった。これは群れだって。姿かたちが違って見えるけど、奴らは同じ仲間たちだと。今思えば変な話だけども、多分、奴らは会話をしていた。俺にはわからない言語で。その時は訳が分からなかったから、今の俺の憶測でしかないけど。

見つかったら食い殺されると思ったし、本当はもう見つかっているような気がして、諦めすらあった。ほら、獣って鼻がいいだろ。俺の存在バレてるように思えてさ。だけど奴らは、俺の方に来ることはなかった。

奴らがいなくなって、体が急に震えだした。俺は、本来行くはずだったあの島よりもっと恐ろしいところに来てしまったかもしれないって。そう思うと、体が震えて口角が上がった。なぜか俺の心は踊った。まるで新しい大陸を発見した冒険家のような気分だった。ただのしがない罪人のくせにな。子供のころに戻ったようなわくわく感があった。……今考えたら本当に、未知の大陸の発見だったのかもしれない。ここには、まだ自分の知らない世界が広がっているのかもしれない、なんて思ったらもっと見てみたくなるだろう。どうせ死ぬはずだった身だ。冥土の土産にしてやろうって、自棄になっていたような気はするが。

とにかく俺は動き出した。さすがに、さっき獣が去っていった道をすすむのはためらわれた。もう一つ、別方向に伸びる道があったからそれを辿ることにした。道中も変なものはいろいろあったな。ひどく鮮やかな色をした木の実とか、人が三人分並べる大きさの花とか。ううん、あまり

上手く描けないな。あとは、やたら派手な模様の虫とか。目を奪われるようなものが多かったよ。もし見つけるやつが見つけていたら、……いやこの話はいいか。

道を進んでいくと壁に突き当たった。自然のものとは思えない、明らかな人工物だった。高く空に伸びていた。よじ登って超えられるようなものでもなさそうだった。そのまま空を見上げていたら、壁の向こうから何かが飛んでくるのが見えた。俺はまた驚いたよ。鳥の群れだった。鳥そのものと人型の何かの混じった群れが、壁の向こうから飛んできていた。やつら、人間でいえば腕になっているはずのところを翼になって、そいつを羽ばたかせていた。こういう感じか。ん？

こういうやつが出てくる伝説があるのか。今度聞かせてくれ。奴らに見つからないよう、音を立てずにじっとしていた。そいつらは、俺の来た方へ向かって飛んで行った。

これは俺の勝手な想像だが、あの大陸にはそういう種族が生息しているんだろうな。獣人とでも呼称するか。獣と人の中間の存在。多分、言語も持っている。知能は人間に近いのかもな。俺が初めにたどり着いたのは獣人たちの国だった。

鳥人たちが飛んでいくのを見届けた後、俺は壁の抜け道を探した。向こう側に何が広がっているのか、気になってしかたなかった。好奇心って怖いな。壁に沿ってしばらく歩いた。日が少し傾き始めていた。どのくらい歩いたかなんてわからないが、人一人通れそうな壊れかけた壁を見つけた。ようやくだと歓喜して、壁の向こうへ。

壁の先は、森だった。代り映えのなさにがっかりしつつ、少し歩いた。うつむきながら歩いていると、足元がさっきまでの道とは変わっていた。さっきまで俺はずっと獣道を歩いていたが、今立っているここはそれとは違った。明らかに、整備がなされていた。人が住んでいるのだと思った。少しワクワクしながら、道を進むことにした。ずっと獣道を裸足で歩いていたからな、だいぶ歩きやすくて自然と進みが速くなった。森の感じも壁を超える前とは違っていた。人の手加えられて、整えられているような感じがしたな。道を進み森を抜けると、平野が広がっていた。農村なのか、ちらほらと家があった。壁に囲われた町があった。海が見えた。もう日が傾いてオレンジ色に海が染まっていたよ。夕焼けなんて久しぶりだった。少し感傷的になった。振り切って街へと歩みを進めた。町の中に入ったところでろくな目に合わないのは目に見えた。ボロボロの姿。大陸が違うからきっと言語も通じない。明らかに招かれざる客だろうと。でも、進んでみるしかない。正面から入れないのなら、侵入するのみだと疲れた頭で考えていた。

広い平野に俺一人。歩いている間に太陽が沈んだ。農村部らしいところに着いた頃には、辺りはもう真っ暗だった。明かりのある家はほとんどなかった。俺の故郷でも、農民は早寝早起きだったから、そんなものかと思っていたが、今思えば違うとわかる。明かりの点いている家に近づいて窓の中を覗いた。家、と呼んではいるがほとんど小屋のようなものに見えた。雨風をしのぎ、寝るためのもの。小屋の中では痩せこけた男女が何か作業をしていた。裕福な暮らしどころか一般的な暮らしとも言い難い、ずいぶん貧しい暮らしのようだった。着ている服も継ぎ接ぎだらけ。机の上の短いろうそくの光の下で手を動かして何かをしていた。俺はその小屋のそばで仮眠をとることにした。おそらく中の人間には見つからないであろう場所を選んだ。見つかったもこの格好ならば行き倒れにしか見えなかったに違いない。ああ、俺を見つけたとき、君らも俺のこと死体だと思った？ ははは、まあ俺が見つけてもそう思うだろうな。

朝日が昇る前に俺は目を覚ました。まだ薄暗かったが、なるべく住人に見つかりたくなかったから、町の方へ足を向けた。畑には道具も置かれていた。だいぶ使い古されているようだった。土がだいぶやせていた。ろくな作物がとれていないであろう土地だった。いくつかの家も覗いてみたが、良い暮らしをしているらしい家は見当たらなかった。

町、もとい壁にたどり着いたが、またもよじ登れそうな壁ではなかった。壁沿いに進むと門らしいものがあった。けれど閉じられているし、鎧を着た門番らしい奴らもいた。こんな格好の俺が出ていったら、確実に切り殺される。やはり正面は突破できないと思って、また俺は抜け道を探すことにした。壁沿いにずいぶん歩いた先に、また人が通れそうな崩れた部分を見つけた。無事、俺は町に侵入した。

侵入した先は、思っていたよりボロボロとしていたが壁の外より幾分かマシに見えた。だいぶ放置されていただろう錆びた金属。崩れかけた建物。その壁に寄りかかって丸くなっている人たち。貧民街みたいだった。町の中でもおそらく外れの方にあるだろうこの場所から、中心部に向かうと考えた。門番はずいぶん立派な鎧を着ていたし、門も簡素なものでは無かったから、これはこの町の持つ一面であるとその時の俺は感じた。

俺は、中心地に向かって歩いた。ぎりぎりここの住民にも見えなくもない自分の姿だったから、隠れることもせず足早に道を進んでいた。ふと背後に気配がしたから、とっさにしゃがんだ。鋭く光る金属が見えた。真っ黒い恰好をした人間が俺に斬りかかってきたと理解した。武器もない状態で応戦できるわけがない。俺が退路を確認していると、黒い人間、声からして男だったと思うが、そいつが何かを叫んだ。俺は隙をついて、その男から離れようと駆けだした。が、目の前に何かが飛び出してきて咄嗟に避けた。斬りかかってきた奴と同じ格好をした奴が剣を構えて

いた。男の叫びは仲間を呼んでいたんだな。さすがに、仲間がこれから来ると考えると、普通に逃げるにしても厳しい気がした。狭い路地に逃げたがすぐに追ってくる。土地勘もない俺では、挟み撃ちにされる可能性も高かった。そう思った俺は、とっさに壁を登って屋根の上を走った。崩れかけた建物を踏まないよう避けるのは苦労した。適当なところで下に降りてまた走る。屋根の上から見ると、低めの壁と門が見えたからそこを目指した。

おそらく門の正面突破も不可能だが、悠長に抜け道なんか探している場合じゃなかった。仕方がない、そう思って俺は屋根の上に登って助走をつけて低い壁に向かって飛んだ。なるべく、門番がいるところからは遠い位置を選んだ。素早く、壁、屋根、路地と移動して息を整えた。体力が落ちてるのに、やるものじゃないと思ったな。不思議そうな顔するなよ。俺は割と身体能力は高い方だけ。

路地から、通りを覗くときれいな恰好をした人間がたくさん歩いていた。いや、あれが一般的なのかもしれない。やたら煌びやかな奴らを後で見たから。バレないように路地を移動して、町の様子をうかがった。市が開かれているのか色々なものを販売しているのが見えた。活気のある街に思えた。奴らは、不思議な力を使っていた。何も無いのに火を起こすとか、水を球体上に浮かすとか。奇術みたいに仕掛けがあるのかと目を凝らしたが、よくわからなかった。というか、見世物でつかっているわけじゃないんだ。当たり前のように、ペンを使って紙に字を書くような感じか、その力を使うこと自体が日常なんだと思う。

今、あの町のことを考えて思い出したことがある。俺がガキの頃の話だが、故郷にいたころ村の長老が語っていたことがある。その昔、特別な力を使える一族がいたらしい。しかしその一族は、その力ゆえに迫害された。彼らは、どこか遠いところに逃げて、そこに国を作った、と。

この話が、真実かどうか長老自身も知りはしなかつたろう。長いこと語り継がれてきた伝承の一つだから。……君のところでも同じような話を聞いたのか。なるほど、有名なおとぎ話の一つにあると。他のところでも同じ話があるなら、もしかしたら本当なのかもな。俺の、あるいは君の先祖たちは、その特別な力を持つ奴らを嫌った。魔の力を持つものとして迫害して追い出した。

今はこんな風に話せているが、その不思議な力を使っているのを見たときは驚いた。声も出ないくらい驚いたのが救いだっただな。しばらくの間、安心してた。理解してくると、俺はまた歓喜した。獣人たちを見たときと同じだった。路地の暗い道を静かに歩きながら、もっと不思議な力が見られるところはないかと考えていた。通りを覗いているとき、門番たちと同じ鎧を着た兵士

たちが、何か話しているのが見えた。何を話しているかは、さっぱりわからなかったが、門番が有能ならば、俺の侵入がバレているだろうから、より警戒しながら動くことにした。鎧を着た兵士のほかにも、外套を着て杖らしいものを持った奴もいた。何の職業だろうな。

学校らしい施設も見つけた。広いところで、不思議な力を打ち合っていた。戦闘訓練だろうか。火の玉飛ばしたり、雷みたいなのを落としたり。あとは、剣や盾が光り輝いていたな。恐ろしい力だと思った。あれが戦に使われるとすれば、いったいどうなるのか。だが、そうだとすれば、どうやって彼らは迫害されたんだろう。ともかく、あの大陸には見たこともない力を使う人間たちが住んでいる魔の国があった。

今、ふと疑問に思ったことなのだが。内壁の中の人間は、まともな服を着て不思議な力を使って生活していた。しかしそれまでの過程であった人間たちは、みすぼらしい姿で不思議な力を使うところは見られなかった。中の人間は、不思議な力で火を出していたが、外で見たあの男女は、たった一本のろうそくで作業をしていたし、明かりのある家がほとんど見られなかった。俺を斬りかかってきた奴らも、不思議な力を使う様子はなかった。剣も変な様子ところは無いように見えた。俺が逃げた時だって、あの力が使えたなら遠距離で攻撃できたはずだった。

外の貧しい暮らしをしている人間たちと、中の豊かな暮らしをしている人間たち。今思えば、あそこは明らかな格差があった。多分、外の人間は力を使えない。それ故なのか、貧しい暮らしを強いられている。どこの国にも差別や迫害は生まれるものだが。……君らのいた国もそうか。俺のいた国もそうだった。

もし、あの伝承が真実で、あの国が逃げてきた一族によって作られた国ならば、皮肉なことだよな。魔の力のある者が、無い者たちを迫害するなんて。

しばらく路地に隠れていると、兵士たちの数が多くなってきた。侵入に気づかれたのだと思った。俺は、壁の外への脱出のために動いた。最初は、通り抜けられる壁を探そうと思ったが、のんびりしていれば見つかりそうだし、なによりあの力に勝てる気がまるでしなかった。仕方がないから、侵入時と同じ手段をとることにした。幸い、俺が逃げてきた壁の方には、門も門番も見つからなかった。屋根から助走をつけて壁に飛び乗る。外の飛び移れそうなところを探して下に降りた。そこには、初めに見た貧民街のようなところが広がっていた。この時の俺はかなり焦っていた。うかうかしていると黒い人間たちがまた来るかもしれない。とにかく早く駆けて高い壁を目指す。その壁は越えられそうに無かったから、とにかく急いで抜け道を探した。



天が俺に味方したのか、あっさりと通れそうな道を見つけた。壁の外に出て一息つく。気が付くともう夜だった。壁のそばで寝ることはしたくなかった。目を凝らすと、木が一本立っているのが見えた。木にたどり着いて、周囲に気配がないことを確認して上に登った。木の上で寝るのは久しぶりだったが、寝心地は悪くなかった。

朝日で目を覚まして、周囲を見渡した。出てきた壁と向かい合うように、高い壁がまた見えた。行くべきところもないし、そこを目指すことにした。道中には何もなかった。家も、畑も、森も、道も。

壁は相変わらず高いものだったが、一つ違うところがあった。よじ登れそうだったことだ。いや、笑わないでくれ。さっきまで俺が相對していた壁たちは、足をひっかけるような継ぎ目のない、まるで一つの大きな素材で作られているようだった。だけど、その時の壁は違った。積み上げられて、作られた壁だった。登ることに決め、足をかけた。頂点に着くまでに大して時間はかからなかった。

壁の内側は、町ではあった。だが、きれいとは言い難い、そんな状態だった。発展中、というか作られている途中のように感じた。町を見渡しても高い建物はなく、着地できるようなところは見つからなかった。降りることは難しいと悟った俺は、外側の壁を伝いながら町の中を見ることにした。……どう考えても間抜けな図ではあるよな。

一応人間が生活しているのは見る事ができた。獣人でもない普通の人間が、不思議な力を使うこともなく生活しているようだった。おそらく、俺が知っている最も普通の姿形をした人間たちだった。俺はすこし、落胆した。あの大陸に着いてから見たことも無いものを見すぎていた。だから、ここに来て自分たちと同じような生活を営んでいる姿を見て、つまらないなんて思ってしまった。少しがっかりしていると、頬を何かがかすめた。熱い、と思って頬に触れると痛みが走った。手に血がついているのを見て、何か攻撃があったとわかった。ああ、そう、この傷だ。幸い深くはなかったようだが。

どこから飛んできたのかと町の中を見渡すと、ヒュッという音がして頭を下げた。頭上を矢のようなものが飛んでいった。位置がバレている。逃げなければ思ったが、町の中を見た一瞬、武器を装備したらしき人間が、壁をまるで階段を上るように登っていくのが見えた。壁を作ったのは中の人間たちだろうし、おそらく内側から登りやすいように作られていたのかもしれない。おそらく降りていたら、追いつかれて上から殺される。そう思って俺は、壁を横に横にと移動した。どこか降りやすい地点で降りて逃げるつもりだった。壁の向こうからは、俺がどちらに動いてい

るかおそらくわからない、そう信じて動いていた。しかし、無我夢中で動きすぎた。気が付くと、下には海が広がっていた。まずい、そう思ったとき、視界が陰った。見たことも無い、おそらく武器であろう何かを構える人間がいた。避けようと思った俺は宙を飛んでいた。ああ、もうこれは死んだと思ったね。死にたくないって願った。そもそも死ぬつもりで島に流されて、命なんてどうでも良かったから、あれほどの好奇心で動いていたのにな。この高さで、海に叩きつけられて、生きていられるなんて思っていなかった。故郷のこと、この大陸で見たこと、良いこと悪いこと、他にも色々、沢山思い出した。途中で意識が無くなったから、海に叩きつけられたかはわからない。そして気が付いたら、君らに助けられて、この船の上にいる、というわけ。

大体、こんな感じだったか。すべては俺の主観で話しているから、本当のことなんて欠片もわからないけどな。

最後に見た町、いやあれは多分、国か。あれは、俺にとっては普通の国に見えたが、もしかしたらあの大陸では異質なのかもしれない。普通の人間は、あの大陸じゃきっと生きづらいはずだ。獣の姿と力を持った奴らや、魔の力を持った奴らがいるあの場所で。あの国は、魔の国で迫害された奴らが作ったのかもしれないな。

俺は、あの大陸でいくつか壁を越えた。あの国たちはそれぞれが壁で隔てられていた。交流があるのかなのか、その判断はつかなかったが、あの高い壁は交流を拒否しているように見えた。あの国たちは争いをした。それで、己たち以外は拒否した。他を認められなかった。俺の想像でしかないが。

まあ、俺の話はこれで終わりかな。あの国たちを見て周って、色々思ったところはあるが、それを話すのは止しておくよ。あまり考えたいことでもないし。どうした、何か訊きたいことがあるのか？ 答えられることは無いぞ。見てきたことは話したし、それもかなり憶測交じりだしな。ああ、大陸のことじゃなくて、俺のこと。

あまり面白くもない話だがな。俺のいた国は戦をし、他の国を侵略して、自国の領域を拡大していた。今も多分そうだろう。俺は、そこで兵士をしていた。徴兵、というより無理矢理拉致されて兵士になれと言われた時、俺に逆らえる理由なんてなかった。身寄りもなく、身分も最底辺の俺に。兵士になって、幾人も敵兵を殺した。戦果を挙げたからか、低い身分の人間が就くことのできる中でも上の地位に就いた。闘う才能はあったのかもしれないが、精神はそれについてこれなかった。俺は段々疲弊していった。当時の敵国を統治下に置き始めたころ、俺はその敵国兵を助けて逃がしてしまった。当然、大問題になったよ。普通に考えたら死刑だったに違いないが、俺のその戦いでの功績のためか、俺は流刑になった。あるいは、俺に良くしてくれた友人が、

上を唆したのかもしれないが。俺の流刑先はずいぶん問題になっていたようだから。

な、面白くない話だろう。

俺の国もそうだが、他の国も領土を求めて争っているとは聞いた。そうか、やはり君たちの国も。そうだな。海の上は良い。思っていたより快適だ。……なんだ、それは。ずいぶん魅力的な話だな。そうだな、雑用は得意だし、わりかし戦える。世話になるな。故郷にも帰れそうにないし、生きるつもりもなかったが。未知のものを見るのは、面白かった。もう少し、生きて、見てみたい。ああ、これからよろしく頼む。

どうした？ 新しい仲間に、リーダーの君から何か言い渡すことでもあるのか。話し方に敬意がないとか？ 気にしないのなら、助かる。あまり得意じゃなくってね。

考えたくないこと？ ああ、未来のことで悲観的に考えてしまうのは良くないことだとわかってはいるのだが。そうか、君もか。

何も地続きの国のみ侵略することが、領地を広げ、国を繁栄させる手段じゃない。海の外、他の大陸を探し始めた国も多いだろう。嫌なことだが、きっと俺も、影響を受けている。こんな好ましくない発想が浮かぶくらいには。

あの大陸が、外の国から、どう映るか、なんて。

終

あとがき

大体、タイトルの通りです。

初投稿になります。どうぞよろしくお願いいたします。言い訳も後悔も尽きないほどにあります



Alex

大島治輔

## 【隻眼のジャックの話】

この度は誠にありがとうございます。ああ、失敬。実は先日の戦争で受けた傷が未だ完治してなくて。ご心配なく。もう日常生活に支障はありません。え、この目ですか？ これは怪我ではありません。どちらかと言うと体質ですかね。このようなおめでたい席に包帯、眼帯姿など野暮であるとは重々承知しておりますが、どうかご了承ください。

おや、俺をご存じなのですか？ 確かに俺はジャック・ライアンで合っていますが……。士官学校誉れの五人衆？ 隻眼の騎士？ え、俺そんな風に言われてるんですか？ ていうか五人衆ってもしや卒業式典の成績上位者五名のあれ？ いやいや知らないですよ。卒業してすぐ戦地行きでしたし、その後は色々バタバタしてて大変でしたし。第一、俺なんかしががない地方地主の倅ですよ？ そんな貴い身分の方々に噂されると何というか、照れ臭いというか、恐れ多いというか……。ほら、あそこ。あの貴婦人方に囲まれている男二人組がいるでしょう？ ラファエルとイサーク。アイツらみたいな実力も家柄も申し分な連中ならわかりますけど。後は、見えませんか？ あの三角巾で右腕を吊った大男。あいつがオリバーです。卒業式典で次席だった。これで五人衆とやらは全員ですかね。……ええ。全員なのです。今ここにいる四人で、全員。アイツは、主席は来れないでしょう。いくら優秀と謳われたって、何の犠牲も無しに占領拠点奪還なんて成果は得られなかった。俺たち四人が五体満足で生きているのも、きっとアイツのおかげなのでしょうから。

やはりご存じでしたか。我らが主席・アレックス。ははっ……ダメですね。湿っぽくしてると奴にウザがられそう。……どうしましたか？ 変な顔して。俺たちは友人ですもの。これくらい当然ですよ。アレックスにも言われました。すぐに昇進して跪かせてやるから気安く話せるのも今の内だぞって。……勿論ジョークですよ？ アイツなりの。アレックスは不器用というか、面倒くさい性格してるというか。可愛くないところがアイツの可愛いところでもあるんですけどね。

士官学校でのアレックスは、まあ、とっつきにくい奴でした。まず身分が全然違いますもん。妾腹とはいえ現国王の第三王子。容姿だって、見たことありますか？ まさに紅顔の美少年というか、本当に貴い身分の方はただそこにいてだけで圧倒される程に気高くいらっしゃる。それが口を開けたらもうぶっくら棒で。融通は利かないし歯に衣着せない。いつも二言目には国のため

王のため。そのくせ仲間に「頼む」の一言も言えないのですよ。入学から一年くらいは孤立していました。卒業までには流石のアレックスも大人になったのか、だいぶ丸くなりましたけど。アイツ、根っこはただ生真面目で世間知らずなだけなんです。周りも段々「ああ、こいつはこういう奴なんだな」って理解して、そっからは仲間として一緒に笑い合うようにもなれました。アレックス自身も不思議な魅力の持ち主でして、アイツが当初は言えなかった——射抜くような瞳で「頼む」と言われれば、コイツのためなら一肌脱いでやろうと思いましたが、凜々しい面持ちで「行くぞ」と聞こえたら、気持ちが高揚して、応、と返さずにはいられなかったし、風にかき消されそうな「大丈夫か」の呟きでさえ、怪我や疲労の苦痛を全部吹っ飛ばして、頑張っよかったな、と感じさせてしまう。あれは一種の魔法でした。これこそが建国の英雄マクシミリアンの血筋、王族のカリスマというものなのか、と。

アレックスは本当に優秀な兵士でした。魔法や身体能力は勿論、戦いにおける野生の勘、とでも言うのでしょうか。それが異様に鋭かったのです。俺の右目は突然変異で、魔力の「排水溝」がここ一点に集中しています。その代わりに生まれつき右目の視力がありません。兵士として、俺はこの目を最大のハンデだと思っていました。しかしアレックスはまだ出会って間もない俺を、目としての機能も果たせないクセに抑えていないと勝手に「水漏れ」する俺の右目を脅威だと言ったのです。よく分かりませんか？ でしょうね。俺もそうでした。俺って『隻眼の騎士』なんて言われているのでしょうか？ でもそれって『隻眼に超小型高速精密弩級魔力砲を引っ下げている騎士』の略だと思うんですよ。攻撃魔法の瞬間火力や発動速度ならアレックスやオリバーにだって負けない自信があります。この右目があるから『誉れの五人衆』の一角に数えてもらえたのでしょうか。だから今この場に立っているのも、元を辿ればアレックスのおかげなんです。アイツが俺の、俺自身も気付いていなかった道を見出してくれた。だから、アイツには感謝してもしきれない。

ああ、懐かしいなあ。確かに士官学校での訓練の日々は大変でした。でも思い返してみると結構愉快的思い出というか。戦闘訓練で張り合ったり、集団行動で励まし合ったり、料理や技術の実習で四苦八苦したり。休日に街へ繰り出したことも、喧嘩して教官に怒られたこともありました。喧嘩。ありましたよ。割と。俺はあまりしませんでした。オリバーとアレックスは多かったですね。魔法も拳も両方使って無駄に生傷をこさえて、その度に治癒魔法特別教官のロベール先生にお世話になっていました。ええ、此度はその縁でお招きいただいたのです。俺たち卒業生はもうロベール先生に頭が上がりませんからね。

……アレックスの容態について、実は俺もよく知りません。俺が知っているのは、両手両足吹っ飛んだアイツがロベール先生の下に運び込まれた、までです。……ははっ、ありがとうございます……ごめんなさい、少し弱音を吐きます。確かにロベール先生は王家の専属医で国一番の治癒魔法の使い手です。でも、あの時。全身血まみれで息も絶え絶えなアレックスにくっきりと見えたのです。アレックスの、兵士としては華奢な身体を、女性たちがため息をつくような美貌を

、舌なめずりして凌辱する「死の相」が。目に魔力が這いまわっているせいでしょうか。たまにこういう占い師めいた幻を見てしまうのです。アイツはきっと、万が一命は助かったとしても、もう死んだも同然なのでしょう。

すみません。本当に。こんなめでたい席なのに。俺も、自分が思っている以上にショックだったのでしょうかね。でも俺よりもロベール先生の方がずっとショックだったと思います。先生は国王の側近も務めていらした方なので、王子であるアレックスのことも気にかけていたし、アイツを看取るとしたら間違いなく先生です。だから、今日は本当に嬉しいのです。悲しいことも少なからずありましたが、此度の結婚式で、ロベール先生が少しでも元気になってくださったら。だって先生、早くに奥方を喪って以来、ずっと後妻を取らなかったと言うじゃありませんか。先生の心の隙間を埋めてくれるような女性にようやく巡り合ったのでしょうか。

どうかロベール先生に、神王マクシミリアンの末永い慈愛と祝福のあらんことを。

### 【寵姫パトリシアの話】

妻を喪って十余年、我が弟エリックがようやく再婚を決意しました。今日はその結婚式だというのに、こんなにゆっくりとしていて大丈夫なのかしら？ ええ、分かっていますわ。今、自分が年甲斐もなく落ち着いていないことくらい。でも仕方ないのよ。あの子ったら、生涯男やもめを貫くのかと、わたくし、半ば本気でそう思っていましたもの。四十路になるまでこんな心配をかけさせるなんて。全く、姉不孝な弟だこと。それにしても、式の当日まで花嫁の正体を明かさないうなんて、エリックは何を考えているのかしら。姉であり、王の後たるわたくしにも黙ったままです。陛下がお許しになったのなら下手な相手ではないと思うけれど……。殿方の考えることは理解できませんわ。

大体我が君はエリックに甘いのですよ。わたくしのお母様が陛下の乳母でして、その縁で我がロベール家は昔から陛下と特別仲良くしておりました。わたくしが王に嫁ぐことになったのもその証拠です。陛下はわたくしたち家族の中でもとりわけ末弟のエリックをいたく気に入り、実の弟のように可愛がっておりました。その寵愛っぷりといったら、当時後の座を狙っていた貴族令嬢たちの嫉妬の矛先がエリックに向かった程です。わたくしではなく、エリックに。まあ確かに、大学で勉強をしていたエリックに側近の地位を与え呼び戻そうとしたのは、少しやりすぎだと

思わなくはなかったですけど。

思えばこの十余年、エリックの傍には常に我が君とあの子の影が付いて回っていましたわ。あの子？ 決まっているでしょう。アレックス王子よ。正直に言います。わたくし、エリックがなかなか身を固めなかったのは彼が原因ではないかと思っていましたの。あの子は、下手をすれば王家を揺るがす程の厄介の種ですから。……あら、もしかしてご存じない？ ふふ、いいのよ。ならば特別に教えて差し上げますわ。その代わりに、出かける時間になるまで、わたくしのお話につき合ってくださいな。

アレックスは、我が君マクシミリアン十五世と、忌まわしくもパン・ガンティの獣人の間に産まれた子です。驚いたでしょう？ わたくしも初めて聞かされたときは卒倒しましたもの。何も辺境の地で小競り合いがあって、その時に捕らえたオオカミ族が母体らしいですわ。強い肉体を持つ獣人の血と最も神聖なマクシミリアンの血をかけ合わせることで、パン・ガンティの獣人にもミストルテインの機械兵器にも……万が一の、魔法を操る国内の反乱分子にも対抗できる、「最強の戦士」となるために産まれた子。それを聞かされたとき、わたくしはただただ悲しかった。なぜ我が君はそんな暴挙に出してしまったのでしょうか。その頃にはミストルテインは反乱軍ではなく国として成長し始めていました。陛下は不安だったのでしょうか。いくら我が国が神祖マクシミリアンの末裔であっても、昨今の機械兵器は兵士の魔法に匹敵すると聞きますし、あの獣どももいつ不可侵条約を破って侵略してくるか分かりません。陛下は、ご自身を恨んでくれていいとおっしゃいました。しかしわたくしは獣の雌とまぐわった我が君を、浮気者と、汚らわしいなどと、口が裂けても言えませんでした。あの子はわたくしの、わたくしたち国民の罪の権現です。王の不安を慰めることすらできなかったわたくしたち臣下の不義があのおぞましい化け物を産んだのです。

このお話を、わたくしはエリックから聞きました。きっとわたくしが知らない間も、エリックはずっとこの可哀そうな王を支えてきてくれたのでしょうかね。大学で本格的に治癒魔法の研究がしたいと言い出したのもこの頃でした。王のお傍にいるため、王の役に立つために自分の出来る最善のことをしたい。そう言って。エリックが離れることを寂しがった陛下や当時新婚だった義妹は反対しましたが、結果としてあの子の努力は実を結び、若くして王家の健康を守る地位につきました。

わたくしがアレックスに初めて会ったのはあの子が十くらいのとき、義妹が病気で亡くなって暫く経った頃でしたわ。それまでは一度だけエリックが持ってきた肖像画を見たきりでした。肖像画に描かれていた幼子は、幼き日の陛下に瓜二つでしたわ。陛下のお顔を知る人ならば、皆が口を揃えて親子だと言う程に。強いて似ていないところを挙げるとするならば歯くらいかしら。小さな口元からチラリと覗く八重歯だけは王とは似ていませんでした。しかしそれにより一層、アレックスとかいう子供は我が君の皮を被った獣なのだと、悪魔は実在するのだと、わたくしは



恐ろしくてたまりませんでした。

怯えながら迎えた対面の日。まず驚いたのは、わたくしが見た自画像の、誰が描いたかは知りませんが、その人は如何に絵が下手だったかということです。アレックスはちっとも我が君に似ていませんでした。確かに髪の色だとか顔立ちや背格好は似ていましたが、目付きが全く違いました。アレックスの目はキラキラと輝いていました。目から魔力が漏れているのではと思う程に。映っただけで射抜かれそうな瞳に、間近で見るとより鋭い印象を受ける歯並び。その二つが違うだけでも陛下とは似ても似つかない、我が君とは別のヒトであると思い知ったのです。次に驚いたのは、彼が歳の割に非常によく自分の立場を弁えていたこと。事実上、わたくしは彼の義母にあたります。その時、実の父たる陛下や彼とそう年の離れていない王子王女も一緒にいました。アレックスはわたくしたちに至って冷静に跪き、臣下の礼を取りました。曰く、「我が半身は最も尊き血が流れども、もう半身には最も卑しき獣の血が流れております。こうして父上や義母上、兄上姉上とお会いできただけでも身に余る幸福にございます」ですって。たかが十の、まだまだ舌足らずな子供が、言わされた様子もなくそう言ったのよ。アレックスは幼くして、一方では最も高貴な血筋としての矜持を、もう一方では最も卑賤な血筋としての分別を備えていましたの。

よくよく考えれば、アレックスの教育にエリックが関わっていないはずがないのよね。それ以来、わたくしはアレックスを不気味にこそ思いながらも、恐れることはやめました。だって、ここまで言われてなおアレックスを恐れるのなら、それは自慢の弟を疑っているのと同じではなくて？ 以降は二回程、士官学校に入学する前と卒業した後かしら。アレックスはわたくしに挨拶に来ました。どちらもやはり跪いて、国のため、王のために、命を懸けることを誓いました。主席卒業の褒美として、彼にはわたくしの指にキスをする栄誉も与えました。何も知らないお嬢さんなら夢を見るくらいには、彼も紳士として成長したのではないかしら。

勿論、アレックスが大怪我をして帰ってきたことは知っています。エリックの下に運ばれて、それから音沙汰なしということは、まあ、そういうことなのでしょう。しかしそれが彼の定めなのです。彼は我が身と引き換えに、卑しい非魔導士たちが占拠した古城の奪還に成功しました。これできっと、陛下を奇行に走らせた不安も慰められたことでしょう。そのために産まれ、そのために死ぬべき子でしたから。

さあ、もういい時間でしてよ？ 今日は我が身の全てを捧げ、陰ながら王を支え続けてきたエリックの努力がようやく報われるのですから。姉として、陛下の妻として、めいっばいエリックの幸せを祝ってやらなければなりません。新しい義妹はどんな方かしら。うふふ、何だかわたくしまで若返る気分ですわ。

ああ、ふと思い出したのですが。アレックスは目付きと歯、陛下と似ていないところが二ヶ所あ

るといいましたわね。そう言えばもう一つありましたわ。似ていないところ。背丈ですわ。陛下は結構な長身でしょう。アレックスはそうでもないのですよ。もう青年と言える歳になったのに、いまだにわたくしと同じくらいの背丈しかないの。これはちょっと残念よね。

【特別教官及び王家専属医及び新郎エリック・ロベールの独白】

生きているつもりだった。

王家も家族も尊敬していた。褒められれば嬉しかったし、叱られれば悲しかった。ご飯は美味しく、怪我をすれば痛くて、悩みがあれば辛くて、解決すればスッキリして。

人生を真剣に生きていると、そう言えるつもりだった。

あの時までは。

我が王は捕虜である獣人の雌に欲情した。

大学の在学中に、国境近くの地で獣人と小競り合いが起きたこと、その結果何匹かの獣人が捕虜として捕らえられたことをとある教授から聞かされた。曰く、「獣人の肉体は未知の部分が多い。是非とも調べさせてほしいから然るべき身分の方に仲介してくれ」とのことだった。僕はとりあえず陛下にその由を話した。陛下は少し迷ったが、秘密裏に、王たる自分の立ち合いの下でなら、と教授の研究を許可した。

陛下は教授のいない日、人払いをした際に、僕だけを共に連れて真夜中に監獄を訪れた。

「エリック。お前はここで待っていなさい。余を探すものが現れたら、自分を取り次ぐと言って追い返しなさい。いいね？」

そう言って陛下は僕を残し、お一人で監獄の中へ入ってしまわれた。命じられた通り扉の前で

番をしながらも、僕はどうにも解せなかった。何故陛下がお一人で獣人の牢屋を訪ねるのか。お忙しい中、教授の調査の日には必ず立ち会ってくださったし、もしかしたら陛下も獣人に興味がありなのかもしれない。そんな、ちょっとした出来心だった。僕は透視魔法でこっそり陛下の様子を追うことにした。

陛下は獣人の一匹が入れられている牢屋の前で立ち止まった。オオカミ族の雌のものであったように記憶している。獣人は陛下の来訪に気付き、唸り声をあげて威嚇した。陛下は暫しそれを見つめておられた。瞳孔の開ききった目を血走らせ、深い呼吸で肩を上下させ、一切の感情をそぎ落とした面持ちは、鉄格子を挟んだ獣の殺気を真っ向から受けて立っていた。

次の瞬間。陛下が牢の中へ足を踏み入れ、目が潰れるほどの閃光が——電撃魔法が視界を覆いつくした。その時、僕は初めて王が人を傷つけるために魔法を使う姿を見た。体を痙攣させて倒れた獣人——あれだけのものを浴びて死なないどころか意識も手放していない——を、拘束する鎖を掴んで引き倒すと、陛下はその上に馬乗りになり、お召し物を次々と脱ぎ捨て……断末魔のような獣の嬌声<sup>目をそらす</sup>が扉越しに振動するのを感じ、慌てて僕は監獄に防音の魔法をかけた。しかし透視魔法を解くことは出来なかった。僕は理解してしまったのだ。あれは間違いなく陛下の本能であり、陛下の意思なのだと。温厚な王。紳士的な夫。寂しがり屋な兄。僕の知っている陛下の顔を全て剥したなれの果てなのだと。陛下は一心不乱に目の前の雌を貪り食っていた。獣人は自由の利かない身体を乱暴に弄ばれながらも、射抜くような瞳で、ぎらつく牙で、鋭い爪で、逆立った尻尾で、「殺してやる」と叫んでいた。そこにいたのは人と獣でも、王と捕虜でもない。一对の雌雄の姿であった。

程なくして陛下は牢屋を出た。陛下はそのまま教会に行き、神祖マクシミリアンの像の前で夜が明けるまで懺悔した。

数十日後、あの獣人は身籠った。捕虜は一匹ずつ隔離していたので、教授は想像妊娠かと首を傾げた。陛下は顔を真っ青にしていた。間もなく獣人は三匹の子を産んだ。うち一匹は死産であった。生きている二匹のうち、一匹は全身が毛に生えて耳も尻尾もあったが、もう一匹はどこからどう見ても人の赤子の姿をしていた。訝し気に赤子と陛下を見比べる教授。顔面蒼白にして今にも気を失いそうな陛下。赤子は陛下によく似ている。僕は自然と口を開いていた。

「黙っていて申し訳ありません。実は僕と陛下である実験をしていたのです。今までの調査で獣人が人の何倍も強い肉体や魔法への抵抗を持つことは明白でしょう。なので、その力を魔導士の子として継承出来ないだろうかと思ひまして」

陛下は呆然と僕を見ていた。僕自身、よくもまあ、出まかせでこんな嘘がつけるものだと、我ながら感心した。教授は明らかに疑いの目を向けていたが、結局は彼も忠実な王国民であり、好奇心に抗えない研究者の鏡であった。死産の赤子の亡骸と交換に、決して他言しないことを約束した。毛の生えた赤子は話し合った結果、その場で焼き殺した。

「ああ、エリック！ お前という子は……。可愛い弟よ、もう余にはお前しかいない。余と共にこの罪を背負ってくれるのは！」

教授と別れた後、陛下は泣きながら僕を抱きしめて言った。僕は片手に人の姿をした赤子を、もう片方で陛下の背中に手を回して、勿論です、僕は何処までも陛下と共にあります。そう言った。言いながら、頭を占めていたのはあの夜のことだった。

男と女がまぐわい、子が産まれる。当時まだ若造と言えども、僕だって初心じゃない。それに伴う行為も欲望も知っている、はずだった。目をつぶると鮮烈に蘇る剣戟のような行為。全ての皮を脱ぎ捨てただの雄になり下がった王と決して折れることなく瞳に殺意を灯し続けた獣に、狂おしいまでの生の雄叫びを感じた。ぬるま湯に浸かっていた身に煮え湯を浴びせられたような、無いことに気付かなかった窓から北風が吹きつけたような。

僕は今まで生きてすらいなかった。

さっきまで大人しく眠っていた赤子が、ぎゃああ、と泣き出した。赤子のあやし方なんて知らず、僕はわたわたと途方に暮れてしまった。揺すっても抱きしめても泣き止まず、もう魔法で眠らせてしまおうかとも思った。

「貸しなさい」

パニック状態の僕に、涙を拭った陛下が言った。あの夜とは似ても似つかない、僕がよく知る陛下の声であった。陛下の手に赤子が渡ると、あれよという間に泣き止み、健やかな寝息を立て始めた。その時、陛下は既に三児の父であらせられた。一夜の、あまりにも大きな過ちで授かった我が子を抱く陛下の表情は、愛しいものを見るようにも、苦痛に耐えているようにも見えた。

それからの十余年、僕はこの歪な親子のために生きてと言っても過言ではない。赤子は身分の卑しい側室の子ということにして、他の王子や王女とは隔離して育てた。正式な出生を知るのはごく少数で、世話係にはマクシミリアンの名のもとに絶対の守秘を誓わせた。反対にその子には早くに自分の血筋を明かし、徹底した忠君愛国と選民思想を叩きこんだ。忌まわしき獣の子でありながら王の寛大な愛によって自分は認知していただいている。だから自分はその恩に報いなければならない、と。

ただ、三つほど誤算があった。

一つは、赤子が女兒であったこと。こればかりはどうしようもないため、自分の性別を偽るようにならぬよう教え、王子としての教育を施した。幼い頃からの刷り込みが功を成してか、今日まで彼女は何の疑問も違和感も無く王子として生きている。

二つ目は、性格面では全くと言っていい程陛下に似なかったこと。外見が父親譲りであった分、

内面は完全に母親に似てしまっただけだ。誰に教えられるまでも無く、彼女は現王家の誰よりも高慢で高潔な、上に立つ者としての威厳を備えていたのだ。周りの者たちは腐っても神王マクシミリアンの子だと思っていたそうだが、生憎と陛下は彼女ほど気高い人物ではない。

三つ目は、誇り高い王子として忠節の下僕として彼女が成長していくにつれ、僕自身が彼女から目が離せなくなってしまったこと。僕は彼女が産まれてすぐ治癒魔法を学ぶために大学に残る決意をした。僕が離れることを嫌がった陛下は反対したが、これも陛下とあの子のためだと言い、在学を認めさせた。当時結婚したばかりの妻は実に不幸な女性だった。勉強に王の世話にと忙しい僕に可愛らしく拗ねる妻を、決して抱けないわけではなかった。しかし僕の脳裏ではあの夜の出来事が古傷のように疼いていて、気が付けば治癒魔法の応用で彼女に死病を植え付けていた。後にも先にも陛下に隠し事をしたのはこれだけだったりする。王家専属医として王とあの子の傍に、士官学校に入学する際にはわざわざ特別教官を引き受けてまで彼女について行った。彼女はいつも輝いていた。孤立した時も、仲間にもまれていた時も、試練に直面した時も、喧嘩して怒られる時も。それは一輪の花を愛でるような気持ちだった。甲斐甲斐しく手を尽くしようやく花開いたはずなのに、僕は花卉に触れることさえ許されない。どんなに近くに咲いていようと、人の手を超えた造形美を前にただただひれ伏すより他ない。雨風に散らされぬように祈ることしかできず、一方で雫に滴り風に舞う夢に身を焦がす。彼女を見守る日々は僕に鼓動の音色を教えてくれた。

彼女の活躍によりミストルティンが占拠していた古城の一つを奪還した、という知らせに喜んだのも束の間。彼女は両手両足がもげた状態で帰ってきた。生きているのが不思議なくらいだった。死ななかつたのは周りの兵士たちが優秀だったのと、彼女自身の獣人の血のおかげだろう。彼女の事情を知り、かつ最も信頼のおける助手を二人連れて、緊急治療に取り掛かった。彼女は笛のような呼吸で血を吐きながら必死に生の淵にしがみ付いていた。その姿はまるで、魔導師と獣人、二つの間に生まれながら極端に寄って生きてきた彼女の生き様そのもののように思えた。朦朧と僕を捉えた、あの射抜くような瞳が湛えていたのは、いつかの夜のような殺意ではなく、ほろりと一枚の花弁が散るような、僕に対しての無条件の信頼だった。

キィ、キィ、と音を立てる車椅子を、エリックはゆっくりと押していく。椅子に座った人物——アレックスは、ただ黙ってエリックに身を任せていた。やがて大きな扉の前で足を止めると、エリックは身を屈めてアレックスの目を覆っていた包帯を慎重に取り払った。

「いかがですか、王子。目の調子は」

「……ぼんやりと白いものに覆われている」

「ご安心ください。それはただのベールですから」

アレックスは訳が分からない、と言いたげな表情でエリックを見た。この様子からして視力の方は問題ないだろう。声帯も変わらず異常なし。聴力も回復済み。体調は上々。よかった。瀕死の怪我から万全、とは言い難いまでも、ベッドから起きられる程度には回復したアレックスに、エリックは見せたいものがあると少々無理を言ってこの場に連れ出したのだ。

エリックが目配せすると、魔力に反応した扉がひとりでに開いていく。扉の隙間からこぼれ出た光に、アレックスは眩しそうに眼を細めた。そしてその向こうには教会のような一室に沢山の、恐らくそれなりに高貴な身分であろう人々が一様にこちらを凝視していた。中にはアレックスの知る——隻眼のジャックにラファエルとイサーク、オリバーは厳つい顔を驚愕に染め上げ、数える程しか会ったことのない異母兄姉と王妃パトリシアまでいる。皆が呼吸を忘れたかのように佇む中、ただ一人エリックだけは取り乱した様子も無く、ゆっくりと車椅子を押して、人々の中心を歩み始めた。はっと我が身を見ると、アレックスが身に纏っていたのは純白のドレス。最奥の神祖マクシミリアン像の前では、正装に身を包んだ国王が二人を待っていた。

「エリック！ これはどういう」

し、とエリックがアレックスの言葉を遮る。車椅子の軋む音以外、水を打ったような静寂が場を支配していた。二人が王の御前まで到着すると、エリックは車椅子から手を放し、静まり返った来客へ厳かに語り始めた。

「突然の出来事にご来賓の皆様もさぞ驚かれたことでしょう。こちらにおわしますは第三王子アレックスその人でございます。このお方は女性の身でありながら性別を偽り兵士として武勲によって父たる王に忠誠を誓う道をお選びになりました。しかし先の戦争で獅子奮迅の活躍を見せ、見事ミストルテインの占拠地の一つを解放されました。……ご自身の身体と引き換えに。右腕は損失。足は両方とも麻痺が残り、再び兵士として地を踏むことは絶望的でしょう。だからもう十分ではないでしょうか。このお方は兵士として十分に忠義を貫きました。故にこれからは女性として生き、このエリック・ロベールの妻として、夫婦二人で王に尽くしていくことを、ここに誓います」

ひゅっと、息を呑んだ。沈黙に囚われていた人々はやがて困惑にざわめき、戸惑い、そして最後には大きな拍手に包まれた。

ああ、僕って実は法螺吹きのあるのかな。そんな表情はおくびにも出さず、エリックは車椅子の前に跪き、アレックスの顔を覆うベールを上げた。もう陛下の顔すら視界に無い。

「神王マクシミリアンの名のもとに、永遠に変わらぬ愛を誓います。愛しい我が妻、アレクサンドラよ」

ベールを払った彼女の瞳には、驚愕と疑念、そして一度たりとも見たことの無い、深い絶望を孕んでいた。地を這う手を伸ばし、咲き誇る花を手折る。自ずから散るはずの花を握り潰し、真っ直ぐに伸びた茎を絶つ、その手触りの何て甘美なことか。

アレクサンドラ。どうか永遠に、その絶望の中で僕を射抜いてくれ。僕に生きていると感じさせてくれ。

## 出会い（パン・ガンティの言い伝えより）

---

出会い（パン・ガンティの言い伝えより）

山羊沢 優弥

歴史書の、学者の中にもまだ知らない者がいるような、むかしむかしの話である。

魔法使いのマクシミリアン王国と獣人の国のパン・ガンティ、軍人国家のミストルテインの3つの国が争ったり協定を結んだり駆け引きをしていた頃の物語……

獣人の国のパン・ガンティは種族によって集落を作る。

今の世界でいうところの魚類から鳥類、人間を除く哺乳類の血を引く種族ごと……ミュータントといえはいいのだろうか。

そして哺乳類の中でもイヌの仲間やネコの仲間同士……先祖によってまた異なる集落を作って暮らしていた。

とはいえ。

パン・ガンティには義務教育という類のものはないが、その集落を束ねる長や長を直接支える者の家系にあるものは、後に政治的集会に参加したり一族を束ねる必要のあるため、原則ある程度の教育を受ける暗黙の了解があった。

そのためあらゆる種族の長の家系の子どもたちが同じ教室に集まるわけなのだが。

「……いい気になってんじゃねえぞ」

またか……パロは心でため息をついた。

種はやや違えど同じ生き物を先祖に持つオオカミ族とイヌ族は、近い関係にあるが近いがゆえ



に多少諍いもある。

イヌ族の長の息子のパロは成績優秀で品行方正な優等生。社会性もあり他の種族とのコミュニケーション能力も高いため種族を超えて慕われている。

今日の授業でもミストルテインやマクシミリアン王国の歴史を調べて作文を書く宿題でパロが担任の先生に褒められたのだった。キャクカンセイがありながらドクジのケンカイもしっかりしている、と言われたもののどこが良いのかパロ自身よくわからなかった。

ただあの時わかったのは、後ろに座っているオオカミ族の長の息子のリビと長を支えるナンバーツーの息子であるハイリとジルの視線がとても痛かったということだけだった。

「イヌという生き物はもともとマクシミリアンやミストルテインの国にいる奴らに都合よく従うように作られた生き物なんだってなあ。」

ハイリはオオカミ族が仕事や家事、対魔法のための防御などに使う道具を作る職人の家系で、マクシミリアン王国やミストルテインの人間に対抗できる道具や武器を作らんとしているからか、人間のいる両国に反目する気持ちが強い。

「なるほどお。だから人間どもに媚を売る性格が文章にも出っちゃったわけですね。ハイリさんはさすがよく見ていらっしゃる。」

ジルは商人の家系。オオカミ族の中でも獣人の人脈を多く持っていて、商売のために正体を隠して他の国に出かけたりすることもあるらしい。金品の管理もとてもうまくてオオカミ族の大蔵大臣の役割を担う家系だ。ゆえに他人をおだてて取り入るのがうまかった。

「……べつに僕は人間に媚を売るために書いたわけじゃ……」

「はああ？ろくに戦えもしない弱虫のくせにいっちょまえに！」

にいちゃあん、先生が呼んでるよー

声を聴いたリビがちっ、と舌打ちして先生のいる部屋に行った。

腹いせにパロを突き飛ばして。

「いったあ……」

「大丈夫パロ兄ちゃん？お兄ちゃんたちがいつもごめん」

「ありがと。大丈夫だよ。」

オオカミ族の長の息子のリビは力が強くて運動神経もよく、乱暴なところはあるもののリーダーシップに優れていた。

マルクはリビの弟で、兄のような統率力に憧れる一方でパロの頭の良さも尊敬していて、計算や文字を教わったりしていた。

正反対の性格のオオカミ族とイヌ族が何とかやってこれてるのもマルクみたいな獣人がいるからなんだろうな、と常日頃パロは思っていた。

「ほんとは先生に呼ばれてなかったんだけどね。お兄ちゃん怒り出すと止まらなくなっちゃうところあるから……」

「いいんだよマルク。僕が意気地なしのところがあるのは事実だし、リビも僕のそういうところにイラついてるんだと思うんだ。」

「ちがうよお。パロ兄ちゃんは意気地なしなんかじゃないもん！お兄ちゃんはミイナお姉ちゃんがパロ兄ちゃんのこと好きだから悔しくてイライラしてるだけだよ。」

ネコ族の長の娘でマドンナのミイナのことをリビが好いているという噂やリビがミイナに告白してふられたという噂もずっと前に聞いていた。でもいくらなんでも。

「いやいやそれはないって！ミイナはパレードでミストルテインの若い軍人さんを見て、かっこいいって言ってたんだよ？」

僕なんてあの人たちみたいに強くもないし」

「でも僕廊下で聞いたんだもん。ミイナお姉ちゃんがお友達に、パロ兄ちゃんはどんな女の子が好きなの？って聞いてたの。パロ兄ちゃんが好きなの？ってお友達に聞かれて顔真っ赤にしてたの見たもん！」

可愛くて優しいミイナに好かれているのは嬉しかった。とはいえパロはミイナに好かれるほどの魅力が自分にあるとは思えなかった。

「まさかあ。それだけではまだミイナが僕を好きかもわからないし……？マルク？」

さっきまであんなに笑っていたマルクが不安げにあたりを見渡していた。

「マルク、大丈夫か？」

「あっ、ううん。だいじょうぶだよ。さっき誰かに見られてるような気がしたけど、気のせいだったみたい。」

「そう。ならいいんだけど……」

マルクと別れた後も、パロは様子が気になって仕方がなかった。

ガネーシャ様にお祈りに行こう。

学び舎が休みの朝、パロはガネーシャ像のあるお寺に向かった。

パン・ガンティを建国した獣人がガネーシャ神を信仰していたということで、イヌ族の集落の近くにあるお寺ではガネーシャ神を祀っていた。

種族によって差はあるものの、信仰の深い種族はこのガネーシャ像に休日の朝にお参りをする習慣がある。イヌ族も信仰の深い種族の一つだった。

お祈りするとき、いつもありがとうございますって写経をそなえてマルクのこと守ってもらえるように頼もう。

そう思い住職さんに挨拶し、ガネーシャ像の前に来たその矢先。

きらびやかな被り物をした半裸の男がガネーシャ像の前でうごめいていた。

どうやらお供え物の握り飯を食べているらしい。

「……何をしていますんですか？」

「うわわわわ！なんじゃい驚かしおって……ん？」

振り返ったその姿は目の前のガネーシャ像にそっくりだった。

さすがにパロもこれには目を丸くした。

「お前さん、わしのことが見えるのか？」

「あなたは、ガネーシャ様なのですか？」

お堂より少し離れたベンチに二人は腰かけていた。

もっとも道行く者にはひとりにしか見えていないのだが。

「そうじゃよ。まさかわしの姿を見ることができる者がおろうとは……たいがいはよほど靈感の強いものか、死期の近づいてるものに姿が見えることはあるんじゃが」

「いつもああやってお供え物を食べていたのですか？」

「神様という仕事は世代交代でやっておってのう。あちこちを見回りするとなると腹もへるしの。」

正直目の前にいるガネーシャ像そっくりの男が本当にガネーシャ神なのか、半信半疑だった。

学び舎で聞いた神様はもっと清貧でご飯にがつつくようなイメージはなかったのに……と思いつつ。

「像のお姿と何一つ変わってないのですが、この国を建国したときのガネーシャ様はあなたなのですか？」

「いいや。その時のガネーシャはわしの一世代前じゃよ。先代が神の仕事が続けられないということで、わしにお鉢が回ってきたわけさ。神というのは年齢を重ねても見かけに変化がないもんで、みな同じような外見になっちまうわけなんだが。」

「見回りと言っていましたけどなぜそのようなことを……？」

「封印が破られたとかでラクシャーサがここらに潜んでいるようでの。やつは心に闇を抱える者に近づいて若さや寿命を吸い取っていくんじゃ。それがやつらの魔力の源になるからのう。そうじゃ、お前さんの力を見込んで頼みがある。」

「……なんです？」

「わしが見えるということは、それだけお前さんに忍耐があるということなんじゃよ。魔力に触れても魔力に対抗する力が強いから目に見えるわけで、しかも会話ができるほど心を乱されないくらいのな。そこでわしの力をいざというときのため預かっておいてほしいんじゃ。」

「力を、預かる？」

「そうじゃ。どうも一人で回るには体力がおぼつかん。お前さんに魔力を預ければラクシャーサの魔力も目に見えるようになる。わしと一緒に見回りを手伝ってはくれないか？」

「わかりました。僕もやります。」

もし悪魔のラクシャーサがここらにいたとしたらマルクの身にも危険が迫っている……

パロは危機感を覚えたのだった。

異変は案外早く訪れた。

体育の授業。木に登る授業だった。いつもなら一番にてっぺんに登ってはパロに木の実を投げつけるリビが。

ドスンと大きな鈍い音を立てて木から落ちてしまったのだ。

うずくまる彼の四肢には黒いあざが広がっていた。

図工の授業。彫刻の授業だ。

職人肌の父の腕を引き継ぎ、あっという間に見事な船を完成させてはパロの作品に難癖をつけるハイリが。

彫刻刀が持てないと両腕のしびれを訴えた。

その両腕にもどす黒いあざが広がっていた。

リビにハイリ……だとしたら今度は。

休み時間になり、パロはマルクとジルを探した。オオカミ族のトップが狙われるとしたら二人の身に危険が迫っていると思ったからだ。

「ラクシャーサは卑怯な奴での。自分の手は汚さずに人の心に入り込んで悪さをさせる。トップの位置にあるものには必ず妬みや嫉み……負の感情や欲望が付きまとうから、そこに付け込めば効率よく原動力が手に入るわけじゃ」

「なんてことを……」

教室、中庭、廊下、図書室、先生の部屋……を回っても二人はどこにも見当たらなかった。

「これ以上どこを探せばいいんだ……あっ」

「どうしたんじゃ？」

「屋上。まだ探していなかった！」

急ぎ足でひたすら走る。お願いだ、誰かいてくれ！

「マルク！ジル！」

「……たす、け、て……」

屋上の扉を開けると二人はそこにいた。

だが。

パロが見たのは、見たこともないような恐ろしい形相でマルクに迫るジルと、おびえるマルクだった。

ジルの手には何やら古びた紙が握られている。

「魔法陣か……あいつめ、禁断の呪術を使いおったな。そそのかした奴がいるんじゃない」

「ジル……お前まさか」

「……ちえ。見られてしまいましたかお二人さん」

「お前、マルクに何をしてるんだ」

「見られてしまったみたいなんでね、ちょっと口封じをしようかと思っただけなんです。」

「マルクがお前の何を見たっていうんだ」

「僕が中庭の裏の方に行ったのを気になってついてきたんだとここでマルクのやつが白状したんです。この呪術は見られてしまっただけとはいけないものだったのですがねえ」

自棄になったジルが投げ出した魔法陣には毛の入った小さな紙袋が挟まれていた。そこにはリビとハイリの名前があった。

「……お前、二人と友達じゃなかったのか？親父さんたちが幼馴染で、家族ぐるみで仲良くしていたんじゃない……」

「仲が良いのは親父らだけです。僕らはその腐れ縁でつるんでいただけで。まあ、僕が下に見られていると知ったのはつい最近のことですが。こないだリビの家に遊びに行ったとき、僕が親父の客を接待して遅くなったのが気に入らなかったみたいで、二人で話してたんですよ。あいつはいいよな。とくに何かできるわけでもないのに金だけはたんまりあっていい気になって、とね」

「……」

自分に対してリビたちが悪態をつくのはいつものことだ。でもリビが仲が良かったはずのジルの馬鹿にしていたというのがうすら寒く感じた。

「それで一泡吹かせてやろうと思っただけですよ。自分が何でもできると思いがっているあの二人にね。にしてもマルクだけじゃなくパロさんとそこにいるよそ者にまで知られてしまうとは……これは手を打たなければなりませんね」

……よそ者？ジルにはガネーシャ様が見えている？

待って。ガネーシャ様のことが見えるのは……

—たいがいはよほど霊感の強いものか、死期の近づいてるものに姿が見えることはあるんじやが

「うあああああ！」

まるで断末魔のようなうめき声だった。ジルが突然胸を押さえて苦しみだした。

「ジル！」 「ジルお兄ちゃん！」

パロとマルクは思わず駆け寄った。だが、ジルに近づいたとたん強い電気のバリアにはじかれ、パロは尻もちをつきマルクは気を失ってしまった。

「マルク！」

「おやおや、何やら騒がしいですねえ」

「先生！」

そこにいたのはパロたちのクラスの担任の先生だった。

パロの作文をパロにはよくわからない言葉で褒めていた先生。

「ジルとマルクが」

「近づくなあ！」

パロはガネーシャに突き飛ばされてしまった。

「ガネーシャ様、何をするんで……す！」

ガネーシャは先生に向かって魔力の弾を放った。



打たれた先生は牙をむき出しにし髪を逆立たせ、世にも恐ろしい怪物となり果てていた。

「うまいことやったもんじゃのうラクシャーサ。先生に化けて学校に潜んでいたとは」

「ここは種族の長の血を引くガキどもがわんさかいるんで獲物だらけで居心地が良かったんだがなあ。あのガキをちょっとそそのかしたら食いついてきたわい。オオカミ族のガキどもはそろいもそろって邪心まみれで面白いのなんの。」

「どこがおもしろいんです……」

「なんだ、あんなにいじめられていたのにこいつらのこと何も知らないのか？お人よしもたいがいにしとけよ、イヌ族のガキよお。長のガキは見栄っ張りだし、職人のガキは長を出し抜いてやろうという欲であふれかえってやがる。そっちの商人のガキは金にものを言わせてたくせに気に入らないことがあったら感情に任せて人を売る。3人が3人お互いのことを気に食わず腹の中探りあってるのがまあおかしくってなあ」

ラクシャーサは心の底から愉快そうに笑っていた。

聞いててパロははらわたが煮えくり返りそうだった。

いい気になってよくもまあ……

「まあ楽しい余興もこれでしまいだ。あとは3人のガキと、あいにく邪心も欲も育ってないが若さだけはたんまりとあるあいつをもらってくぜ」

言うが早いかマルクに近づいていく。

そうはさせるか！

パロはラクシャーサの腕をつかんだ。

「何しやがるクソガキ！離せ！」

ちょっと振り払えば簡単に振りほどけるとでも思ったのか。食い下がるパロにラクシャーサは焦って暴れまわる。

「無駄じゃよ。お前、契約も交わしてないのに初めて会ったばかりの少年が自分の姿を見ている

ことがおかしいと思わなかったのか？この少年の忍耐はただもんじゃないぞ。いじめられ気を使い自分を納得させていたその忍耐は信心と共に強くなって育っていたようじゃのう」

「ちっくしょ……こんなことがあってたまるか。やっと出られたってのに……くっそがああああああ」

パロが捕まえてる間にガネーシャが封印の壺を開いた。

壺は力強くラクシャーサを吸い込んでいく。

「があああああああああ」

断末魔の叫びを残してラクシャーサは壺の中に消えた。

ジルとマルクにも精気が戻っていく。

「あ、れ……パロ兄ちゃん……」

「マルク！無事でよかった！」

パロはマルクのそばに駆け寄った。

ジルもよた付きながらも上体を起こした。

リビとハイリもそのうち元気になるだろう。

「ガネーシャ様、ありがとうございました。」

「いいやあ。わしからもお礼を言わんとな。お前さんのおかげでやつを思ったより早く封印できたからの。

お前さんの心身共にある忍耐強さ。どんな立場にあっても相手の思いやりを感じ取り、他人をしつかり見れる強さは大きな力になる。自信をもって精進せえよ……」

そういつてふっと煙のようにいなくなった。

マルクが感じた視線はジルとラクシャーサだった。

ジルは自分の呪術の目撃者を見張り、ラクシャーサは若さを狙っていたのだった。

このいきさつを聞いたリビとハイリの親父さんはジルとジルの親父さんに謝り、リビとハイリにはきつい説教と家業の手伝いが課された。

ジルは二人の親父さんが来る前に治療の終わった二人に謝りにいったそうさ。二人も自分たちの非を認めた。

すんなりとはいかないがことは何とか済みそうさ。

休みが終わって次の週の学校。

教室の前にリビ、ハイリ、ジルの3人が立っていた。

「ジルとマルクを助けてくれたんだってな。マルクから話は聞いた。ほんとに癪でしかないが、お前が弱虫じゃないってのはわかった」

ぶっきらぼうにそれだけ言ってリビは席に着いた。ジルとハイリは振り返って軽く会釈をした。

「相変わらず素直じゃないなあ……でもありがとうって言いたかったのかな」

パロはこっそりつぶやくのだった。

「皆さん、席についてください」

教頭先生がやってきて号令をかけた。

そうさ、ラクシャーサがいなくなったから新しい先生が来るんだった。

起立！礼！着席！

いつもの朝の挨拶が終わると、

「今日は新しい担任の先生が来ます。イーシア先生、入ってください」

パロは思わず目をむいた。

そこにいたのは、ちょっとだらしなさそうな、どう見ても見覚えのある獣人だった。

「ええーと、イーシアです。これからよろしくお願いします」

イーシア、もといガネーシャはパロと目が合うとこっそりウインクをした。

(なんかあった時のためにももう少しここにいたいと思ったんじゃ。姿を隠して先生やることにしたんじゃ。よろしくな)

「不意打ちでテレパシーとか辞めてよもう……」

パロは呆れて笑った。

終

あとがき

お目汚し失礼します。

初めてのアンソロジーでファンタジーです。

話の展開がだいぶ急ぎ足になってしまいましたが……設定を等しくしたうえでストーリーを考えたり獣人たちのキャラクターやガネーシャのキャラクターを考えたりするのは新鮮で楽しかったです。ほんとはもっと盛り込みたい話とかあったんだけどなあ泣ミイナちゃんとかオオカミ族とイヌ族の親世代の話とか……あとマルク目線の話とか書いてみたい。

読んでくれてありがとうございました！

大馬鹿者

中村

「ぼけっと、扉の前に突っ立ってンじゃないヨ。木偶の棒ならぬ、ペグの棒ってかい？ 片腹痛いネ。毛むくじらののでかい図体してンだから考えナ」

「ぼけっとしてないっスよ！ もっとお客さんが入りやすいようなレイアウトを考えてたんス。ここからだ、店内を見渡せるっスから」

「だからって、カウンターの扉前に立つンじゃないヨ。工房から客が見えねエだろう。仕事の邪魔だヨ」

「あ、動かすときは、ベル姐さんも手伝ってくださいね。逃げちゃダメっスよ。おいらだけだと細かいことができないっスから」

ベル姐は余計なお世話だと、ペグの腿を思い切り叩くが、分厚い毛皮のせいか叩かれたことにすら気づいていない。その腹いせか、いつもの三割増しの雑言がペグに突き刺さる。さらに、威圧的な低音が効果を二割増しにしている。

それでもめげずにペグは考え込む。視界が歪み頬も濡れているが気のせいだろう。

「そうだ！ 靴を表に出すのはどうっスか？ 周りは野菜やら魔法石やら鍋やらジャラジャラ出してるし、うちも真似しましょうよ！ てか、なんで看板だけなんスか？」

「はぁ、うるさい小僧だネ。アタシのやり方に文句があンなら出ていきナ」

「小僧ってなんスか。小僧って。いいアイデアだと思うんスけど」

「その考えがもうガキ臭いんだヨ。無エ頭絞って考えてみナ」

パン・ガンティ連邦でも三国の境界近くということもあり、周りには宿屋、茶屋、土産物屋が

多く、人間も獣人も溢れかえっている。看板だけの店は埋もれ、一日に三人お客が入れば良い方だった。

「んー、ええ？ そうっスねえ……。あー、壊されても修理しやすいようにとか、住処を変えるときに楽なように、とかっスか？」

「馬鹿につける薬なンざ、持ってないヨ」

「なんスか。真剣に考えたのに失礼っスよ。いい加減、答え教えてくださいよ」

ムキになっているペグを鼻で笑い、ベル姐は煙管を吹かす。うなじを出し、胸まであるであろう長い白髪を二本の簪で留め、前髪を垂らしている。化粧も施してあり、目元と唇に刺した紅が髪と対比され際立っている。紺の作務衣に白を基調とした椿が咲き乱れる羽織を着ている。草履かと思いきや革靴を履き、煙を薫らせるその姿はなぜか様になっている。

カウンターにある灰皿にカンッと雁首を打ち付け灰を落とす。刻み煙草を詰めながら面倒臭さそうに言った。

「直接日光に革靴を当てる間抜けがどこにいるってンだい。変色したり乾いたりしてダメになンだろう」

「え？ でも、かばん屋さんは外に出してるっスよ？ 確か、光除け魔法をかけてもらったとか、影の魔石を置いたとか言ってたっス」

「嫌だネ。面倒だヨ」

「そういうものっスか？」

「そういうもんサ。ほら、話は終わりだヨ。さっさと準備に戻……」

「失礼。店主はいるか？」

「わ！ ええと、いらっひやいまへ！」

「ア？ なんだい、開店前だヨ。後に来ナ」

急に小太りの男が入店した。いや、開店前だから住居不法侵入及び業務妨害をするために来た

のだろうか。

その男はプリーツが多く折り込まれた幅広の赤いコートをからカフの大きな花柄のウエストコートを見せ、ひざ丈のえんじ色のキュロットを履いていた。レースの袖口飾りをつけたシャツが覗き、黄色のジャボやクラヴァットを合わせ、足元は茶色のメダリオンシューズで決めていた。金糸や銀糸、多色の絹糸で細やかな刺繍が施されている。いかにも上流階級です、という風貌だ。

カウンターにいるベル姐を見ると、相好を崩し、鷹揚な態度で言い放った。ペグは毛むくじらのインテリアとして背景と同化して見えるのか、無視された。

「俺様の革靴を修理したアレクサンドル・ベルルッティはお前か？ その節大儀であった。その腕を見込んで俺様の専属にする旨を綴った証書を送っただろう？ なぜ来ない？」

「無視してるってのが分かんないかい？」

男はベル姐の質問を無視して店内を見渡す。壁に沿った腰高の陳列棚に所狭しと黒、茶、黄土色の人間向け革靴が並べられている。奥の工房にも修繕中の靴や器具が並べられて、店中に革の匂いが広がっている。開店前で床に少し埃があるとはいえ、目も当てられない状態ではない。レンガ造りの建物に合った古き良き商店といった雰囲気だ。しかし、男は首を横に振りため息を吐く。

「そうか、金か……。可哀そうに。こんな狭くて暗いところに住んで……。代々マクシミリアン王家に仕え、由緒ある我がアブスブルゴ家専属の職人になれるビックチャンスでも、王国までの旅費が無いのだな、そうだろうか？」

「話を聞きナ、ウスラトンカチ。興味がないのサ。他を当たりナ」

「契約金が足りないのか？ いくらだ？ 少しぐらいなら考えてやっても良いぞ」

「金の亡者がピーピー言ってンじゃないヨ。職人に敬意も払え無エ青二才に割く時間も気力も敬意も、あいにく持ち合わせてないんでネ」

「本当に来ないのか？」

「くどい。さっさとケツまくって帰りナ」



話は終わりだと言わんばかりにベル姐は男に背を向ける。男は天を仰ぎ、信じられないと呟いた。と、男とペグの目が合う。瞬間、男は悲鳴を上げた。

「何故ここに獣畜生がいる！ 汚らわしい！」

「ア？」

聞き捨てならない台詞にベル姐が振り返る。ペグも目があっただけで悲鳴を上げられた経験がなく、硬直している。そんな二人を気にせず、男はヒステリックに叫び続ける。

「栄誉ある俺様の専属にするために、わざわざこんな、腐って、萎びた、膿みたいな、掃溜めまで来てやったってのに！ なんだ、お茶の一つも出さないで、帰れだと？ 拳句の果てに、獣畜生を囲ってるのか？」

「アア？ 喧嘩なら買ってやるヨ。俺の店の悪口たぁいい度胸してンじゃねえか。ペグ、いつまで惚けてンだ？ 手伝いな」

「すみません、合点承知っス！」

「おとといきやがれ、この、豚野郎」

ドスの利いた声で吐き捨てる。ベル姐はペグの肩に乗ったまま中指を立てて男を見送る。逃げ足だけは速いようだ。覚えているよ、という三下の捨て台詞が聞こえてくるが二度と会うことは無いだろう。

「おい、ペグ！ 塩持ってきな！ 塩！ この辺撒いて清めときな！ ったく、俺の店荒らしやがって」

「了解したっス」

ペグはベル姐を乗せたまま工房から塩を持ってきて出入り口付近に撒き始めた。チラチラと物

言いたげにベル姐を見ながら、塩を撒き終える。その間数分。視線に耐えかねたのか、ベル姐が億劫そうに口を開く。

「なんだイ？ 言いたいことがあるなら、はっきり言いナ」

「いや、あの、ベル姐さんって本当に男だったんスね」

「今更、何寝惚けた事言ってンだい？」

「いや、あはは……」

小馬鹿にしてペグを見上げるベル姐だったが、それ以上追撃せず、店内を見渡した。

散乱した黒、茶、黄土色の靴でできた何か。破れたり焦げたりして、靴としての原型をとどめていない。商品棚もカウンターも倒れ、足が曲がっているものもある。辺りには、刻み煙草と革の焦げた匂いが漂っている。

それらすべてを視界に収め、片付けるのための労力と被害総額を考えて苦々しそうに口を開いた。

「アー、さっきの話の続きだが、文字も読めねえ様な、オツムと育ちの悪い、学の無え奴はこっちから願い下げだって話だヨ」

「え？」

「これで分かっただろう？ 人の話を聞きやしねえ、職人や商品価値も考えねえ奴に限って、イチャモンつけて人の足元見やがるもんサ。こっちにも客を選ぶ権利ってモンがあらあネ」

「そうっスね……」

「アンタも将来、店構えンなら肝に銘じときナ。……さて、さっさと片づけて店開けるヨ」

「あっ！ すみません。すみません。こんな話、つまらないですよ。気持ち悪いですよ。本当にごめんなさい。ああ、どうしよう。代金三倍にして払います。迷惑料です。すみません」

端的に言おう。休憩からペグが帰ってくると、店に二人の女？がいた。一人は腕を組み方眉を上げ煙管を吹かせている。そしてもう一人は、侍女のような恰好をしていて、腰を直角に折り曲げ、眉をへの字にして平謝りしている。そろそろ止めないと土下座までしそうだ。

何が、どうして、こうなった……。

ペグは工房からその光景を見て、ベル姐さんはそっちの筋の人間だったのか、と考えた。四つ足から力が抜け、郵便物をバサバサと落とし、へなへなと座り込む。

その音で呆然としているペグに気づいたベル姐が振り返り手招きをした。

いつか人間から聞いた拷問の数々がペグの頭に浮かんでは消える。郵便物を拾い集めることで時間を稼ぐ。が、数枚しかない郵便物はすぐにまとまってしまう。立ち上がり、処刑台へ進むような絶望をしつつ覚束ない足取りで、一步一步、ベル姐へと近づく。

「ありがとネ。……ア？ 何、蒼い顔してンだい？」

「せめてひと思いでお願いするっス」

「散々オツムが悪ィって言ってたが、耳まで腐っちまったかい？ 顔洗ってきな」

「水責めっスカ？」

「話にならないネ。しばらく表に出てナ」

ペグはしばらく言われた意味が理解できなかった。が、数分かけて咀嚼し、油をさしていないブリキのように動き出す。そしてカウンターから出ようとベル姐から視線を外す。と、今までのやり取りを見ていた女と目が合う。

数十秒間、互いに相手の素性をまったく知らない女と獣人が見つめ合う。その傍らで当事者であるはずの女？ が手紙を読む。頁を捲る音がむなしく響く。何この状況。

相手がお客さんだと思い出し、我に返ったペグは慌てて振り返った。そして、手紙を夢中で読むベル姐に詰め寄る。

「お客さんをほったらかしたらだめっスよ！ ほら、手紙は後で読みましょう。仕事しましょう、仕事！」

「ン？ ああ、落ち着いたんだネ。駄弁ってたら、いきなり謝り倒すモンだから、面食らったヨ。すまないネ」

「え？ いや、はい、大丈夫です。はい、気にしないでください」

「ベル姐さん、おいらにも説明してください。びっくりしたんスから」

「ア？ さっき言ったダロ？ 世間話に花を咲かせてたら、その花びらが散る勢いで謝りだしたんだヨ」

「嘘つかないでください。だったら、あんなに謝るわけないっス。どんな暴言、吐いたんっスか？」

「生意気な口利くようになったネ。それこそ、アタシが知りたいヨ」

ベル姐とペグは女を見る。二方向からの視線を受け、居心地悪そうにもじもじとする。遊ばせている手に視線を落とし、女は重々しく口を開いた。

「その、今まで趣味の話をしたら、絶対に気持ち悪いものを見る目をされて疎まれていましたので……。最近だと、陰口や差別もされていますし、気分を悪くなられたと思いましたので……」

説明しながら段々女は弱っていった。苦し気に眉を寄せ、悲しさから潤ませた目を揺らし、か細い震えた声で溢していった。耐えるように固く両手を握りしめている。よく見ると袖口から見える肌には点々と痣がある。厚化粧や露出の少ない服は、これらの痕跡を隠すためだろう。

外の爽やかな天気とは裏腹に店内に暗く重たい空気が流れる。

その空気を感じた女は慌てて笑顔を繕った。残念ながら、眉は寄せられたままだし口は引き結ばれていて、涙を堪えている子供の用にしか見えないが。

「あの、すみません。こんな暗い話して……。帰りますね。これ代金です」

「あ、はいっす。ありがとう、ございます……」

とっさにペグは手を出し、代金を受け取る。

身支度を始める女を止めることもできず、ペグは困りきる。どうにか励ましたい、と頭をフル回転させる。が、これだ！ という良い言葉が思いつかない。頼みの綱としてベル姐をちらり、と盗み見るが、何を考えているのか分からない。いつもの涼しい顔のまま、煙管を吹かしている。大事な時に役立たないんすから！ と自分のことを棚に上げてペグはしかめっ面をする。

そうこうしているうちに女は身支度を終える。体を引きずる様にして歩き、ペコリと一礼して、ドアノブに手を掛ける。

行ってしまう、行かせちゃダメだ、という想いだけでペグはドアを押さえる。壁ドンならぬ、ドアドンをした。

いきなり現れた大きな手に驚いて、女はペグを見上げる。

その様子を見守っていたベル姐は面白いことになりそうだと、ヒュウと笛を吹いた。

数十秒間、互いに相手の素性をほぼ知らない女と獣人が見つめ合う。傍らでは女？ が灰を落とそうと灰皿を探している。カンっという音が場違いに響いた。

「そんなことないっす。気持ち悪くないっす。むしろ、綺麗っす。好きなもの好きって言って、何で謝らないといけないんすか。何で傷つけられないといけないんすか。何でっすか。その人達はお客さんに嫉妬してただけっす。そうに決まってるっす」

「そうさネ。コイツの言う通りサ。好きなモンの話で盛り上がるのは普通だろ？ 遠慮なんかするモンじゃねえサ。アタシはアンタの話を面白いと思ったサ。それとも、アレかい？ 人間は人間以外に恋しちゃいけネエってのかい？ そんならとっくの昔にアタシはお陀仏してるネ。」

一人は必死に、一人は不敵に言った。二人から肯定を贈られた女は目を見開き体に力を入れ、肩を震わせた。ペグは慌てて女を包むように持ち、助けを求めてベル姐を見る。オロオロしているその様子を見てベル姐は大笑いをした。つられて訳も分からないが、ペグも笑い出す。続いて女も。

笑い声が店内を満たした。

しばらくして涙も笑い収まり、全員、居住まいを正す。ひとしきり泣き笑ったおかげで全員晴れやかな表情をしている。

「また辛くなったら来てください。今度は、おいらにも話を聞かせてほしいっス」

「アタシも話の続きが気になるネ。眠れなくなっちゃうから早いトコ来とくれヨ」

「はい！ 是非！ 次はお二人も聞かせてください！」

また会う約束をして、女は店を後にした。爽やかな天気に向、笑顔を浮かべ明るい雰囲気である。

「元気になって良かったスね。それにしても、ベル姐さんて本っ当に靴が好きなんスね」

ベル姐は片眉を吊り上げ、ペグを見上げた。そして、煙をくゆらし悠然と謳った。

「あの子にとって電車が<sup>最愛</sup>sweetheartなら、アタシにとっちゃこの店が<sup>唯一無二</sup>amoreサ」

ベル姐が納品から帰ると、店内は戦場と化していた。

空間という空間にモフモフとした何かが詰まっている。見覚えがあるのは、ペグとよく似た形だからだろうか。だとしたら、果たして、店内に何人いるのだろうか。ペグは寒さに強いため、ベル姐が出かける際はいつも暖炉の火を消していた。そのため、店内は寒いはずだったがむしろ暑い。毛皮万歳。幸いなことに商品は無事の様だ。店を開けた時と変わらず、ミッチリと陳列されている。

店内は物理的に獣人と靴で埋まり、隙間を撫でるように革と獣の混ざった匂いが漂っている。

頭上の遙か上で飛び交う讒謔、怒号、諫言、叫喚などを半分聞き流しつつ、ベル姐はカウンターに腰掛ける。いつ自分に気づくだろうか、と考えながら取り出した煙管に刻み煙草を入れて火をつける。と、煙で第三者に気づいたのか、三対の眼が一斉にベル姐に向く。

敵意、不快、希求という三種で見つめられ、流石のベル姐も目を軽く開き硬直した。

「お前がペグルヴァーレを誑かした人間か！」

「それに、なんて下品な恰好なの！」

「はあ？ 何失礼な事、言うんすか！ ベル姐さん、言ってやってください！」

三人から矢継ぎ早に叫ばれ、ベル姐は何が何だか分からなくなる。興奮しているせいか、声量が大きく卒倒しそうになった。が、余所行きの服を汚したくない想いと男として情けない姿を見せたくない意地から踏みとどまった。

ちなみに、余所行きの恰好とは、梅やシクラメン、菜の花といった花がほころんでいる着物である。紺無地の帯を角だし結びで締めている。化粧もばっちり決め、どこからどう見ても、お姐さんである。

そんなばっちりとしたお姐さんは、痛む頭を押さえつつ煙を吐き出す。

「ペグ、アタシがいない間に何があったンだい？」

「見ての通りっす。二人はおいらの親なんすけど、ベル姐さんが出かけてしばらくしたら、いきなり押し掛けてきたんす」

「そいつあ、タイミングの良いこって……」

届け先が上流貴族だから、とペグ一人に留守番を任せて店を開けたままにしたことをベル姐は後悔した。状況把握のためにペグに声をかけたが、答えを聞いてあのとき卒倒するべきだったと悔やんだ。親子喧嘩は家でやってくれ。

ベル姐は鬱々としつつ、勝手口から表に出る。閉店の札を出し店内の棚を動かしてスペースを作る。逃げるのではないかと見張っていた三対の視線を後目にカウンターに戻って、腰掛ける。

「立ち話で悪ィが、少しはマシになったダロ？ で、何だってあんなに揉めてたンだい？ 近所迷惑だヨ」

「確かに興奮して大声を上げてしまいました。申し訳ない。しかし、こちらも緊急でして、大目に見てもらいたいものです。あ、申し遅れました、<sup>わたくし</sup>私 はスコッチです。こちらは妻のポリーニ」

ペグとよく似た、というか三人とも大きさと声の高さでしか見分けがつかない程そっくりである。待ってました、と言わんばかりにスコッチは話し始めた。ベル姐はペグに質問したのだが、それを奪ってまでも自分の良いように話を進めたいのだろう。

「さて、単刀直入に申し上げますと、息子のペグルヴァーレを返してもらいます。一度は快諾しましたが、その時に碌に話を聞かなかったことを後悔していますよ。いや、まさか、ねえ、こんなガラクタ作っているなんて、夢にも思わないじゃないですか。それなら、兵士の方が数十倍マシというものです。ね？ 貴方なら分かるでしょう。言ってやってくださいよ。……まったく人間臭くなって……。頑固なところは誰に似たんでしょうね？」

高らかとスコッチは説明した。というより、自分の主張を冗長に言った。全面的に賛成する、と言わんばかりにポリーニは強く何度も頷いている。質問の答えになっていないが、なんとなく喧嘩の理由は把握できただろう。

ペグはその両親の態度を見て苦虫を噛み潰したような顔をして、ベル姐を見る。ベル姐は怖いぐらいの無反応であった。表情の消えたベル姐に対し、ペグは生まれて初めて、この小さくか弱い生き物に対して、本能的な恐怖を覚えた。

獣人夫婦は気づいていない。

靴職人に面と向かって、靴がガラクタだと尊大に言い放った失態を。それに対して同意を求め、否定など微塵も想定していない自惚れを。あまつさえ、摘まみ上げた靴に唾を吐いた蛮行を。

その場にいた全員が、糸の切れるような音を聞いた。



その場にいた獣人達が、毛を逆立てて空気の冷えを体感した。

その場にいた獣人夫婦が、やっと自分たちの愚劣に気づいた。

その場にいた唯一の人間が、煮えたぎる怒りをもってして、口を開き言葉を紡ぐ。

「確かに、アンタらの言うことは正しいサ。この辺で靴を必要とするのは国を超えたい旅人だけサ。それか、自分を良く見せたい上流階級の阿呆どもか。ともかく、アンタらみたいな獣人じゃ必要ない。服も靴も武器も火も、皆いーんなアタシら人間が必要なだけサ。料理も芸術もアタシら人間が持ち込んだモンだヨ。アンタらは不思議だろう。必要ないものに執着するのかってネ。単純な話サ。俺は靴が好きだ。この店を愛している。必要性や損得云々は知らないネエ。俺ら職人はたった一人、たった一個のためにすべてをかける大馬鹿ものサ。時間も金も労力も全部費やして命を懸けてものを作るのサ。けど、そういう大馬鹿者が集まって国ができんのサ。文化が発展するのサ。人間様を舐めるなヨ。そうやって繋いできたモンにアンタらは苦しめられて助けられて来たんだヨ。止められやしねえのサ。惚れた腫れたに茶々入れると痛い目みるヨ」

あまりの剣幕に獣人夫婦は圧倒された。ベル姐は言いたいだけ言って満足したのか、少しお高い煙草に手を伸ばす。

しばらく沈黙が落ちる。ベル姐の吹かす煙草だけが空気を動かす。と、ベル姐が二本目に手を伸ばした時、ペグが唐突に宣言した。

「師匠の言う通りっス。おいらは、靴に惚れたんス。師匠の技に憧れたんス。できるできないとか、必要かどうかとか関係なく、初めてやりたいって思ったんス」

そこまで言って、ペグは笑顔を作りスコッチとボリーニを見た。愛情、驚愕、心配の混じった両親の顔を視界に収める。

「だから、おいらは、靴職人になります。憎んでも嫌っても良いっスから、どうか、そっとしておいてください」

ペグは言いながら視界が歪む。窓から射す光を受けて、一等輝いていた。しかし、最後まで笑顔は崩さなかった。今まで支えてくれた両親を心配させないように、自分の決意が揺らがないように、懸命に堪えていた。

スコッチとボリーニは言葉を失い、そのまま息子に背を向け、店を後にする。二人とも応援したい気持ちはあるが、認めたくない気持ちがどうしても勝っている。何度、何故靴が、何故息

子が、と考えただろうか。しかし、本気の息子を止めることはできない、したくない。

スコッチはモヤモヤと抱えきれない気持ちを足元の岩にぶつけた。

「これで良かったんす。認めてくれなくても、おいらは師匠がいるっすから。これでおいらも正式に馬鹿の仲間入りっす」

分かっていたが、心のどこかで応援してくれるのではないかと信じていたペグは自分に言い聞かせるようにポツリと呟いた。

想像よりもショックであったのだろう、耳と尻尾が垂れ、小さく縮んでいるように見える。

ベル姐は思い出したかの様に、刻み煙草を入れて火をつける。そして、いつもの味が一番だと、美味しそうに吹かす。しばらく堪能した後、いたずらっ子のような笑顔をしてペグの腿をスパンッと叩く。

「何、しょげてんのサ。アンタみたいな馬鹿の親ダロ？ なら、心配ないサ。そんな馬鹿を育てた親は、絶対子どもの味方で、応援するって決まってんのサ。今は混乱してるだけで、そのうちひょっこり顔出しに来るサ」

「そういうものっすか？」

「そういうもんサ」

煙をくゆらし、自信満々にベル姐は言った。経験があるのだろうか、説得力がとてもある。

ベル姐はペグに背を向け工房に入る。その様子を気の抜けた顔でペグは見る。ベル姐は振り返り、ニヤッと口角を上げる。

「ぼけっと、扉の前に突っ立ってんじゃないヨ。やっぱりペグの棒なのかい？」

「な、なんスか？」

「修行すんだヨ。修行。次にアンタの親が来るまでにある程度は形になるモン作れるようにならないといけないダロ？ 男を見せナ」

「はい！ 望むところっス！」

ペグは工房へと足を向ける。

閉じ忘れた扉から、梅の花弁がハラハラと店内に入ってくる。もうすぐ春になるのだろう。

「そういや、ベル姐さんって番でも探してるんスか？」

「何、馬鹿なこと言ってンだい？」

「だって、いつも派手な恰好してるじゃないっスか。似合ってるから良いと思いますけど。年取ってるし、ガリガリだから、アピールに必死なんだと思ってたっス」

「んなわけないダロ。この格好は好きでしてンのサ。女物の方が柄も色も派手で綺麗ダロ？ 男物はダメだネ。渋い色ばっかでシンプル過ぎて……。気分が下がっちゃう。」

「そういうものっスか？」

「そういうもんサ」

---

あとがき

壮年のイケオネエとモフモフが書きたかっただけです。満足しました。楽しかったです。

靴を見るのは好きなのですが、革とゴムの匂いが苦手です。頭が痛くなったり気持ち悪くなったりします。靴屋さんに十分以上、滞在できないので残念です。何か良い解決策があったら教えてください。

# 一般作品集

## お前はその目に何を映す

---

お前はその目に何を映す

笠原ざわ

雀のさえずりで意識が浮上する。ぬくい布団に包まれたまま何度か寝返りをうつ。そのまま二度寝しようとするが、時が経つにつれて雀の鳴き声は激しさを増していく。あまりのうるささに観念して俺はのそのそと起き上がった。

とは言っても完全に目覚めたわけではない。正直あと五分は動きたくない。身を起こした姿勢で静止していると遠くからこちらへ向かって来る足音が聞こえてきた。

もう十数秒もしないうちに障子戸は開け放たれるだろう。足音が近付くにつれて頭を占める眠気は徐々に薄れていく。部屋の真ん前で足音が消えるタイミングを見計らって、先手を打つ形で俺は口を開く。

「おはよう仁」

一枚の紙を隔てて声をかければ足音の主は小さく驚きの声を漏らす。戸惑うような息遣いの後、彼は比較的静かに障子を開けた。

「おはようさん、和人」

先ほどの動揺など無かったかのように落ち着いた調子で彼は返す。頭上から降ってくる低音はまだ脳の片隅に残っていた眠気を完全に吹き飛ばす。

「今日は起きてたんだな」

「たまにはね」

今日は、の部分強調された言葉を軽く流して、俺は布団を仕舞うためにようやく立ち上がった

。

仁は俺と同じ年のはとこだ。家同士は遠かったが小学校からずっと同じ学校に通っていたためよく一緒に遊んでいた。とは言え血の繋がりを知らされたのは高校二年になってからで。正直はとこよりは幼馴染みと形容した方がお互いしっくり来るのが事実だ。

そんな彼は、こっちの方が進学した大学に近いからという理由で去年の春先から俺の家に下宿している。親戚だし俺とも仲がいいし、と両親は仁の下宿を二つ返事です承したらしい。そして彼は快く了承してくれた恩にと積極的に家事や雑用を手伝っている、らしい。曖昧な言い方になってしまうのは、俺が自身の目でそれを見たわけじゃないから。だがまあ、手伝い云々に関しては、俺が知っている彼ならきっとそう言うだろうとはある程度想像できた。

生活リズムが崩れがちな俺のことが気になるのか、仁は毎朝決まった時間に部屋まで起こしに来る。今日だって日曜だというのにわざわざ声をかけに来た。本当に真面目だよなあ、と布団をたたみつつ大きなあくびをしている間に彼はタンスから俺の服を出してくれていたようだ。

「服枕元に置いといたから。着替え済んだら声かけてくれ」

そう言って部屋を出ていった足音は障子のすぐ向こうで止まる。親しき仲にも礼儀あり、と常々言っている彼のことだ。他人が着替えている最中に居座るのは良しとしないのだろう。

男同士だし別に気にしないけどな。ついでに手伝ってくれれば俺としては楽なんだけど、なんてものぐさな考えは胸にとどめ、手に取った和服をばさりと広げた。

袖に腕を通し、慣れた手つきで着流しを身にまとっていく。紐や首元に緩みが無いか念入りに確認してから最後に羽織を着る。障子を開け、いつもと同様に右側にいるだろう仁へずいっと手を差し出せば彼は慣れた様子で俺の手首を掴みそのまま居間へと歩き出した。

仁と共に進むうちにふわりと味噌の香りが漂ってくる。それに紛れて潮の香りと大豆の微かな青臭さも鼻に届く。

「今朝の味噌汁はわかめと豆腐かな」

「当たりだ。毎度毎度よく分かるな」

「俺は鼻もいいんだよ。舐めてもらっちゃ困るね」

ふふんと機嫌よく返せば、はいはい流石流石と雑にあしらわれる。いつものことだし別に気にしない。何より当たったことが嬉しい。

軽い足取りで居間に着き、先に座っていた両親との雑談を挟みつつ朝食を済ませる。後片付けのために台所へ向かう仁とは居間で別れ、俺は縁側を一人障子伝いに進む。

一歩踏み出すたびに板のひやりとした感触が足の裏に伝わってくるのを感じながら、なんとなく庭に顔を向けてみた。花の香りは今は無い。とうとう紫陽花の季節は終わったらしい。雨上がりのたびに風に乗って来る青葉の香りが好きだったんだけど、と惜しく思う反面、朝顔の季節が待ち遠しいとすでに心が弾んでいるあたり単純な生き物だと自分でも思う。

弾む心につられて転ばないように足元に注意しながら歩く。不意にちりりと、どこかから涼やかな音が聞こえてきた。そういや今朝縁側に風鈴がかけられたと仁が言っていた気がする。

俺にとって風鈴の音は夏の音。梅雨が明けると家のあちこちで風鈴の音色が響いて、ひんやりと澄んだ余韻が耳に残る。

だがまだ本格的な夏ではないからか、今耳に届く音は一つしかない。その音に誘われる形で進んでいくと頬にひらりと何かが当たる感触がした。肌触りのいい布に似た、だが確かな潤いを含む感触だ。

風の中に何か泳ぐ存在がある。何度目かの接触でようやく俺はその事実気付いた。

そっと手を伸ばすと、いとも容易く触れることが出来た。両の手のひらを籠に見立てて包み込む。案外簡単に捕らえることが出来たそれは狭い空間の中をゆったりとたゆたう。指の腹で優しく触れてみると、苺のような円錐形にひらひらと薄い膜が四、五枚ほどくっ付いているのが分かる。この独特の造形は金魚とそっくりだ。面白がってしばらく触れているとそれはするりと手の内から逃げ出した。

あらら、残念。

独り言を呟いてまた縁側に行く。だが数歩も経たぬうちに再び足を止めることになった。



「やあやあ、これは和人様ではございませんか。ご機嫌麗しゅう」

変声前の少年のような甲高い声だ。だがその声質にはあまり似つかわしくない丁寧な口調で、軒下の辺りから声かけられる。廊下と地面との間にそれなりの高低差があるからか、その声は俺の膝くらいの高さから聞こえて来た。

「おや、久しぶりだね」

あまり顔と顔が離れていると話しにくい。その場でしゃがみこんでから返すと、相手は俺の手のひらに自分の手を乗せてからまた話し始めた。

「ええ、ええ。お久しぶりにございます。季節の変わり目でしたが、よもや体調を崩すなど無かったですよね？」

「俺は元気だよ」

「それはそれは。喜ばしい限りでございます」

嬉しそうな声が出たかと思えば、子供のように小さな手が俺の指先をぎゅっと握る。伝わってくる少し高めの体温につられて頬が緩んだ。

俺たちは昔からこうやってお互いの手に触れながら世間話をする仲だ。それこそ俺がまだ小学生の頃から、週に一回ほどの頻度で。だがここ一月ほどは何の音沙汰もなくて少し心配していたのだ。

しばらく会ってなかったのもあってお互い話題が尽きることは無い。連綿と続く言葉のやり取りがちょうど途切れた所で相手は唐突に声の調子を落とした。

「我らを認知できる者も最近はめっきり見なくなりましたな。嘆かわしいことです」

「仕方ないよ。今の社会は効率化とデジタル化が進んでいる。お前達のようにその枠から弾かれたものには厳しい世界になりつつあるんだろうね」

俺の言葉を聞いた上で相手はは一あ、と深いため息をもらす。ため息をつくことで、不満をぶつぶつとこぼしたい気持ちを押し込めているといった感じだ。

「和人様のように寛容な方が多ければ、きっと過ごしやすいのでしょうに」

「俺がいっぱいいるのも面倒だと思うけど。ほら、俺は変わり者だから」

苦笑混じりに返すと相手は少しだけ語気を強める。

「変わり者の一言で諦めてしまうのは勿体ないですぞ。和人様は人には様々な思考があるとも知っておられる。そんな寛大なるお方が、何故自分の事をぞんざいに扱うのでしょうか」

上手く返す言葉が見つからず、俺は困ったように笑うことで場を濁そうとする。だがそれくらいお見通しだと言わんばかりに正面からは再びため息がこぼれた。

「和人様、あなた様は異なる考えを頭ごなしに否定などしないお方。ご自分とは異なるものに対して、例え納得はせずとも決して拒絶はしないお方。優しきあなた様にとってこの世が優しい世界であるよう、我らも微力ながらお祈りしておりますよ」

そう言い残すと、手に乗っていた重みはふっと消えた。それと同時に身軽な足音が俺の前から遠ざかる。どうやらもう時間切れらしい。きっと相手にも予定があるのだろう。

もう少し喋りたかったんだけどなあ。

少し寂しく感じながらも立ち上がり、俺はまたふらふらと歩き出した。

寄り道しつつ部屋に辿り着き、お気に入りの座布団に座ったはいいけれど何か落ち着かない。たまには片付けでもしようかと立ち上がりかけたところで、にゃあ、と部屋の外から誘う声が聞こえた。

音の出所を探ろうと色々な方向を向いているうちに廊下から再び鳴き声が聞こえてくる。そっちだったか、と声に誘導されるがままに俺は開けっ放しの障子から廊下へ身を乗り出す。声のした方へ手を伸ばせば猫は黙って擦り寄ってきた。

毛皮越しに伝わってくるぬくもりに自然と頬が緩む。今、俺の気持ちは部屋の片付けなんかより猫と戯れる方に限りなく傾いている。片付けはまた今度だな。

お前と遊ぶから仕方ないよなー、と猫に声をかけながら抱き上げて縁側に腰を下ろす。爪先が地面につかない程度に足を揺らしながら猫を撫でる。心地がいいのか、猫は暴れることなく二本の

尻尾を器用に俺の腕へ絡ませてきた。猫独特の匂いに包まれていると、不意に土と水の匂いが風に乗ってきた。

「雨が、近いな」

鼻をすんと鳴らして一人呟く。

未だ膝の上でのどを鳴らしている猫に、早く帰らないとご自慢の毛並みが台無しだぞ？ と語りかけてみる。俺の言葉が分かったかのようなタイミングで猫はにゃあと一鳴きした。

その直後、廊下の先から足音が近付いてきた。歩調からして仁だろう。膝の上にいる猫から手を離し、彼が来るであろう方向に顔を向ける。

「もうすぐ雨が降るよ、仁」

あいさつも無く俺はそう投げかける。へー、と言いながら仁は特に動じる事なく俺の隣に座った。

「雨の匂いでもしたのか？」

「ああ、そうだよ」

マジかあ。思わずといった具合で彼の口から情けない声が漏れる。

「なら降るんだろうな。洗濯物干したばかりなんだが」

「タイミングが悪かったね。どんまい」

軽く返して俺は再び猫を撫で始める。仁はようやく俺の手元を見たのだろう、息を呑む音が真横からした。

「お前、それは」

「ん？ ああ、猫だよ猫。かわいい子だろう？ 尻尾が二本あるけど、このかわいさを前にしたらそれくらい些事に思えるよね」

意図せず同意を求めるような言い方になってしまったが、彼からの答えはない。少しの間を置い

て仁は微妙にずれた問いを口にした。

「なあ、お前には何が見えてるんだ？」

そう問いかけてくる彼の表情は分からない。だからこそ僕は目を閉じたまま微笑む。  
「何言ってるんだい。俺の目がもう見えない事くらい、とっくにお前は知っているだろう？」

## 結った髪を切る

---

結った髪を切る

香月日向

「まあまあよくいらっしゃった！ ささ、こちらへ」

ユワンの旦那は黒い服の男を応接間に導いた。旦那が合図した下女が、白磁のティーポットとカップを持って男のもとに行く。

「おお、なんと良い香りだろう！」

黒服の男は下女が入れた紅茶から出る湯気を吸いこんで、満足げに口角を挙げる。

「本場イギリスから仕入れましたアールグレイでございます。ささ、冷めないうちに」

旦那は黒服の男に紅茶を振舞いながら、自慢話をする。今年は長男が受験する。この調子なら一次試験は余裕だ。そんな話をしている間に、下女はすすっと足音をたてない上品な動作で部屋を出る。なるべく音を出さないように、静かに、しっかりと応接間の扉が閉じられる。

「で、今回も『お品物』を受け取りに来たのですが……」

紅茶をすすめるのを止め、男が旦那に顔を近づける。

「ええ、ご用意できていますとも」

「その品物ってのは、コイツのことか？」

聞いたことのない男の声が、応接間に響く。

「誰だ！」

「俺だよ」

下女が閉めた時とは正反対に、非常に乱暴な動きで応接間の扉が蹴り開けられる。

「何者だ貴様！」

「知るかバカ！ んなもんちょっと考えりゃわかるだろ」

辮髪を長く垂らした男はずかずかと粗暴な足音をたてながら応接間に入る。肩には大きな木箱が乗っている。

「この香り、こいつはアールグレイか？ 俺も好きだぜ、アールグレイ」

男は旦那の前に木箱を投げ出す。木箱が軽く撥ねてから動きを止めると、今度は木箱を上から踏みつける。踏まれた衝撃で木箱は半壊し、中から白い粉がはみ出してきた。

「くっせえ……アールグレイの香りが台無しだな。なあユワンの旦那あ、これ、アヘンだよな？」

男はヘビのような鋭い視線で旦那を射抜いた。旦那は膝をがくがく震わせた。

「ええい！ お前たち！ この男を殺してしまえ！」

旦那は震える声で必死に叫んだ。すると、柱の影、掛け軸の裏、部屋のあちこちから身長二メートルはあろう大男が四、五人出てきた。それぞれ得物を持った男たちは、アヘンを持ってきた男を囲む。

「殺せー！」

旦那が叫ぶと同時に大男たちはいっせいに男に飛び掛かった。あっという間に、男の姿は隠れてしまった。

「どうだ！ ひとたまりもないだろう！」

旦那は大笑いした。

しかし、大男たちの様子がおかしかった。イギリスにあるという古代の神殿の石柱の如く、円形に立ち並んだままピクリとも動かない。

「な、何をしている！ 用心棒ども！」

旦那が声をかけると同時に、大男たちのこめかみから血が噴き出した。見ると、そこには人の

指くらいの穴が開いている。

「確かに、ひとたまりもなかったな。五人まとめてサクッと殺れたぜ」

「ああ痛い！　お願い許してえ！」

背後から黒服の男の悲鳴が聞こえる。旦那が振り向くと、応接用のソファの上に黒服の男が組み伏せられていた。

男は後ろに回して固めた黒服の男の腕をさらに強くひねる。

「ああ、腕の骨が折れた！」

「人間には二百六個も骨があるんだぜ、一個くらいなんだよ」

見たこともない角度に曲がった腕は、男が手を離れた途端だらりと垂れさがった。

「さてと、あとは旦那だけですぜ？　とりあえずアヘンの密取引の現行犯ってことでいいよな？」

「き……貴様、まさか『青<sup>あお</sup>蜥<sup>と</sup>蜴』の……」

びちゃびちゃと応接間の床に液体が撥ねる。旦那が恐怖のあまり失禁したようだ。

「やっと気づいたのか？　科挙受験もしたようなお方が、年取って頭の回転が鈍ったか？」

直前までソファのところにいたはずの男の声が耳元で聞こえ、旦那は石化したかのように動かなくなる。

「そう、俺は『青蜥蜴』の戦士、フェイロンだ」

「いやいやいや、今回もご苦労だった！」

狭い執務室の中で、うるさすぎる声でフェイロンをたたえるのは、魯珍市の市長のチェンだ。

今回のように影の実力として「青蜥蜴」を使って、（邪魔な）官僚の不正を暴いている。

「報酬なんだが、この前より少なめでいいか？ なんせこのご時世だ。勘弁してくれ」

いつもより幾分か軽い銀の入った袋を受け取る時、フェイロンはチェンの姿が変化していることに気づいた。

「あんた肉まんにでもなりたいのか？」

「なんでそう思うんだ？」

「辮髪が無い。革命党にでも入ったのか？」

朝廷の命令で強制されている辮髪を切る奴は、朝廷に歯向かいたい革命党員か、つまらない盗みを犯して断髪の刑に処されたコソ泥くらいなものである。

「革命党員の人肉で作った肉まんの話か、あれ肺病に効くんだってな」

「あんたの肉で作った肉まんなんか食ったら、逆に病気になりそうだがな」

冗談を言って、フェイロンは笑う。じゃらじゃらと銀入り袋を遊ぶフェイロンをチェンが睨む。

「革命党になんか入らなくたって、そのうちこの国は滅ぶ。そうなった時に辮髪頭じゃ、恰好が付かないだろう」

この国が弱っているのは誰にでもわかる。イギリスをはじめとした外国がどんどん入ってきて、いろんなものを奪っていく。そんな外国にへこへこ頭を垂れても、どっかでプライドを捨てられない無様な朝廷。そんな朝廷を見限った各地の官僚が、独自に西洋的な軍を持ち始めているという話も聞く。

時代は変わりつつある。身の振り方を考えなくては。フェイロンは銀貨の枚数分よりも若干軽い銀入り袋を懐にしまった。

「よろしいでしょうか」

ノックする音に続いて、若い男の声がした。フェイロンはドアの方を向く。チェンが入れと言うと、静かにドアが開いた。



「ちょうどいい所に来たから紹介しよう。『遠田軍』の特別顧問として来てくれたお方だ」

「ベン＝スプリングフィールドです。フェイロンさん、お会いできて幸栄です」

スプリングフィールドと名乗ったのは、栗色の髪をした青年だった。長めの髪とあどけない顔立ち、そして低い背丈は少女と見間違えるほどだ。その少女にも見える青年の、濃紺の軍服の肩には、金属と木材の異形の複合体がかかっている。

「私が今組織している『遠田軍』について、君にも知ってもらおう」

「えんでんぐん？ なんだそりゃ？」

まあ、イギリスから顧問を呼んでるような様子だと、碌なものじゃないのだけはわかる。最近流行りの「洋務運動」ってやつか。

「イギリス陸軍のライフル『マガジンリー・エンフィールド』で武装した近代的な軍隊だ」

「こちらがそのリー・エンフィールドです」

スプリングフィールドがフェイロンの前に出て、肩に下げていた異形の複合体、リー・エンフィールドを渡す。

「弾は入っていないので、好きに動かしてみてください……」

スプリングフィールドが言い終わらないうちに、フェイロンはライフルを分解し、瞬時に組み立ててさらに構えて見せた。

「は……速い！　すごいですよフェイロンさん、訓練なしでエンフィールドを分解・組み立て、そして射撃体勢にまで入れるなんて！」

金属と木材の異形の複合体は、思ったよりも単純な構造をしているらしい。何のことはない、ただのカラクリでしかない。

「遅いな……俺なら、兵隊さんが銃を構えるまでの間に三人は殺せるぜ」

ガチャガチャと数回ボルトをいじった後、フェイロンは銃をスプリングフィールドに突っ返した。

「フェイロン、私の『遠田軍』に入るつもりはないか？」

「いきなり直球で聞くねえ」

「今の『青蜥蜴』ではこれからの時代には対応できないだろう。拳や剣で戦う時代じゃないんだ。これからは銃の時代なんだよ」

「悪いが興味ないね。さっきも言った通り、その銃よりもまだ俺の方が速い。素人にそんなオモチャ持たせるよりも、俺らとこれまで通り仲よくした方がよいぜ」

チェンの顔が固まる。

フェイロンはチェンとスプリングフィールドを睨んでから、執務室を出る。ドアが閉まる瞬間、後ろから刺すような殺気を感じたが、それが誰の物なのか判別する前に、ドアは完全に閉まってしまった。

「頭の固い古代人め」

チェンが舌打ち交じりに吐き捨てる声だけが微かに聞こえ、フェイロンのうなじを泡立てた。

青い刃のような殺気は、完全にかき消されてしまった。

行きつけの酒屋も、ずいぶんと雰囲気が変わった。わざとらしく民族衣装を着た娘たちが金髪の毛むくじゃら大男を接待（意味深）している。それこそ肉まんみたいに真ん丸に膨れた男は、イギリス産の酒を飲んで騒いでいる。

フェイロンはカウンターで一人熱燗をちびちびやっていた。

「どうぞ、白ワインの紅茶割りです」

給仕係の少年が、琥珀色の酒をフェイロンの前にだした。

「おいおい坊主、悪いが出す客を間違えてないか？ 俺は頼んじゃいないぜ」

「違うんです、あちらのお客様が……」

少年が示す方向から、執務室を出る時に感じた鋭い殺気が飛んできたように感じた。

栗色の髪の毛、少年にも少女にも見える青年が、フェイロンを見据えていた。

「僕の奢りです。どうぞ飲んでください」

「断る、俺はイギリスの酒が嫌いだ」

青年はフェイロンの言葉を気にすることなく、柔らかく口角を上げる。

「あはは、いいんですよ、話しかけるきっかけが欲しかっただけですから。あと、このワインはフランス産ですよ」

「うっ、うっせえな」

フェイロンの前に置かれたのと同じ色のグラスを持って、スプリングフィールドが近づいてきた。フェイロンの隣に立ったスプリングフィールドは、カウンターと肩がほぼ同じ高さに来るほど小柄だった。対比物があるせいで、執務室で見たときよりも一層小さく見える。フェイロンは、この青年を裸にしたら、あるべき場所にあるべきものがなく、無いはずのところに無いはずの物がついていたりするのだろうか和一瞬想像してしまった。

「俺と話したいって、なんの話だ」

「さっきのあなたのエンフィールドの操作、完璧でした。あなたのような人でなければ、僕のエンフィールドは本当の力を発揮できないって思いまして」

「僕の？」

「はい、イギリス軍の新小銃の開発に、僕は携わっていました。採用されたリー・エンフィールドの基礎設計は、僕がしたんです」

こんな少女、いや青年がああ異形の武器を作ったのか。フェイロンは世の中わからないことだらけだなと思った。

「フェイロンさん、一つ、謝っていただきたいことがあります」

スプリングフィールドの柔らかな頬が硬化し、青い刃のような視線がフェイロンを射抜く。その刃の冷たさに、思わずフェイロンは唾を飲んだ。

「僕のエンフィールドを『オモチャ』と言って嗤ったこと、忘れてませんよ」

「あ、ああ、口が滑っただけだよ悪かった。いい銃じゃないか」

「でしょ！ 十発入りのダブルカラムマガジン！ 素早い排莢再装填を可能とするボルトアクション機構！ そして何より……」

「わかったよ！ すごい銃なんだろ！」

瞳に青いステンドグラスを埋め込んだスプリングフィールドが大興奮して話すのをフェイロンは制す。

「あ、すみません、エンフィールドの話ができてうれしくてつい……」

面倒な奴に気に入られたものだ。今夜は遅くまで飲むことになるだろう。フェイロンはつまみの甘納豆を噛み潰し、酒で流し込む。甘い、すごく甘い。間違えてスプリングフィールドが出した白ワイン紅茶割りを飲んでしまった。慌てて熱燗を飲み、味を上書きしようとしたら、今度は熱い酒が口腔と喉を焼いた。

二種類の酒を口に含んでは顔をしかめているフェイロンを見て、スプリングフィールドはころころと笑った。

ひとしきり笑うと、彼は薄紅色の唇を固くした。栗色の前髪の奥から、澄んだ双眸がフェイロンを射抜く。

「フェイロンさん、僕と一緒に来てくれませんか？」

まるで、若い娘が恋人に告白するような言い方だった。フェイロンは口腔内で混ぜ合わせた酒と甘納豆を吹き出しそうになった。

「急にどうした？」

「あ、すみません！ 変な意味で言ったんじゃないくて、その……」

スプリングフィールドは赤面しながら弁明する。本当に、仕草までいちいち少女を連想させる。厄介な男だ。

「僕は『特殊戦隊Sea-Lレンジャー』という部隊を構想しています。」

「シール？」

「海の『Sea』と、陸の『Land』からって『Sea-L』です。陸海軍どちらにも属さず、どのような環境でも戦闘できる部隊。それぞれの分野のエキスパートだけを集めた少数精鋭の部隊です。フェイロンさんには、そこで対人格闘術の指導をしてもらいたいんです。もちろん、新時代に合わせた全く新しい対人戦闘技術の開発にも協力してもらいたいと考えています。これを見てください」

スプリングフィールドは懐から奇妙な形の小さい機械を取り出した。

「ナガンM1895リボルバー拳銃です」

エンフィールドとはまるで違う、非常に小さな銃を、フェイロンは観察した。

「小さくなった分構造が複雑・貧弱になっているみたいだが、悪くないんじゃないか？」

「でしょ！設計は古臭いですが、良い銃です」

「これもイギリス製か？」

「いえ、これはベルギー製です。去年ロシアが正式採用したから、M1895って言うんです。シリンドラーのスイングオープン機構こそ無いものの、燃焼ガスの漏れがほとんどなく、サプレッサーによる発砲音の軽減も可能。まさに、僕の『Sea-Lレンジャー』にぴったりの銃です」

何を言っているのかよくわからないが、とにかくすごい銃だということがフェイロンにはわかった。わかった気がした。

「イギリスでこの拳銃と、ナイフを使った全く新しい対人格闘術を、僕と一緒に作りませんか？」

海の底から海面を見上げれば、海水を透過する光を見ることができる。それと同じ光が、スプリングフィールドのガラスの眼に宿っていた。

まだ見ぬ新世界へ、僕を連れて行って。

囚われの姫君を助け出すような胸の高鳴り。快感が血に溶けて体を巡る。

俺が……。

「いや、断る」

頭に快感が流れ込む前に、フェイロンは答えを出した。

「何故ですか？ 悪い話じゃないのに？」

「お前俺が遠田軍に入るの断るところ見てただろ。俺は青蜥蜴の戦士だ。誰かが作った組織に入って不自由するのは御免なんだよ。だいたい、俺はイギリスが嫌いだ」

そこまで言うと、フェイロンは乱雑な手つきで銀貨を適当な枚数カウンターに叩きつけた。

「これは酒の代金だ！ あばよ」

吐き捨てるように言うと、フェイロンは出口に向かった。

「待ってくださいフェイロンさん！」

スプリングフィールドがフェイロンの袖をつかもうとする。フェイロンは素早く手を引き逃れる。

これ以上この男と関わるわけにはいかない。

「まだなんか用か？」

「もう一度考え直してくれませんか？ せめて、このナガンを使ってから！」

スプリングフィールドはナガンをフェイロンに差し出した。

フェイロンは、自分の前に出された小さな殺人機械をじっと睨んだ。

「遠田軍を動かすんですか？」

スプリングフィールドはチェンに問った。チェンは執務机にどっかり収まったまま煙草をふかしている。

「ああ、未明には出発する」

「そんな、急過ぎますよ！ 碌な準備もせずに出撃するなんて！ だいたい、なんのための出撃なんですか？」

チェンは口腔に滞留させた紫煙を、スプリングフィールドの方へ吹き出す。下品な。スプリングフィールドは胸中で毒づく。

組織されて間もない、しかも訓練し始めたばかりの遠田軍。兵の練度もまちまちな「弱い組織」で夜間の戦闘を行う。めちゃくちゃで訳が分からないが、唯一作戦目標だけは予想できた。

がんと煙管を必要以上に強く灰皿に叩きつけ灰を落とすと、チェンは眉間に深い谷間を作った。

「邪魔なんだよ」

何が、とは聞かなかった。聞かずともわかる。

「私の思い通りにならない組織など、邪魔なんだよ」

静かな夜だった。空気は良く研いだ刃のように冷たく澄み、ちりちりと肌を切る。熱燗が欲しいと思ったフェイロンは、火鉢で酒を温め始めた。

こめかみのあたりの血管がぎゅうっと締まり、耳の奥が不快感に委縮する。

何か来る。フェイロンは部屋の隅に控えていたルーロンを見る。ルーロンも気配に気づいたらしい。

神経を空間に拡張させ、敵の気配を探る。多い。五十人はいる。そして聞き覚えのある金属と木材が合わさったような音。

「来やがった」

足音を立てない特殊な歩き方で、ルーロンが玄関の扉に近づく。扉に手を置き、外から伝わる振動や温度を探る。

雨粒が屋根を叩くような連続的な音がした。しかし、雨粒一つ一つが爆竹の数十倍の爆音を立てていた。フェイロンは柱の陰に隠れる。

爆音が収まると同時に、びちゃっと液体がばらまかれる音がした。さっきまで酒を注ごうと思っていた白磁の盃が床に落ちていた。白く光る盃には、さっきルーロンだったひき肉が映っていた。

「いくら青蜥蜴の戦士といえども、この距離でライフル弾を喰らえば一たまりもなかり！」

チェンの声が高笑いする。

「飛び散った血と肉で肉まんでも作ろうか？ 隣の市の市長の息子は肺病らしいから、青蜥蜴の戦士で作った肉まんを売ってやろうか。売った金でまたライフルを買おうか！」

入り口に十人、裏口に十人。家の側面を十五人ずつか。こんなおんぼろ小屋に五十人がかりとか、あ○ま狂ってるだろ。状況判断と侮辱を同時に行ったフェイロンは、全身の筋肉を固くした。再び力を抜く時には、全身隔々に血が流れ、いつでも戦える準備ができた。

「さあ、残りの青蜥蜴もひき肉にしまえ！ 遠田軍、突撃！」

土足でづかづかと床を踏む音が響く。遠田軍の兵士たちは互いに距離を詰め、死角がないように警戒しながら家の中に進んでいく。

柱の手前に兵士が来たところで、その陰から突然フェイロンが躍り出た。

「あ……」

連続的な爆発音、銃声が響く。しかし、銃声が鳴り止むころには、家の奥に入って行った五人の兵士は息をしていなかった。



ばたばたと音を立てて五人の死体が崩れ落ちると、死体の影から上裸になったフェイロンが現れた。フェイロンが大きく腕を振ると、入り口付近にいた六人の兵士が、目刺しのように並んで串刺しになった。銃剣を付けたエンフィールドを投擲したのだ。

「この化物が！」

混乱した兵士たちが撃ちまくる。しかし、部屋の中に向けられた銃口の数はずいぶん減っていく。

よく耳を澄ますと、くしゃくしゃと音がする。フェイロンが兵士の頭蓋骨に指で穴を開ける音だ。その音の数だけ、人が死ぬ。

「うわああ！ お母さん！」

「何をやっている！ 私の命令は絶対だ！ 突撃しろ！」

逃げ惑う兵士を部屋に押し込むチェン。押し込んだ兵士は土間の中ほどまで行くと、よたよたと倒れた。倒れた兵士には頭が無かった。

スイカが転がるような音がして、何かが転がってできた。ごちゃりと湿った音をさせてチェンの足元に落ちついたそれは、さっきの兵士の頭だ。

「ひっ！」

「素人に銃を持たせただけの部隊なんざ、俺の前ではてるてる坊主みたいなもんなんだぜ！」

笑うフェイロンの熱い息が耳にかかる。チェンは絶叫しながら倒れ込む。

「お前は俺たちを時代遅れだと思ってるらしいが、結果はどうだよ。あんたの近代軍隊もこんなに死んでるんだぜ」

「だ、黙れえ！」

チェンが近くに投げ出されていたエンフィールドを拾い、真っ直ぐにフェイロンに向けた。

銃声が、冷たい空気を引き裂いた。ボルトをスライドさせて空薬莖を捨てる。つんと鼻を指す硝煙。もやもやと立ち上る白いものは、まき散らされた人の血から出た湯気だ。

本当に、人って温かいんだな。スプリングフィールドは静かになった家に近づいて行った。さっきまで青蜥蜴のアジトだった家は、今はもう死体置き場となっていた。

入り口付近に倒れる二人の男を、スプリングフィールドは見下ろした。一人は上裸で、頭が下あごを除いて粉碎四散している。本当は喉を狙ったはずなのに、少し上に反らしちゃったな。目標からの距離もあったし、仕方ないか。死体を観察しつつ、スプリングフィールドは自分の射撃を分析する。

顔を潰してしまっは、もう身元が分からない。

身元が分かるほうは、もう一つ。こっちはよく知っている男だった。この国の地方官僚がよく着る服を着たまま、エンフィールドを構えた姿勢で倒れている。全然なっていない構え。トリガーとは全く違うところに指をかけ、ストックを右目に押し当てている。こんなヤツが、僕のエンフィールドを使おうとするなんて。スプリングフィールドの胸でぐらぐらと怒りが煮える。

その男の額には、拳銃の弾がめり込んだ穴が穿たれていた。大きさに、7.62mmナガン弾か。

スプリングフィールドは、自分が撃った頭が半分しかない男の手元を見た。そこには、小さな殺人機械が握られていた。

この男を撃った時、男は両手を手刀の形にして突き出そうとしていた。例えリーチが足りなくても、この男なら相手が発砲する前に間合いを詰めることができたはずだ。なのに、なぜこの男は拳銃でとどめを刺したのだろうか。

まさか……惜しいことしてしまった。スプリングフィールドはため息をきな臭い空気に混ぜた。

さて、本国になんて報告しよう。この国で僕が顧問を務める軍隊が初めて戦闘したこと。そして壊滅したこと。顧問を依頼した指揮官が死亡したこと。報告系統も複雑で、なんだかやることが多いな。どこから手を付けていいものか。

「チェンさん、『トカゲの尻尾切り』って言葉あるじゃないですか。『下の者に全部責任負わせて上が痛まないようにする』みたいなやつですよ。でも、実際トカゲだって尻尾を切れば痛い

し血も少し出るし、何回も再生できるわけじゃない。とすると『トカゲの尻尾切り』って、かなりのリスクを払っての切り捨てじゃないと使えないんじゃないですかね？」

愚痴の一つでもと思い、スプリングフィールドは独りで喋る。返事をするのは、火鉢の炎だけ。

自分も、トカゲの尻尾切りか、ナマコが内臓を自切するぐらいのリスクを覚悟しないと切り捨てられないような者になりたいものだ。そうなる前に、まず切り捨てられないように身の振り方を考えなくては。スプリングフィールドは独りで笑った。

「やることは山ほどあるけど、一先ず、この死体の山をどうにかしようか」

スプリングフィールドは、人を呼んできて死体運びの手伝いをさせようと思い、小屋を後にした。その時、小屋の前に落ちていた男の頭蓋の一部に結った髪の毛の束が付いているのを見つけた。スプリングフィールドは髪の毛の束を適当な長さナイフで切り取って、懐に入れて行った。

(終)

あとがきという名の何か

時代背景とかはありますが、正確に史実を反映してはいません。清末の洋務運動とか、革命党員の肉で作った肉まんとか、要素だけをちりばめています。

昔中国には、鞭打ちとかと並んで断髪刑があったらしいです。身体刑なのにほとんど痛みを伴わない、辮髪を切るだけの刑だったらしいです。

トカゲは尻尾の骨があらかじめ切れるようにできていて、刺激に対する反射で「ちぎれるパン」みたいに切れてしまうようです。切れた後再生した尻尾には骨が無く、もう切ることはできないらしいです。

ラブレターボックス

如月深琴

退屈な授業も、なによりも愛してやまない部活も終えて生徒玄関まで歩く。今日は部活が終わるのが早かったため、玄関にはそれなりに生徒がいる。

「あれ、亮太じゃん。今日は早いのかなエンゲキブ」

「おー、今日は基礎練だけだったんだよ。まだ台本もまだ完成してないらしいし」

「へー？ あ、脚本と言え。見つかったのか？ 謎の脚本家さん」

謎の脚本家。それは、俺が高校に入って初めて演劇部で主役を飾ったときの脚本家のことだ。その時の脚本は完全オリジナルの内容で、当時脚本についてを一任されていた現部長によると、文芸部の人に書いてもらったのだという。けれど、名前も学年も、何もかもがわからないのだ。本人の希望で、だれにも何も教えない約束でなら脚本を書くという条件だったらしいので仕方ないのだが。わかっているのは、女子生徒ということだけだ。

「いや？ でも、部長に聞いたら友達だって言ってたし、たぶん同学年だよ」

「おお、そこまではわかったのか、すげえな」

「丸一年かけてこれだけな」

去年の秋に彼女のことを知って、それからずっと彼女のことを探しているのに、一年かけた成果は彼女が同学年かもしれない、ということだけ。

「心折れそうだよ……」

「まあ、頑張れよ！ そうだ、帰りにアイス買っていこーぜ」

「行く……」

友人の優しさに心を温めつつ、自分の靴の入った下駄箱を開ける。すると、朝見た時には確実になかったであろう物が入っていた。

「手紙？」

「お、ラブレターか？」

「いや、それはないだろ。お前がもらうならまだしも……って、悲しいこと言わずなよ」

「ははは、悪い悪い。で、誰からなんだ？ 封筒的に女の子なのは确实だろ」

「だと思う。でも、名前書いてないんだよ」

「は？」

封筒を両面確認してみるも、やはり見当たらない差出人名。まさか嫌がらせなのだろうか。そうだとしたら、こんなことをやりそうな友達は目の前にいるこいつくらいだが、何かを隠しているようにも嘘をついているようにも見えない。顔に出やすいこいつのことだから、きっと本当に知らないし、何もしていないんだろう。でもだとしたら、だれが何のために……？

「開けてみれば？ さすがに中身がないってことはないだろ」

「そうするかあ。……ちよっとこわいな」

薄桃色の封筒を破かないよう慎重に開ける。中から出てきた、これまたかわいらしい柄の便せんには見覚えのある字で文章が綴られていた。

「……これ」

「お、綺麗な字だな！ やっぱり女子かな？ ……どうかしたか？」

「……ごめん、アイスはまた今度にさせてくれ！ 今日は帰る！」

「は？ ちょ、おい！」

制止の声を振り切って家に向かって走る。久しぶりにこんなに気分が高まっている気がする。それもそうだ。だってこの字は。

小橋亮太さま

初めまして。いきなりのお手紙で驚いたと思います、すみません。名前を知ってしまうと、クラスや学年がわかってしまい、面と向かって話すことにもつながってしまいそうで緊張するので、申し訳ありませんが名前は書きません。会いたくないわけではないんです。むしろ会って話したいとは思っていますが、まだ勇気が出ないんです……。本当にごめんなさい。

私は、昨年の春ころに亮太さんが体育館で一人残って自主練習をしているのをたまたま目にしました。その時から私は亮太さんのファンで、演劇部の友達に無理を言ってこっそり見学させてもらうこともありました。何度も話しかけようともしましたが、やはり勇気がわからずに今日の今までを過ごしてきました。

ですが、それでは駄目だと、そして亮太さんとお話してみたいと思い、今回手紙を書こうと思いました。

もし、亮太さんが良ければ、文通をしていただけないでしょうか？

していただけるのなら、亮太さんの靴箱にお返事を入れておいてください。

はやる気持ちを抑えながらリュックから筆入れを出し、数年前に使ったきりの便せんを机の引き出しから引っ張り出す。

見間違えるわけがない。この一年間毎日のように見ていた字だ。一年経って舞い込んできた彼女との接点。逃すわけにはいかない。このチャンスをものにしてみせるんだ！

「……書き出し、なんて書こう」

初めまして。手紙、ありがとうございます。

ファンだなんて、すごくうれしいです。僕の行動が何かあなたの力になっているのなら、本当にうれしいです。

勇気がないとはいえ、文通って、すごく古風なチョイスですよ（笑）手紙を書く機会なんてあんまりないし、文を書くこともあまり得意ではないので、もしかしたら変な書き方だったりするかもしれません。それでもよければ、文通、ぜひやりましょう！

必要ないかもしれませんが、少しだけ自己紹介しますね。

僕は小橋亮太。演劇部に所属していて、去年のとある舞台をきっかけに、主役に選ばれることが多くなりました！

あなたのことは、何と呼べばいいですか？

小橋 亮太

息をのんだ。これは、自分に都合のいい夢なのではないかとさえ思ってしまう。

「あ、昌ちゃん、見てこれ！」

「お、良かったね。もう読んだの？」

「うん！ 私、緊張しすぎて呼び名のこと書くの忘れちゃってたみたい……何と呼べばいいですかって聞かれちゃった」

なにやってるのと呆れたような声で言われて苦笑いで返すことしかできない。

「まあでも、一歩前進はしたじゃん。このまま頑張りなよ」

「昌ちゃん……。うん、頑張るよ！ ありがとう！」

夢じゃない。入ってるかどうかもわからない手紙にドキドキしながら開けた彼の靴箱も、その中にしっかりと入っていた、私が入れた手紙とはまた別の、すこししわくちゃんな手紙も、すべて現実なんだ。

ああ、今なら空も飛べそうな気がする！

「なあ、最近どうなの、例の手紙の子とは」

脚本家さんと文通を初めてそろそろ二か月になる。折角の彼女からの手紙なんだしと思い購入したレターホルダーはもうそろそろ埋まってしまう。

「順調だよ。そろそろ新しい便せん買いに行くんだ。お前も来るか？」

「行かねえよ。便せんとか使わねえから見ててもつまんねえもん」

「それもそうか。……。あ、じゃあさ、いい感じのレターホルダー選ぶの付き合ってくれないか？  
今使ってるのそろそろ埋まりそうだから」

「あー、まあそれくらいならいいけど……。その代わりに、昨日のノート見せてくれよ。俺休んでたし。等価交換な！」

「そんなのでいいのかよ、それもう等価じゃないだろ……。ほら、たしか現文と数学、英語と生物、世界史、あと日本史な」

「さんきゅ。……。お前、字うまくなったなあ」

「へへ、だろお。彼女と文通始めてから少しずつきれいになってきたんだ。あと、国語の成績が少し上がった」



脚本家さんと文通を始めたころは、お世辞にも綺麗な字と言えるものではなかったが、彼女の書く綺麗な字を見ていたら、なんだか自分の字が恥ずかしく思えてきたため、小学生の時ぶりに字の練習をしたのだ。その結果、まだまだではあるが、以前とは比べ物にならないほどに綺麗な字になった。

また、文通をすることで文章構成能力も身につけてきたからなのか、国語、特に現文の成績が少しだが上がった。

「お前もう脚本家さんに頭上がらねえな」

「ほんとにな」

「あ、小橋君。今日は帰っていいよ」

「はあ？」

十二月某日（というと少し賢そうに見える気がする）、冬休みに入り、本当なら暖房のついた暖かい部屋でゆっくりしていたかったが、今日は朝から部活があるから学校に来た。それなのに……。

部長が肩をすくめて苦笑いをこぼす。冬とはいえ今日は天気が良く、部長の髪に光が当たってほんのりと青く見える。

「いや、折角来たのに」

「申し訳ないね。脚本を書いていた文芸部の子が直前になって修正点を見つけてしまったらしいんだ」

「少しの修正くらいすぐに終わりそうなものだけど」

「クライマックス全部直すとか言ってたらしいよ。だから今日はなし。かえって大丈夫だよ。無駄足させてごめんね」

普段なら綺麗な弧を描いている部長の眉が下がっている。

彼女のこんな顔を見るのは、去年の演劇大会直前に、俺が緊張しすぎていた時ぶりだ。あの時とは気持ちは全く違うんだろうけれど、彼女のこの顔は何とも言えない罪悪感にかられるから苦手だ。

「……まあ、より良いものを作ろうとしてくれてるわけだから、仕方ないか」

「明日までには完成させると言っていたから明日の部活は予定通りで頼むよ」

「ん、了解。じゃあ今日は帰らせてもらうよ」

つい数分前に通った廊下を早足で通り抜ける。暖房のついていた部室とは違い、当然だが廊下に暖房はなく寒い。

「うう、寒い。早く帰ってココア飲もう……」

そうと決まれば早く玄関に向かおうと、もともと早足だったところをさらに早める。数分ほど経ったあたりで、見慣れた下駄箱が見えてくる。さあ後は靴を履きかえれば帰れるぞという時、ちょっとした違和感があった。

誰かいる？

「……あの一」

「えっ」

「いや、そこ俺の……て、にげたあ！なんで！」

なぜか見知らぬ女子が俺の下駄箱を開けていた。

「ちょ、ちょっとまって！」

「いやああごめんなさい許してください！」

真冬の、しかも冬休み中でほとんど人がいない、いたとしてもみんな目的に夢中になってい

る中、廊下を爆走する男女二人。なんて可笑しな光景だろうか。けど、そんなことにかまっている暇はない。

「ちょ、ほんとにまっ……足早くないか君！」

「数少ない特技の一つですううう」

気を抜くと見失う。それはだめだ。

「ま、ほんとに……！ あの、脚本書いてくれた子だよね！」

彼女の足が止まる。

本当に彼女だとするなら、距離を詰めすぎてしまってはダメだ。彼女の後ろ、訳3メートルほど空けて立ち止まる。

彼女は何も言わない。肩が上下している。疲れたんだろう。それはそうだ。全力で校内の半分ほどを走ったのだから。

「……あの、そのままでいいから聞いてほしいんだけど」

沈黙。

「去年、演劇大会の時にやった内容、すでにある物語じゃなくて、ある人が書いてくれたオリジナルだったんだ。俺、それまでは主役とかやったことがなくて……」

沈黙。

「でも、その脚本、俺を主役にすることを前提に書かれたものだったらしくて、その時初めて主役になれたんだ」

沈黙。

「だから、その、ずっとお礼が言いたくて……。顔も名前もわからないから、想像でしかないけど、きっと素敵な人なんだろうって思ってた……。ありがとう、俺を選んでくれて」

沈黙。

言いたいことは言い切った。彼女はずっと後ろを向いたまま何も話さない。どんな風に思っただろうか。どんな感情を抱いているのだろうか。嫌悪、だろうか。

「あの」

「へ、あ、はい！」

「あの、すこし、下を向いていてください。……向きましたか？」

「む、向きました」

「……素敵な人って、言ってくれましたよね」

下を向いているから、彼女の顔は見えない。けれど、声が震えているのがわかった。

「うん、言った」

「その、それ、あの」

「……ね、顔上げてもいい？」

「え、あ、ちょ、ちょっと待ってください！……あの、一つ聞きたいことがあって」

深呼吸の音が聞こえる。軽く頭が抑えられている。顔があげられない。

ああそういえば部長が、「あの子はとっても恥ずかしがり屋で、緊張しいなのさ」って言ってたっけ。

「か、顔を見ても、変わらない、ですか……その、素敵って思ってくれてるの」

頭を押さえている手から震えが伝わってくる。

「……ね、手、どかして？……ふはは、そんなぎゅうって目瞑らないで」

抑えていた手をからめとり、繋いで彼女を見ると、恥ずかしいからか、それとも俺がどんな顔をしているのかを見たくないからか、力いっぱい目を瞑っていた。

「……ね、目開けて？」

「う……」

「だーいじょうぶだよ。俺がどれだけ君を求めてきたと思ってるの。今更顔見たくらいじゃ動じゃないよ」

「え、あ、そうなんですか……？」

「そうだよ。……それに、想像してたよりずっとずっと素敵で、余計に素敵だなって思ったよ。……あはは、顔真っ赤だ。ね、俺君にお願いがあるんだけど聞いてくれない？」

お願いと聞いて、彼女の方が強張った。

「おねがい、ですか……？」

「そう、お願い。……君の名前、おしえてくれませんか？」

「……土屋、雪です」

あとがき

高校の時漫画に描いた物語をリメイクして書きました。

小橋君と雪ちゃんは自分が今までに作ったキャラたちの中でもお気に入りの子たちなので、楽しかったです。

## ある月曜日の話

---

ある月曜日の話

炬燵猫

頭がずきずきと痛む。

意識は曖昧で、視界がぼやけて見える。

全身に力が入らない。今だって横になって、だらけた自分の手が見える。

冬でもないのに、とても寒い。ティッシュ箱がものすごい勢いで軽くなっていく。代わりにゴミ箱が山盛りになっていた。嬉しくはない。

今の季節には早いような厚手の掛布団を、私は握りしめる。布団にくるまっているというのに、まったく幸福感がない。うーん、この。

やっぱり頭が痛い。脳みその中心から痛みが伝播しているようだ。

布団の中で、ぴびぴび、と何かが鳴る。三回目くらいで、幻覚ではないと気付いた。もっと自己主張してくれよ。

脇の下から、白くて細長い物体を取り出す。千円くらいの体温計。表示されている数字は、三八・六。うーん、この。

要は、風邪をひいたらしい。

やっぱりかー、と思った。

周りで風邪が流行っていた。健康体そのものの私は風邪でダウンした高宮君を散々からかったのだが、まさか自分になるとは。世の中うまくいかないものだ。

昨日は外出しなかった。一昨日、一人でイベントへ行ったのがいけなかったのだろうか。あれは人が多かった。風邪をもらってきたとしたら、あそこだろう。

昨日から少し体調が悪かったのだ。月曜になれば治るだろうとたかをくくっていたのだが。

本当に、世の中うまくいかないものだ。

とりあえず、今日は一日ベットの中だ。

私は週明け早々休みの連絡をするため、スマホを掛布団の中に引きずり込んだ。

四時ごろになって、食欲が出てきた。

私はベットから起き上がって、冷蔵庫を開ける。まあ、きっと何か都合のいいものがあるだろう。

これはこの話と全然全くこれっぽっちも関係ないのだが、私は日曜日、いつも買い物をする。というのも、日曜日は食材が切れる曜日になりやすく、ついでに日曜日は商品券スクラッチの配布を行っている。自炊勢の私は、定期的買い物をしないと生きていけない。商品券スクラッチは当たったことがない。

当然の節理として。

冷蔵庫はその白く美しい壁面で思う存分光を反射していた。

私はその美しい壁面を眺めて、冷気が私を冷やす前に音もなく冷蔵庫を閉じた。

そのままふらふらとベッドへダイブ。すっかり軽くなったティッシュ箱を投げ捨てて、念のため備えてあった予備を開封。

鼻水はかなり収まった。新しいティッシュ箱は、そんなに減らないだろう。

もう一度体温を計る。体温計をもぞもぞと脇に突っ込んで、待つこと数分。

やはり自己主張の足りない音を聞いて、取り出した数字は三七・五。医学的には、ぎりぎり発熱ラインだ。

誤差である。

自分にそう言い聞かせて、無理やり体を起こした。一日着てよれよれになったパジャマを脱ぎ捨て、私服をひっぱりだす。

頭はまだ少し痛いけど、まあ大丈夫だろう。鼻水は、ポケットティッシュで対処できそう。喉が痛いのは、知らない。のど飴でも舐めておくことにする。

なにより、朝から空っぽの胃袋が抗議の声を上げている。水だけではどうにも収まりそうにない。

私は財布に三千円入っているのを確かめて、ポケットに突っ込んだ。

今日は雨が降っているせいか、少し寒い。私は玄関先に置いてあった傘を掴んだ。

スーパーについた。のど飴はなくなった。

困った。何も考えていなかった。半ば無意識に籠を手にとって、安売りしている玉ねぎを投入。そのままいつも買っている肉やら野菜やらを次々籠に入れて、店内をとりあえず一周した。

ふと。

何か赤いものが目に入った。

どうということはない、ただの林檎である。「今が旬！」の文字が、私に林檎を買えと訴えてきた。

念のため、値札を確認。百五十円。まあ、これくらいなら。



いくつか品種がある中で、私は迷わずシナノスイートを手に取った。

他の林檎のほうがいい、だと？ 馬鹿言えシナノスイート一択だ。富士りんごの君、まあわかる。津軽の君、私の風邪が治ったらちょっとお話をしたいからあそこに来てくれないか。そうそう、あの人通りの少ない場所だ。

私の脳内で、林檎どもが喧嘩を始めた。やっぱりあれは誤差じゃないのかもしれない。

自宅。もうすぐ五時。

買ってきたものを冷蔵庫に放り込んだら、最後に林檎が残った。脳内乱闘で勝利を収めたシナノスイートだ。

よし。胃袋のご機嫌取りは林檎でいいだろう。

流石にまるまる一個は食べすぎだ。半分でいいだろう。

私は林檎を握りしめて、台所に向かった。まな板に水を流して、包丁を取り出す。

私に、果物包丁などという都合のいい代物はない。あるのは菜切包丁だけだ。

菜切包丁とは、その名の通り野菜が切りやすいように作られた包丁だ。肉が切りやすいのは牛刀、中間は万能包丁。実家にはパン切り包丁、刺身包丁、果てはうどんや蕎麦の生地を切るあのでかい包丁まであった。名前はわからない。

実家では菜切包丁で肉も切っていたから、菜切包丁一本で全部料理してきたのだが、果物の皮を剥いた経験はない。というか、普段果物を食べなかった。

とりあえず、林檎を真っ二つに切る。片方は隅に寄せて、もう片方を更に三等分する。さくさくと小気味よい音がして、林檎が三つに切り分けられた。そのまま中心の種を取り除く。

一つ、やってみたくことがあった。滅多に買わなかった、そしてこれから先も買う機会はほと

んどないであろう林檎。その林檎には、ある有名な食べ方がある。

うさぎさんりんご。

あの耳。どうやって作るんだろう。そもそも菜切包丁で作れるのか。

ものは試した。失敗したら食べてしまえばいい。

一切れ手に取って、慎重に包丁を入れる。

そのままうさぎさんりんごのお尻部分を作って、そのまま力を抜いてゆく。あの耳の切れ込みを作ろうという寸法だ。

失敗した。

普通に剥きかけの林檎になってしまった。これは、私が不器用なだけなのだろうか。それとも、包丁のせいなのか。はたまたやり方が間違っていたのだろうか。

まだ二切れ残っている。焦るのは早いぞ私。とりあえずこの方法はだめだ。

失敗した林檎は口の中に放り込んだ。

ひんやりとした甘さが、口の中に広がる。一口噛むごとに果汁があふれ出してきて、いまだに熱を持った私の頭を芯から冷やしていく。

二つ目の林檎は、別の方法を考えた。すなわち、先にうさぎさんの耳の形に切れ込みを入れておけばどうか。それならお尻から剥けば自然と耳だけが残る、という寸法。

えらいぞ私。頭いい。

慎重に刃を近づけていく。この辺か、と当たりをつけて、慎重に、慎重に。

深々と刺さってしまった。

うさぎさんになるはずだったりんごは、胴体を包丁に刺されて、見るも無残な姿に変わり果てた。うさぎさーん！ 死なないで！

包丁を引き抜いた拍子に、切れ目から胴体が割れてまな板の上にぽろっと落ちた。

何も言えなかった。

ああ、またこの手で一匹……。いや一羽……。

とりあえず、分裂した林檎は食べた。失敗したからね。

最後の一切れを手にとった。

緊張のせいか、包丁がぺたぺたしているような気がする。手と包丁を軽く洗ったら、普通に握れるようになった。

新しい方法を考えよう。

耳から作るのはどうだろうか。耳の始まる場所から剥いて、そのあとお尻から剥く。それならきれいなうさぎさんりんごができるのではないか。

脳内でシュミレートしてみる。うん、うまくいく。イメージをしっかりと持てばいける。

私はできる！

慎重に包丁を当てて、少し剥く。よし、いける。じゃがいもの皮を剥いた経験を、今こそ生かす時！

全然関係ない話その二。じゃがいもの皮は、どんな風に剥こうが見た目に影響はない。元の形が意味不明だし、大抵の場合はそこからさらに小さく切ることになる。まあつまり、美しく剥こうなどという意識は働かないのであって。

うさぎさんの耳はギザギザになってしまった。うーん、この。世の中うまくいかないものである。

お尻を作る気力すら失せ、ギザギザうさぎさんりんごを、むしゃむしゃと咀嚼する。流石はシナノスイート。おいしい。

最後の林檎を使ってしまった。働かない頭で私は考える。

調べるべきだろうか。某動画サイトを漁れば出てくるだろうということは、容易に想像できた。ポケットに入っているスマホを意識する。なんか釈然としない。

包丁をまな板の上に置く。取っ手が飛び出ていると危ないから、いつもより慎重に。

そのとき。視界の隅に、救世主が映った。

まな板の上には、またもや林檎が三切れ。種はすでに取り除いた。

あと三切れもあるのだ。見つけてやろう。うさぎさんりんごの作り方を！

五分後。

私は布団の中でふて寝を決め込んでいた。

太ももにごりごり当たって激しい自己主張をするスマホを引っ張り出し、某赤い動画サイトを開く。

うさぎりんごで検索。

検索トップの動画をタップ。五分くらいぼんやりとその動画を眺めていた。

動画内では、果物包丁を使って、浅く切れ込みを入れて剥いていた。完成したのは、私が作ったものとは似ても似つかない美しいうさぎさんりんご。

黙って電源ボタンを押して、スマホを充電器に接続。

もぞもぞと芋虫のように布団に潜り込んで、丸くなった。

翌日。

体温計が示した数字は、三七・八。

今日も休みの連絡をするべく、布団から手だけを出してスマホを探した。

## 025 Not Found

---

025 Not Found

守目冥人

乳歯車の中で中指を立てる赤子

基督を輸血する

沈黙がそれを解毒する

枯れてしまったチグリジアは燃えるゴミに

梅色と白が質量を奪う

穴の開いた柄杓ではすくえない

頭蓋骨の中で腐りゆく松ぼっくり

その洞窟の住み心地はどうだ

緑色の蛇が鎌首をもたげる

頭を振ればカラカラと鳴りそうじゃないか

液晶画面の愛玩動物は蒟蒻だ

六芒星が手を差し伸べる

侵蝕の夜、八畳一間を切り裂く剃刀

紅白だ、この上なくめでたいじゃないか

コードで作ったハングマンズノット

地獄へ行くのに天使の輪とは

絶望の朝、八畳一間を切り裂くアラーム

二つの首に刻まれた朱を隠して

ニューロティピカルの仮面を被って

六十と十二の支配下へ

### 美しい写真

全国苗字ランキング7位

聞かれて困ることがある。

「どうして、そんなに美しい写真が撮れるんですか？」と。

僕は本当にこの質問が苦手なのだ。いや、聞かれたくないという方が正しい気がする。それに、あの子のことを思い出す。

「……写真の神様に許してもらったからだと思います」

こう返答すると、きまって質問した人は困惑してしまう。まあ無理もないだろう。これは僕と彼女だけの秘密なのだから。

大学二年の冬、僕はある写真のコンテストで一位を取り、写真の神様に嫌われた。たぶん、やってはいけないことをしたのだろう。

自然は時と共に変化し、一秒たりとも同じ状態にならない。そして何より、偶然性や不自然さまでもが自然の中に内在していると思う。だからこそ、その二度とない状態を自然が織りなす不自然さを収めることができる写真は人を魅了して止まないのだろう。だけど、僕が何枚写真を撮ろうともフレームの中に

は既視感しか感じない陳腐な物ばかりが映り込んでしまう。そう魔が差したのだ。僕は花を買い、花瓶を選んだ。照明や角度、場所さえも自分で選んだ。使われてない講義室の一室に机と花瓶を置き花を挿し、照明を調節し、幾日も写真を撮り続けた。何枚とったか忘れたが、同じような写真を毎日見続け、ようやく納得のいく写真が撮れた。そこには僕が伝えたかった恐怖という感情が映っていた。まるで絵画のような美しい写真。それもそうだろう、忠実に僕が撮りたい物を撮りたい場所に置き、撮りたい角度で撮ったのだから。そう、ファインダーをキャンパスに見立



てて僕は絵を描いたのだ。これをコンテストに出したのも気の迷いだった。

「こんな写真とったら写真の神様に怒られちゃうな」

当たり前だ。写真の意義を無視したような写真なのだ。罰が当たってもしかたない。そんな風に考えていた。しかし、結果は一位を取ってしまった。ただ、写真の神様は僕に一生消えない罰を与えたのだった。

大学三年の四月、写真部の部室には僕の絵が貼られていた。それもでかでかとコンテスト一位となった作品であることも書かれている。僕はこの写真を撮って以来、普通の写真を撮れなくなっていた。そしてこの写真を見るたび何か冷たいものに心臓を驚掴みされた様な気分になる。不規則な心臓の鼓動を治すためにも周りを見渡す。今日は新入生が部室を見学に来ていて二、三年生が壁に貼られた写真を紹介しながら一年生を勧誘していた。ふと、新入生と思われる髪の長い子が部室に入ってくる。

「雄介君、あの子お願いできる？」

忙しそうにしている部長に言われ、一言、いいよと言い、彼女のもとへ向かう。

「こんにちは、一年生だよ。見学かな？」

僕は努めて明るい声で言った。その子は一年生にしては大人びていてとても人目を惹く容姿をしている。僕の視線にまるで気づいている様子もなく、部室を見まわしたかと思うと一点を見つめたまま言った。

「あの写真はだれが撮ったんですか？」

彼女の視線の方を見ると僕の写真があった。コンテスト一位とでかでかを書いてあるから嫌でも目に入るのだろう。

「僕が撮った写真だよ」

そう言うと彼女は初めてこっちを見てきた。彼女の表情からは何も感じられなかったが端正な顔立ちの女性に見られるのが恥ずかしくて僕は目をそらす。

「そうなんですか。もっと近くで見てください」

彼女は僕の写真の前まで行き、20秒ほど見たらまた僕の前まで来てこう言ったのだ。

「あれは写真というより絵みたいですね。ただ…、いえ、なんでもありません。失礼しました」

そう言い彼女は部室を出て行った。褒められることに慣れていた僕は啞然とした。どうして？  
なぜ？

初めて僕の意図を理解してくれた人が現れたことで戸惑いと嬉しさが心の中に同居していた。

新歓の席に彼女の姿があった。名前は瞳だそうだ。

新入生も少しずつ大学生活にも慣れ始め、キャンパス内も落ち着いてきた五月頃は少し汗ばむくらいの暖かさと心地よさに包まれていた。僕は今日、写真部の活動でキャンパス内を散策していた。本当はキャンパス内を自由に歩き回り写真を撮るといものなのだが、僕は写真を撮ることを諦め、目に映る物だけを甘受している。数人で笑いあう学生たち、音楽を聴きながら一人、家路を急ぐ学生、咲き誇り役目を終えた花々、何を見ても手がカメラを触ろうとしない。自分が何を撮りたいのかも忘れてしまった。なんともなしに歩いていると、不意にシャッター音がした。音の方を見る。瞳がこちらにカメラを向けて立っていた。

いつからそこにいたのだろう、妙な存在感がある子だからいたら気づくはずなのに。カメラに視線を落とした彼女の表情はとても冷たく見えた。

「気づかなかったよ。どうしたの、何を撮ったの？」

焦りからか少し早口になる。

彼女は顔をあげ手本となるような作り笑顔をうかべ言った。

「先輩を撮って見たんですが、ダメでした」

そういえば、彼女が入部してから一度も彼女の写真を見たことないことがない。何がダメなのだろう。

「良ければ見せてもらえないかな？」

彼女のもとへ行こうとしたとき、また彼女はカメラを構えシャッターを切った。

「カシャ」

「やっぱりまたダメでした」

僕は思わず苦笑し、彼女のカメラを覗き込んだ。

「僕なんかを撮るからだよ。被写体が悪いよ。どれ」

液晶に映っていた写真を見て僕は殴られたような衝撃と共に熱を感じた。そこに映っていたのはピンボケしているが、今にも動き出しそうな僕が映っている。しかもその輪郭がぼやけた顔には、はっきりと彼女の写真を見れることに対する僕の嬉しさが現れていた。もっと彼女の写真が見たい。何かわかる気がする。

「さっき僕を撮った写真も見して」

言うが早いか、カメラのアルバムを見始める。これもピンボケしていたが、やはり僕の苦悩が映っている気がする。次は、どんな写真があるんだろう。次、次……。

「そんなにがつついて見ないでくださいよ。私の写真なんてどれもこれもピンボケしてたり角度が変だったりでまともな写真なんてないですよ。変な先輩ですね」

彼女は僕のすぐそばで笑っていた。僕はどうやら彼女の写真が見たくて彼女が持っていたカメラを引き寄せていたらしい。急に恥ずかしくなり彼女から距離を取る。

「ごめん。最近、スランプ気味で…君の写真を見たら何かわかるような気がしたんだ」

恥ずかしくて目も見れなかった。彼女の写真が頭から離れない。走り始めようと意気込む人、おそらく想い人に早く会いたいのであろうその顔は何とも言えない幸福感に包まれていた。一人歩く青年、何かに葛藤していることが嫌でも伝わってくる。彼女の写真には被写体の思いが鮮明に映っていた。彼女は技術さえ手に入れば素晴らしい写真家になると思う。

「君はとてもいい写真を撮るね。映っている人たちの思いが手に取るように分かる。うらやましいよ」

僕とは何が違うんだろう。

「こんなピンボケ写真を褒めてくれたのは先輩だけです。お世辞でもうれしいです。…私は先輩の撮る写真の方が素敵だと思います。ただ、完成しすぎていて絵のようだと感じるんですが、先輩の写真には先輩が伝えたいものがはっきりと映っていますから。私の写真には私の思いは映らないから」

言われて初めて気が付いた。彼女の写真は被写体の思いは映っているのだが、彼女自身の意図は感じられない。自分の感情は写真の中には入れないで被写体の思いだけを映すことを信条にしているものとばかり思っていたがどうやら違ったみたいだ。彼女は自分の写真に自分の感情を入れたがっている。それなのにどうして彼女の写真からは彼女のことは何も感じるできないのだろう。思考すると一つの考えが頭をよぎる。

「たぶん君の写真は被写体に寄り過ぎてているんだと思う。被写体が100%で君の感情が入り込む余地がないんだろうね。被写体70、君の感情30くらいで撮って見たら」

自分でも何を言っているのかよくわからない。

「なんだか、難しい話ですね。でも頑張ってみます。ありがとうございました」

微笑む彼女は無邪気そのものだった。初めて本当の彼女を見た気がする。柔らかい笑顔をする子だ。

「僕も何言ってるのかわからなくなってきちゃった。ごめんね。そろそろ寒くなってきたし部室に戻ろうか」

外は少しずつ赤みがかかり冷たい風が吹き始める。戻る途中はたわいもない話をした。部室に戻るころには、僕は彼女を瞳と呼び、彼女は僕を雄介さんと呼んでいた。

秋口になり、肌寒くなると、写真部にくるメンバーも固定される。僕も瞳もそのメンバーの一人だった。僕が瞳に抱いている感情は恋愛なのかどうかとも分からないまま、僕と彼女の微妙な関係は続いていた。彼女はというと、僕や本などでいろいろと写真の技術を身に着け、めきめき成長しているところだ。そろそろコンテストが近い。ぼくは結局またファインダーの中に絵を描いた。知り合いに頼み込み二人で手を握ってもらい、光を当て影を作り、握った手を放す瞬間の

影を幾重も撮り続けた。僕が伝えたい寂しさが映り込んだ写真がやっと撮れ、コンテストに応募した。その時に思ったのは、この写真が瞳の写真に負けてくれることだった。瞳もこのコンテストに参加することは知っていたので、あえて彼女がどんな写真を出したのか聞かなかった。どんな写真でもいい、瞳の写真の方が評価されるべきだ。

結果は瞳の写真は落選。僕の写真がまた一位となった。評価には完成度が群を抜いている、この風景に出会えることが奇跡であり写真家として神に認められているようだと言われていた。

違う。違うんだ。何もかも違う。前提が違う。これは写真じゃない。

コンテストの結果が出た後、お祝いを兼ねた飲み会が開かれた。瞳も出席していたが僕とは目を合わせる気がないようだ。飲み会が終わり僕が家に帰ろうとすると瞳が僕の横を歩き始めた。

「コンテストおめでとうございます。あの写真、私も見ました。とてもよかったです。私のよりずっと……」

ここで、瞳の写真の方が僕は好きだとは言えなかった。どんな言葉が彼女を傷つけるのかわからない。

「そういえば、僕はまだ瞳の写真を見てないな……よかったら見せてくれない？」

僕は自分の写真より瞳の写真が見たい。

「いいですよ。でも……」

歯切れが悪かったが瞳はカバンからカメラを取り出し、僕に写真を見せてくれた。そこに映っていたのはベットで上半身を起こしながらカメラの方を向いている男性だった。この写真から感じ取ったものに吐き気とどこに向けたらいいのかわからない怒りを覚えた。この感情は何だろうか？嫉妬なのか？わからない。分かりたくない。とても背徳的で魅惑的なその写真は評価とは別の次元のものに感じられた。

「……」

何も言えなかった。口を開けば怒りが嫉妬が悲しみが溢れそうなのだ。

彼女は僕の方を見ている。僕も無言で彼女の方を見る。感情と名のつく前のより原始的なものが僕の心をかき乱す。

「この写真は……、いや、違いますね。私はただ雄介さんに甘えていただけだった気がします。雄介さんは私の噂を知っていても変わらずに接してくれてましたから。」

そう、知っていた。容姿のせいや瞳の恋愛事情はなにかと耳にすることが多かった。瞳は一年の中でもかなりの容姿の良い男性と付き合っていたのだが、他の男性とも寝ていたと。曰く、顔が良い男性なら大体よしとする女性なのだと。

「噂には聞いていたけど、こうして写真として見るとさすがに辛いものがあるかな」

やっと言葉が出た。言って気づいたことだが、どうやら僕は彼女の写真を見て辛かったようだ。今、僕はどんな顔をしているのだろう。

「ずるいことを言うかもしれませんが、何も言わないし私を求めてこないからこそ雄介さんの傍にいたかったんです。余計なことを考えずに写真のことや思ったことを言える先輩の傍だけが本当の私を出せる場所だったんだと思います」

確かに、ときおり大学で見かける彼女の顔は作り物のようだった。今、僕の目の前にいる彼女はとても悲しそうで今にも泣きそうな声色をしている。僕らは恋愛とは違う何かで結ばれているのかもしれない。もっと深くでもっと絡み合って。分からないのに分かるのだ。

「良かった。なんとなくだけど分かった気がするし嬉しかったよ。僕の隣は君が来た時のことを考えて空けといておくから」

これでよかったのだろうか。もっと彼女の心に踏み込むべきなのではないか。知りたいと思えば思うほど知ることの怖さに押しつぶされる。

「ありがとうございます」

涙を流しながら彼女は囁いたのだった。

三年の冬、すっかり寒くなり白が目立つようになってきた。今日、僕は瞳に部室に行く前に大学の屋上に呼び出された。コンテスト後の飲み会後の数週間は少しぎこちなかったが、もうすっかり元に戻っていたのでどんな用件で呼び出されたのか分からなかった。階段を上り屋上のドアを開ける。日の光に照らされた瞳がこっちを見て微笑んでいた。

「どうしたの？こんなところに呼び出して、告白でもしてくれるの？」

急に視界が明るくなり目を細めながら、瞳に問いかける。

「まあ、そんなところですよ。雄介さん」

その言葉に胸騒ぎがしたが努めて平静を装おう。

「期待しちゃうようなことは言わないでくれよ。なんか今日の瞳、変だぞ」

何が何だか分からない。

「そうですね、ごめんなさい。今日は雄介さんに私のことを話しておきたくて。雄介さんは私の写真には私の感情が映ってないって言ってましたよね。それってたぶん、私が本当にその感情を知らないからだと思うんです」

彼女の写真の傾向は相変わらずである。技術がよくなり、ピンボケはしなくなったのだがより一層、被写体の感情だけが強調されるばかりだった。

「それは、飛躍しすぎじゃないかな。君にだって感情はあるだろ」

僕よりも多くの人を愛し、多くの人に愛されているんだから、瞳はきっと感情豊かな人なのだろう。

「どうなんでしょうか。ただ、私は本当に誰かを好きになったことなんて一度もないと思いますよ。告白したことは一度もないですし、告白されても一度もドキドキなんてしたことないですから」

ならどうして、他人を受け入れるようなことを彼女はするのだろう。

「瞳がいろんな男性と寝たっていう噂も聞いたよ。感情は恋愛だけじゃないもっと他にもいろいろあるでしょ」

僕は何を言っているのだろう。

「私はいろんな感情を知りたかっただけなんです。誰かを慕う気持ちも、恨む気持ちも、愛する

気持ちも。私はうまくそれができない。でも周りの人は息を吸うようにいろんな感情を表に出せる。レンズ越しだとそれが私には際立って見えました。だから私は写真を撮ったんだと思います。恋愛ごっこもそう、求められたから応じただけです。求められ続ければ求めてくる人の気持ちも分かってくるものだと思っていました。……なんだか疲れてしまったみたいです」

感情豊かだと思っていた瞳が、実は最も感情を求めていた。その事実が胸に突き刺さる。分かり合えているものだと思っていた。だが、今は瞳を遠くに感じる。

「……瞳にだって感情はあるだろ。なんなら僕も協力する。二人なら見つけれるものもあるかもしれないだろ」

遠くに行ってしまった瞳を少しでも僕のもとへ近づけさせたい。

「雄介さんは優しいんですね。少しだけ、躊躇しちゃうところでした。」

彼女はなんの迷いもなくこちらに向き直りながら屋上から身を乗り出した。なぜだろう、僕はカメラを構えたのだ。そして、落ちていく彼女に向かってシャッターを切った。僕が撮った写真には落ちながらも満面の笑みを浮かべる瞳の姿が映っていた。死ぬには不自然な笑顔、とても美しい写真だ。写真からは彼女の溢れんばかりの感情が映っていた。

彼女の死をきっかけに僕は写真を撮れるようになった。ファインダーの中にたまに彼女の面影を見つけることができる。それを撮ると、不思議と良い写真が撮れるのだ。ありがとう、写真の神様。

私がまだ幼いころに父親が死んだ。それ以来、母は仕事と男のことにしか興味を示さなくなった。何度も違う男と母の食事に付き合わされた。母に似て私も美人と呼ばれる類だと知ったのは中学に入って、よく男性から声を掛けられるようになってからだ。ただ、男性というものがどういうものなのかは母と共に家に来る数々の男から学んでいた。彼らは力が強く、傲慢で、無知なのだ。そして私は母にとってお荷物でしかないことも知っていた。だから私は、母に好かれるように、訪ねてきた男には子供らしい無邪気な笑顔で迎え入れ、夜な夜な聞こえてくる声には無知を装い続けた。唯一の楽しみといえば母から買ってもらった携帯のカメラで写真を撮ることだった。最初は人、特に家族を好んで撮っていた。私にないものを私は一生懸命フレームに収めようとした。次に、理解はしているが私が持ち合わせていない感情を持つ人たちを撮り始めた。私



にはないから見たい。私にはないから残しておきたい。

私が通っていた高校には写真部がなく、ずっと一人で撮っていたので、大学では写真部に入ろうと決めていた。他の人たちはどんな写真を撮っているのだろう。緊張と好奇心で少しだけ歩く速度が速くなる。写真部の前まで来てドアを開けた。

「すみません。部活の見学に来ました。」

女性に促され、男性がこちらに来る。構わず部屋に飾られている写真を見渡す。そこには花瓶に花が入っているだけの大きな写真があった。使われていない教室に萌ゆる花が1輪だけ花瓶に活けてある写真。私は途端に怖くなった。咲き誇る花が散っていく姿が頭から離れない。私は今、恐怖という感情が手に取るように分かる。それほどに完成した写真だった。まるで絵のような。聞くと、私に話しかけてきた男性が撮った写真だったようだ。これ以上ここにいたくない。それほどに私はあの写真を恐れた。気づくと足早に写真部を後にしていた。

だいぶ大学生活にも慣れてきた五月ごろ、私は告白してきたそこそこイケメンと言われる子と付き合うことにした。これで、他の人からアプローチされることも減るだろうし、ステータス的にも問題ない。やっと、好きな写真に取り組める。写真部にも慣れてきて、みんなの顔と名前が一致するようになった。写真部の活動で私が好きなのは大学を歩きながら写真を撮るというもの。最初はみんなと行動していたけど、今は大体、一人で好き勝手歩いている。それと、あの写真を撮った例の先輩は雄介と言うらしい。あの人は基本的にいつも一人だしほとんど人前では写真を撮らない。でも、彼の写真の知識はとてもすごいし見る目もあるからみんなから信頼されているようだった。

一人でいろいろと考えていると斜め前を歩いていた男性が急に立ち止まり一点を見つめる。その先には一人の女性が歩いていた。彼の表情を見ると、とても嬉しそうだ。彼女に会って話したいという思いが伝わってくる。私も誰かをこんな風に愛したい。自然とカメラを構えシャッターを切る。撮れたのはピンボケした男性の姿だった。

「あーあ、またピンボケしちゃった」

消すか消さないかで迷っていると前方からこっちに向かってくる人がいることに気が付いた。あの先輩だ。あの先輩の写真からは強烈に感情が伝わってくるのに、どうしてあの先輩からは何も

感じもないんだろう？あの先輩を撮ったら何か感じるかもしれない。

「カシャ」

ダメだ。少しだけ悩んでいる様子だったけどそれ以上は分からない。先輩がシャッター音に気が付きこっちに来る。もう一枚。

「カシャ」

画面を見る。やっぱり分からない。

「やっぱりまたダメでした」

先輩が微笑み、私のカメラを見る。私の写真を見た先輩はなぜかとても驚いていた。それから先輩は私の写真を見始めた。その顔は真剣そのものでカメラがあれば今の先輩の顔を撮りたいのにそのカメラは今、先輩が見ている。距離が近い。でも不思議と嫌悪感を抱かない。もっと、そばに……急に恥ずかしくなってきた。先輩をからかうと露骨に距離を取られてしまった。それから先輩とたくさん話すことができた。どうやら、先輩は写真の神様という単語が好きらしい。何より嬉しかったのは先輩が私の写真を好きだと言ってくれたことだ。それに先輩からいろいろとアドバイスももらった。先輩を雄介さんと呼ぶこともできた。雄介さんと話すのは他の男性と違って楽しい。今までは、好きになってくれた人の中から選び、与えられたものを、求めてきた手を拒むことはしなかった。だけど、今、私は雄介さんを求め始めたのかもしれない。

秋に入ると私は自分がよく分からなくなっていた。そして、雄介さんのことも。考えれば考えるほど分からなくなる。どうして雄介さんは他の男のように私を求めてこないのだろうか？私のことが嫌いなのか？嫌いなのにどうして傍にいさせてくれるのか？どうしてそんなに優しいのか？分からないから知りたくなる。だから、私は求めてきた手を次々と握り返した。求めてくる男のことならだいたい分かるようになったころには私はだれとでも寝る女だと噂されていた。もちろん写真部にも広まっていることも雄介さんの耳にも届いていることも。ただ、雄介さんは相も変わらず私を受け入れ優しく接してくれた。私が嫌だったことは噂のことじゃない。さらに雄介さんのことが分からなくなってきたことだ。そんな時、コンテストがあると聞いた。それも去年、雄介さんが一位を撮ったコンテスト。私はこれに応募することにした。作品のテーマは愛。それから私は求めてきた男たちに「愛してる？」と尋ねることにした。みんなきまって「愛してるよ」と言う。そんな時、私は気づいてしまった。私に愛してるという顔がみな同じだということに。これが愛。この顔を写真に撮って応募しよう。

そして、最高の愛が撮れ、私はその写真を応募した。結果は落選、写真の神様は私のことが嫌いなようだ。一位を撮ったのは雄介さんだった。雄介さんの写真は握った手を解く瞬間の影を映した写真だった。その写真を見ると寂しさで胸がいっぱいになる。雄介さんの写真から寂しさを学んだ。どうやら、ここ最近、私は寂しかったようだ。

雄介さんを祝う飲み会の日、私はどんな顔をして雄介さんに会えばいいのか分からなかった。怖いのだ。私の写真を見せるのが。私は私なりの愛を写真に収めた。あれが私の知っている私の世界の愛なのだ。でも雄介さんの愛は違った。雄介さんの写真を見て私は思った。会って話している時はとても楽しくて、別れの時間が来ると寂しくなる、それが雄介さんにとっての愛。それはまさに私がずっと雄介さんに対して抱いてきた思いだった。これが愛。こんな感情に気づきたくなかった。私はもう汚れすぎている。こんな醜い片想いは止めにしよう。一緒に帰るとき、本音の中に嘘を織り交ぜて話した。ただ、抑えきれない思いは涙となって頬を伝った。

冬になり寒くなったある日、母の知り合いが母のいない時間帯に訪ねてきた。どうやら、母より若い子の方が好みだったらしい。私は拒めば母に怒られると思い、求めに応じた。ところが、それを知った母は怒り狂い泣き叫んだ。母の中で何かが壊れたらしい、その日から母は精神科に入院することになった。一度だけ見舞いに行ったら、「あなたなんか生むんじゃなかった。死んじゃえ」と言われてしまった。病院のベットで暴れ始める母を見たとき、未来の私がそこにいるような気がした。他人の歪な感情を貰い続け肥えた私が行きつく先はきっと今の母親の姿なのだろう。母親のお金を頼りにして大学に通っていたので母親なしでは生きていけない。母親の知人からは「俺のところに来たら、学費も生活費も出してやる」と言われていたが今度は彼のおもちやとなって生活しなければならないと思うと嫌気がさす。なら、いっそのまま死にたい。私と一緒にいたいと思える人の傍で。死ぬならいい天気の日が良い。新潟の冬は晴れの日がほとんどない。運命の日が来た。今日は朝から晴れていた。今日なら死ねる。私は雄介さんを屋上に呼び出した。最後に雄介さんを見てから死にたい。そう思い、雄介さんの方を見ながら飛び降りた。不意に、雄介さんがカメラを構えるのが見えた。私はとても大事なことに気づいてしまった。雄介さんが私を撮ってくれたことは一度もないのだ。笑わなきゃ。とびきりいい笑顔にしよう。そう言えば、雄介さんは自分は写真の神様に嫌われてるって言ってたっけ。お願い、写真の神様、雄介さんを許してあげて。

あとがき

個人的には本文よりもあとがきの方が面白いと思われる人間になりたいです。

それから最近、小説は読んでません。ごめんなさい。読むのは自己啓発ばっかです。後、映画にはまっています。ぼろぼろに泣ける映画が好きです。

まず言いたいことを列挙していきますね。

- ・俺はホモじゃないです。
- ・化物語の新作映画出たのでお金を使ってください。
- ・indigo la endとずっと真夜中ならいいのってというアーティストにはまっています。

さて、この話は最近の写真アプリの加工はすごいな一ってところから着想を得ました。実物よりも美味しそうに、実物よりも可愛くあるいはイケメンに撮るのが当たり前になった気がします。これは本当に写真の役割かな？と、写真というより絵に近くない？と。写真の役割と絵の役割の境界が曖昧になった気がしませんか？何ですか、写真要素がこの小説には少ないって？そうなんですよ。ごめんなさい。まったく写真の知識がないまま書きました。

次のテーマは人間関係ですかね。ここでいきなり引用です。「それでも俺は...俺は本物が欲しい!」「偽物の方が圧倒的に価値がある。そこに本物になろうという意思があるだけ偽物の方が本物より本物だ」いいセリフですよ。実は一つ目の引用ですが、このセリフの前にこんなことも言ってます。「そんなこと絶対にできないのは知っている。そんなものに手が届かないのも分かっている」と。なにが言いたいのかというと、この世に本物なんてないんですよ。本物は理想と言い換えることができます。理想を求めるから努力する。本物を求めるから努力する。よって偽物に価値が生まれる。皆さんは理想を持って努力していますか？なああと生きているだけでは偽物以下かもしれませんよ。自己啓発本ばっか読んでるせいか話がだいぶそれましたね。人間関係がテーマでした。俺も以前は本物と呼べる人間関係が欲しいと思っていました。映画のように、お互いのことを理解しあい、何でも言える関係、そんな人がいたらいいなど。いやー無理ですね。無理です。現実には裏切られ、嘘をつかれ、隠され、悪口の一つや二つこぼれるものです。結局は相手の悪いところ、汚いところ、嫌なところをどこまで自分が許容できるかが人間関係のポイントかもしれません。人間は多面的ですからどんなクズにも良いところはあると思います。その良さに気づける人間がすごいと思いますか？僕は残りのクズい部分を許容して付き合っていける人の方がすごいと思います。それと分かり合うってのもかなり難しいと思います。劇中の二人のように分かり合えていると思っていても大概どこかずれているんです。疲れました。要は言いたいことは、クリスマス近いですね。予定が埋まってる人はみんな〇んじゃえ！次は同性愛をテーマにして書きたいです。ホモじゃないです。

枯れない愛

大島治輔

俺がまだ年端のいかねえガキンチョだったころの話サ。俺のばあちゃんが大層大事にしていたサボテンがあったんだ。子供の顔くらいある立派なサボテンでな。ばあちゃんはそれはそれは楽しそうにサボテンの世話をしてやがった。毎日毎日話しかけながら水をやって、天気の良い日には縁側で一緒に日向ぼっこをして。全く、植木鉢も軽くねえのってのに。老体に鞭打ってご苦労なこった。花が咲いた日にゃあ、ばあちゃん手ずからケーキ焼いてお祝いしたぜ。その時、おこぼれにあずかった俺は聞いてみたんだ。サボテン、そんなに良いのかって。するとばあちゃんはこう言った。

「自分でお世話するのってとても楽しいの。もうこれはおばあちゃんの生きがいよ。最近我が子のようにも見えてきて」

何せ昔のことなんでな。はっきりとは覚えちゃいねエが、大体こんな感じだったはずだ。

まあこのサボテン、その後一、二ヶ月くらいで枯れちまったんだけどな。今思えば手の掛け過ぎだったんだろうよ。サボテンってあんま水やらなくても平気なんだろ？ ばあちゃんはあら残念、って感じで、土ごと枯れたサボテンを庭に放って、植木鉢をすっからかんにすると、二週間後くらいにはもう一回り小さいサボテンがそこに植えられてたんだ。

その後間もなくばあちゃんは死にしまった。くも膜下出血だと。突然倒れて、病院に運ばれて、そのまま意識は戻ることなくぽっくり逝った。多分最後に話したのは俺だ。朝学校に行く前、授業で浴衣使うっつって慌てて用意してた時だ。ばあちゃんはいつも通り、口調も足取りもしっかりとしてた。朝イチで押しかけてきた孫に嫌な顔一つせず、テキパキと箆笥から必要な物一式揃えて俺を見送った。

葬式って親戚総員みんな集まるじゃん？ 俺、従兄弟とかいなくて、来る人みんな親より年上の爺さん婆さんだったんだよ。俺がちょっと話すとみんな頬を緩めて「元気だね」「可愛いわね」って褒めてくれるワケ。子供心に悪い気しないモンだから、もっともっとなんか愛想振りまいてお喋りしちゃうん。いやホントガキの頃って良かったよな一ホント。

まあそんなことはどうでもよくて。いやそうでもないか？ まあ逆に考えてみてくれよ。ガキ一

人がおどけて、それをみんなが笑って。そういう雰囲気だったんだ。ばあちゃんの葬式。何一つか、もうこの人はもう十分に生きて、充実した人生を送った人だった、それを純粋に称えてた感じ。ばあちゃんの享年八十六だぜ。すごくない？ ……え、今じゃそこまで珍しくない？ いや、すげえだろ。四捨五入すれば九十だぜ。太平洋戦争生き抜いてきたお人だぜ。十二分に大往生だろ。母ちゃんも同じこと言ってた。

「おばあちゃん、病気で苦しんだりせずに逝けてよかったね。きっと生きているうちの行いが良かったからだよ」

周りの人はみんな同意していた。俺も今でもそう思う。ばあちゃんは本当にしっかりした人だったから。きっと今頃天国か極楽かでじいちゃんとよろしくやっててるんじゃないのって。まあ俺じいちゃんに会ったことないから知らねエけど。じいちゃん、俺が腹ン中いる時に死にしまったから。

ちなみにばあちゃんが死ぬ直前に持ってきたサボテンなんだけど、アレ結構すごくて。俺の気まぐれと雨水だけですげえ長生きしてんの。どれくらいかはちょっと忘れたけど、少なくともばあちゃんの三回忌の頃には花まで咲いちゃったんだ。ばあちゃんの墓前に掲げようと思って花びら摘もうとしたら結構派手に棘が刺さって、も一超痛かった！ まあ、今となっちゃ笑い話だけどサ。あ、その時の傷痕まだ残ってんだけど、見る？

青年は小首をかしげて目の前の女性にへラっと笑いかけた。少年と称した方がしっくりくるほどの無邪気な笑顔に、歪なものなど何一つ無い。彼はあくまで自然体で、本当に世間話の一環で自分の過去を話しているような、そんな様子でさえあった。明るい茶髪に砕けた口調は軽薄な印象を受けるが、黙った顔さえ微笑んでいるように見える、普通に生活していれば人好きしそうな容貌であろう。

対する妙齢の女性は、やつれた頬に困惑を乗せ荒れた唇を一文字に引き結びながら青年の話を聞いていた。シンプルなバレッタで髪を纏め、露わになった首筋がゴクリ、と波打つ。彼女は思わず生唾を飲み込んだ。

「……それが、一体何の関係がある？」

女性の言葉にあ、と青年は声をあげた。彼の昔話は先程の彼女の問いの答えにはなっていない。彼女の意図を察した青年ははにかみながら頭をかいた。ジャラ、と彼の脈に回った手錠が音を鳴らす。

「いやー、すみません。咄嗟にこの話を思い出しちゃったモンで、つい」

そう言って青年はまた笑った。例えば彼が待ち合わせの時間に遅刻したとしても、毒気を抜かれてうっかり許してしまいそうな、そんな屈託のない笑顔だった。

女性は歯を食いしばった。ただただ、この親子ほど年の離れた青年の考えていることが分からなかった。

殺人未遂8件。殺人5件。これこそが彼が今ここにいる理由なのだから。

「改めて聞くけれど、貴方はどうして人を殺したのですか？」

女性は毅然と、物分りの悪い子供にきつく言い含めるような口調で先程と同じ質問をした。青年は困ったような、バツの悪そうな、でもやっぱりどこかのほほんとした顔をしていた。

「どうしてって言われても、考えてみると結構ムズくて。めっちゃ機嫌悪いときにめっちゃ胸糞悪い奴がいたって時もあるし、あんまりにも可哀そうで仕方なくてって時もあるし。まあでも大体はなんとなく、かなあ。食べたパンの個数は覚えていないタイプなんだよね、俺」

うーん、と唸りながら、青年はふざけているように見えるが、それなりに真剣に理由を考えているようだった。女性は胸を巢食う義憤を必死に鉄仮面の下に覆い隠した。頭の中で専門家による精神分析も視野に入れつつ、殺人鬼<sup>青年</sup>の性質をパターン化していく。

「人を殺して楽しい？」

「楽しいんじゃないの、かな？ 多分」

「グロテスクなものが好きとか、人を甚振る趣味は？」

「それはねエよ。むしろ声上げられたりぐちゃぐちゃになるまでとかは嫌。俺のヤツ、いつも必要最低限の傷しか無エじゃん」

「被害者に対して個人的な関わりは？」

「覚えてる限りでは、さっき言ったのくらい？ 胸糞悪い方は行きつけの居酒屋の常連で、可哀そうな方は直前に逆ナンされて一緒に飲んでた」

分からない。

彼が何故殺人なんていう大罪を犯したのか。

三つ目にして女性からの質問は止まった。分かったことと言えば彼に情状酌量の余地は無いだろうということくらいだ。

金。愛憎。疲労。絶望。謀略。憤怒。快楽。

殺人とは何か大きなモノ——それが感情であれ、損得であれ——に突き動かされて生じる摩擦のようなもの。それが女性の持論であった。加害者でさえ、いや加害者だからこそ、取り調べで露見した「本体」はその偉大な「モノ」によって文字通り人生を狂わされる程にすり減っていた。実際彼女は今までの被疑者に対し義憤と同時に、真っ当に生きていけなかった歪みに憐憫すら感じていた。

しかし、この青年はどうだろうか。彼とそこら辺で歩いている人々の一体何が違うのか。事前調査によって彼が心身共に健康体で家庭環境も人間関係も良好であったことは分かっている。本人に言質も取った。

だったら何故、彼はこんな不自然な側へ平然としているのだ。

するとそれまで女性につられて静かにしていた青年が突然「はい！」と元気よく手を挙げた。急な動きに手錠が金切り声で悲鳴を上げる。大声と音に驚く女性を尻目に、彼は目をキラキラさせて言った。

「分かった、俺分かったかも！ ねえオネーサン、プチプチシートってどんな時に漬す？」



「……暇な、時？」

「それって楽しい？」

「いや、別に、普通」

女性はほとんど気圧されながらも、聞かれるがままに回答した。殺人とプチプチシート。まるで意味が分からない。彼は何が言いたいのか。脳みそが茹だって限界だと、これ以上は駄目だと本能が警報を鳴らしている。

じゃあ、と彼の高揚した声が続く。パズルが解けて喜ぶ少年のような、クシャッとしたえくぼがやけに輝いて見えた。

「どうしてプチプチシート潰すの？」

「そこに……手元に、それがある、から」

「それだよ！」

脳の表面張力があふれ出す。緒の切れた血は突沸して、世界がモザイク調に見えた。女性は腕を振りかぶっていた。

大の男たちに脇を固められて、少年にも見える男は部屋を後にしようとしている。彼の左頬にはくっきりと赤い跡がついていた。青年は痛みで滲んだ瞳を肩口で拭うと、やはりチャーミングな笑みを浮かべて、未だ肩で息をする女性に声をかけた。

「あのさあ。俺、やっぱり死刑かな」

女性は強く歯を食いしばったままキッと青年を睨みつけた。そんな彼女に何を思ったのか、青年は慌てて弁護した。

「死にたくないとか、そんなんじゃねエよ。むしろこんなゴミ箱ン中でよく遊んでたほうだぜ。充分じゃん。ただ電気椅子には座ってみたいなー、と」

「……全ては裁判での判決次第です。あと日本は絞首刑なので電気椅子には座れません」

「それに十分に生きたからといって、貴方は未来永劫お婆様に会うことはありません、ってか？」

青年の声は弾むようなリズムを帯びていた。こみ上げてくる怒りを、スーツの裾を強く、破れるほど強く握って押し留める。

最後に軽く一礼をすると、青年は取調室から連れていかれた。彼の飾らない笑顔が、彼女にはもう悪魔の微笑みにしか見えない。遠ざかる足音を聞きながら、彼女はようやく力んだ顎の隙間から湿った息を吐き出せた。

人の命はそよ風に晒された綿帽子。

人は死ぬ。だから人は死ぬくらいじゃ歩みは止まらない。どんなに大切な人でも、<sup>現実</sup>明日の無い<sup>愛</sup>死人ごときに何をできよう。

祖母も両親も親戚も。

害悪オヤジに媚びへつらう取り巻きも彼女をこっぴどく振ったヒモ男も。

『判決も罰則も関係ない！ 貴方は、私が！ 地獄の窯に沈めてやる！』

捕まったらベルトコンベアーの上だと思っていたのに。

「案外、愛されてんだな。<sup>俺</sup>殺人鬼って」

青年の脇を固める男たちが怪訝そうな目をこちらに向けてくる。彼らの水晶体に映る熱烈な怒りと恐れに、青年は照れ臭そうに破顔した。

小川 史夏

雨に濡れた土の匂いが、太陽に温められた空気と混ざり合っていた。見上げれば、山々の折り重なる、息苦しいほどの紅葉が迫ってくる。

僕はベンチに腰かけて、ショルダーバッグからゆっくりと手紙を取り出した。それは、少しも傷ついたり汚れたりしてはいけないから。

封筒の宛先人の書いてある面を、まるで手のひらサイズの子犬を愛でるように、たっぷりと時間をかけて、両目で慈しんだ。

そうして、またたっぷりと時間をかけて封を開けた。

「今日は私の思い出話を聞いてほしいのです。

K君は忘れたかもしれない、過去の一瞬の出来事です。

私は、今でもその思い出が、あなたを切なさを伴って思い出す時、一緒に思い出されるのです。

K君と出会ったのは、私が二十一の年のことでした。

大学を中退した私は、途中で採用された地元の百貨店で、事務職をしていました。（それはご存じのことですね。）安さが売りの大型スーパーに最近はお客が集中し、その百貨店の売上は右肩下がりでした。

でも、そんなこと、私には関係ありません。社員食堂の甘い味付けの肉うどんの味と、四階お

もちゃ売り場にいたK君の柔らかい笑顔とが変わらなければ、それで良かったからです。

諦めと愚痴が充満するこの会社で、K君の清潔さは異様なほど冴えわたっていました。

節電のために薄暗い社員食堂に、午後の日差しが冷たいガラスを通り抜けて、K君の横顔を照らす時が、K君の清潔さを最も鮮明にする時でした。

K君の指先が、目線の先の書物の一ページに触れる度に、光に溶けていきます。いつのまにか社員食堂は、K君のばら撒く光の粒でいっぱいになって、私はその中に埋もれて、丸くなって、いつまでも目を閉じて眠っていたいと思いました。

その時、K君がとても小説に似ているということに初めて気が付きました。

この頃の私は、自分の中のぬめりどろりとした、何か汚いようなものを押し流すようにして、小説をひたすら読んでました。

虚構の物語に感じ取るのは、ただ単純に大きな感動です。彼方に広がる太平洋の荒れくれた波しぶき、まっすぐな緑が脳を突き刺す初夏の高原、そんな大自然に言葉を無くしたあの瞬間と同じ感動が、物語に隠れていました。

百数冊の小説を読んで気付いたことは、私にとって自然も小説も、どちらも圧倒的現実であるということでした。

K君と付き合い始めてまだ一年もたたない時のことです。

きっかけは、すごく小さなことだったと思います。

確か、ただでさえ忙しい年末業務の期間に、緊急の顧客対応や、上司に社員全員の特別手当の内訳をまとめてくれるよう頼まれたことなどが重なって、年末までに終えなくてはならない業務が、終わるか不安になった、とかそういうことだったと思います。

自分もこの会社を取り巻く、諦めと愚痴の空気の中に、するすると飲み込まれていきました。

焦ってくると、私はいつも逃げたくなりました。

私はこんな仕事を、いつまでやっている訳ではないのだ。

私は別にいつでも辞めていいのだ。

そうやって、自分のやりたいことではないからという理由を持ってきて、何時でも、何にも本気になれませんでした。

自分を正当化させるためだけに作られた理論にすぎません。

でも、そういうことの繰り返しがやめられませんでした。

そういう悲しさのようなものが塊になって、私の意識とは無関係なところで、勝手に塊だけが大きくなっていきました。

高校生の頃、家族でテレビを見ていたとき、三十半ばの、働く気のないようなことを言っていたフリーターで、だらしない体をした男が映りました。私はその男に猛烈に恐怖を感じたのを思い出しました。

「私、大人になったら、あんな風になるかもしれん。」

そんなようなことを言いました。

「お姉ちゃんは、あんな風にはならんよ。」

妹がその時そう言ってくれました。それでも、恐怖は消えていきませんでした。

いつもならば、ベッドの中で、私がK君の胸板に顔をくっつけるのを合図に、K君が私の頭をゆっくりと撫でてくれるのでした。

私は寝るときになっても、K君の胸板に顔はくっつきませんでした。

K君は、いつもと変わらない表情でした。私には、なんだかそれすらも気に入りませんでした。

「私、他の男のところに今日は泊まるわ。」

身につけてしまった女というものの使い方が、ふとした瞬間に発揮される、そんな自分に呆れていました。

こういうことが、私がこうありたいと憧れる種類の間人たちと深い溝を作っているような気がしました。

K君は泣いているらしく、明かりを消した部屋で、彼の小さなうめき声が聞こえました。

「なんで泣いてるの。」

私はわかりきったことをあえて聞きました。

K君は頭を上げて、私の顔を少しの間見つめて、こう言いました。

「君が苦しそうだから。」

自分のお遊びが別の世界に落ちこちていくのを、私は遠いところから見つめていました。

思い出話は、これで終わりです。

移動の飛行機の中で書き終わりました。機長さんが、目的地の天気をお知らせしています。

あなたにお会いするのが、たまらなく楽しみです。」

---

## 作者あとがき

「この人は自分の感じたことしか書かなかった。」と言われる小説家がいるそうです。（誰だったかは忘れました。）私もそうありたいと思います。それは小説を書くときと、それから数学をするときにおいてです。

（数学は自分が数学をどのように見ているかを数学の言葉を使って表現する場所だと思っています。小説が人間の真理を表現する場所ならば、数学をすることと小説を書くことは、使う文字が異なるだけで、ほとんど同じ行いをしているように思います。

「証明は感性でするものだ。」と、私が尊敬してやまない数学科のH先生も仰っておられました。）

しかし、小説を書くことも、数学も、まだ始めたばかりの私にとって、自分の感じたことを書くことは、とても難しいことです。感じたことが心の中にあっても、それを自分の外に表現することは容易にできませんでした。

だから、この作品も、数学の最近書いた証明も、私にとって、とても恥ずかしいものです。でも、少しでも上手く自分の感じたことを外に表現したいならば、この恥ずかしい経験を積み重ねていかなければならないのだらうと思いました。

たとえ恥ずかしくとも、小説を書くことと数学において、自分の感じたことを書くということを貫いてゆけたらと思います。

ピー

---

ピー

その日栄子は、いつもと同じように、学生生活を送っていた。

「先生、ここわかんないんですけど」

「どこからわからないんだ？」

「最初からです」

教師は嫌そうな顔で三次関数の面積計算を教えた。数学が苦手な女が集められたクラス。中年の数学教師は何度目かわからない説明を始めた。

「この問題はこうやって解くんだ」

教師が黒板に書いたのは、漢数字だった。

「先生、なんかいつもより分かりにくい気が……」

「まあ一度話を最後まで聞け」

白いチョークの跡が、黒板上を埋める。アラビア数字は漢数字に、アルファベットはイロハで書かれていく。

「わかったか？」

一向に理解できない女生徒は、生返事をして黒板をノートに写す。



「先生。最初はわからなかったけど、だんだんわかるようになってきました」

女生徒は気づいていない。

「私たち人間も属する哺乳類、爬虫類、両生類、魚類、そしてそれ以外の脊椎動物は何でしょうか。教えてください、栄子さん」

栄子は女教師から漂う芳香に陶然とした。それは誰もが夢中になるような香りだった。駅子は生徒が騒がないのを、不思議に思った。

「鳥類です」

女教師はぐりぐりとした目で彼女を見た。一瞬、歓声が弾ける。それは嘲笑が混じっているように聞こえる。栄子は怒りというより戸惑いを感じた。

「あなた外に出たことは？」

「……？ありますが」

「なら見たことあるわよね、ピー類」

「え？ピー類よ。教科書の248ページに、種に関することが乗ってるから。読んでおいて。それと地球ヌラマチュックも観るといいわよ。ピーの回は面白かったわ」

女生徒栄子はまたもや違和感に苛まれた。しかし、それよりも恥ずかしさのため、すぐに忘れてしまった。

チャイムが鳴り、西はくれないに染まった。このさき当分夕陽を見ることはないだろう。やせ細った桂が葉を枯らしていた。

外に出ると電柱や、屋上の縁に、見たことのない生き物が止まっている。

「あの生き物は……？」

栄子は、それまで日常的に目にしていた、黒い羽の生えた割と大きな生物を想起した。

「なんで今日はピーが居るんだろう」

「それは、どんな生き物なの？」

栄子の背後で声を掛けるのは、美子だ。

「えーっと、これくらいの大きさで」

「これくらいって、何センチなの？」

「黒い羽が生えてて、瞳も真っ黒で、こういう声で鳴くの」

栄子は鳴いた。複数の生徒が、彼女たちをいぶかしげに見た。

「そうだ、生物室に剥製があったわ」

かすかな芳香が、鼻をくすぐった。生物室には女教師がいて、部活動の指導をしている。

「先生っていつもいい匂いですよね」

「本当？ありがとう」

栄子はまたもや、それに夢中になった。

「それって、何の香りですか？」

「これはね、ピーの生殖腺からとった香料で作られているの。日本古来から伝わっている、伝統的な香りなの」

燈火のした、妖艶に装うケヤキ。彼らが作った絨毯を踏み拉く二人の女生徒。

「あの香りは嗅いだことがなかった。すごくいい香り」

「そう？私のおばあちゃん、あんな香りよ。それより、探してた剥製はあったの？」

「先生の話が長くて忘れてた……明日また見に行こうよ」

「それで結局、ピーって何なのかしらね」

聞き覚えのない咆哮が聞こえた。

『主従の秘密 メイドの花園』

瀬戸 若菜

水音。蛇口から落ちる雫ほどの清楚も、雨音ほどの秩序も持ち合わせない、言うなれば――淫靡。

白磁を撫ぜ、舐るそれが、目線だけを寄越す。応えもしない無礼な奴とは思うものの、そのための器官は私の足に囚われて忙しそうだ。

「やめなさい」

「はい。私の奉仕では満足いただけませんでしたでしょうか。あの、もっと精進いたしますので  
いとま暇 にご勤弁願いますじゅるる」

「やめなさいって言うてるでしょ！ それ以前に、なぜ貴女は私の足を、その、舐めているのかしら」

「はい。僭越ながら答えさせていただきますと、主人の足を舐めることで服従の意とともに恭順のこころを伝え、ふたりの絆を深めることができると、教本から学んだからでございます」

「何という本？」

「『主従の秘密 メイドの花園』でございます」

「官能小説みたいなタイトルね」

「ラフランス書院文庫でございます」

「官能小説じゃないの！ 没収！」

「そんなご無体な！」

「で、申し開きはある？」

「私の技量が及ばなかったこと、深くお詫び申し上げます」

「そっちじゃないわよ！ そもそもそういうことをするなって言ってるの」

「しかし主従の絆を深めるためには、粘膜接触が一番であると」

「生々しいわねえ。誰が言ってたのよ」

「ご主人様が」

「フィクションと現実を混ぜこぜするのはやめたほうがいいわ」

「つまり、私のお嬢様は実在しないと？」

「いつから私は貴女のものになったのよ」

「あら？ お嬢様、どちらへ行かれたのですか？ お嬢様？」

「いるわよ！ ここに！ 架空の存在じゃないわ！ ちょっと！」

「お嬢様ー？」

「お嬢様、お布団にくるまってどうなさいました」

「涙を隠しているのよ」

「はあ。しかしそろそろ朝食のお時間となります。お召し物を替えましょう」

「朝っぱらからあんなことしていたのね貴女。着替えはそこに置いておいて。すぐ行くわ」

「僭越ながら私もお手伝いいたします」

「それは？」

「ご主人様の仰せ付けです」

「だからフィクションと現実を一緒にするなと——あっ、どこ触ってるの！ やだ、こら！」

「よいではございませんか、よいではございませんか」

「よくない！」

「まだ着替えただけよ？ なぜこれほど疲れているのかしら」

「お嬢様、夜更かしはいけません。乙女の大敵でございます」

「貴女のせいよ！ 昨日は十時には寝たわ」

「そうでしたか？ お言葉ですが、私の記憶が正しければ、昨夜は零時ごろに」

「わーっ！ わーっ！」

「枕元から許嫁様の」

「わあーっ！ わあーっ！ 健全よ！ けんぜーん！」

「もう疲れたわ。朝食はどちらに？」

「本日は旦那様が御座しますので、食堂での朝食となります」

「あら、珍しいわね。てっきりまた数週間帰ってこないと思っていたのに」

「奥様、お嬢様のご姉弟の他、許嫁様も同席なさるとか」

「まるで家族会議みたいね。何かあったの？」

「昨夜のお嬢様の行動を報告させていただいたところ、皆様飛んでお帰りに」

「家族会議じゃないの！」

「然様でございます」

「他人事だからって！」

「お嬢様、布団にくるまってどうなさいましたか」

「涙を隠しているのよ」

「皆様喜んでいらしたではありませんか」

「貴女も一度あの生暖かい目で見られて御覧なさい。減らず口も少しは」

「あっ、想像したら。お嬢様、花摘みに参りますのでわずかばかり暇をいただきます」

「一月は戻らなくていいわ」

おわれ

あとがき



デッキィ八〇ー新潟大学店プレオープン。

『主従の秘密 メイドの花園』は実在しません。あしからず。

案山子 2019年冬号

<http://p.booklog.jp/book/126200>

著者：新潟大学文芸部

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sindaibungei/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/126200>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト